

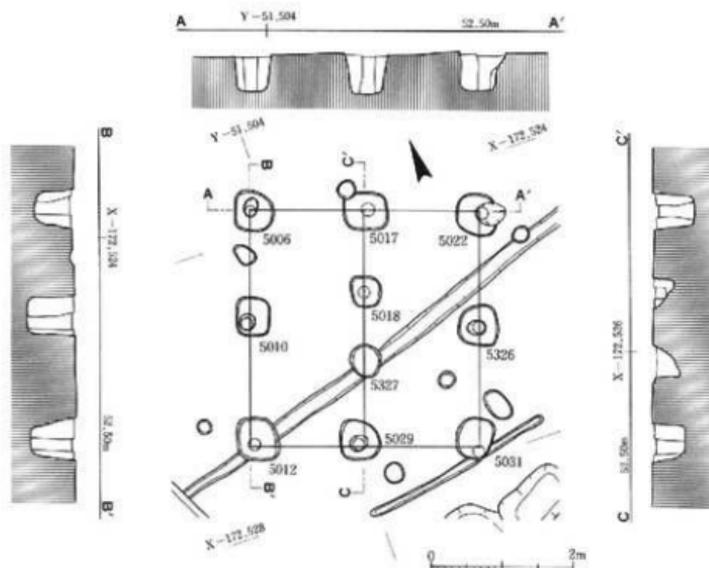
5650-O B (第124図, 図版60)

5区の西北隅で検出された掘立柱建物。南北2間(総長3.33m)・東西2間(総長3.17m)の規模を有する。中央の柱通りに、南北に並ぶ2個の柱穴があり、大引(床桁)を受ける東柱と考えられる。床板は直接この上に、これと直交するかたちで張られたのであろう。したがって、南北方向の総長が東西方向よりもやや長いこととあわせて、前者を桁行とする南北棟の倉庫と推定される。この場合の棟方位は、 $N-19^{\circ}-E$ となる。

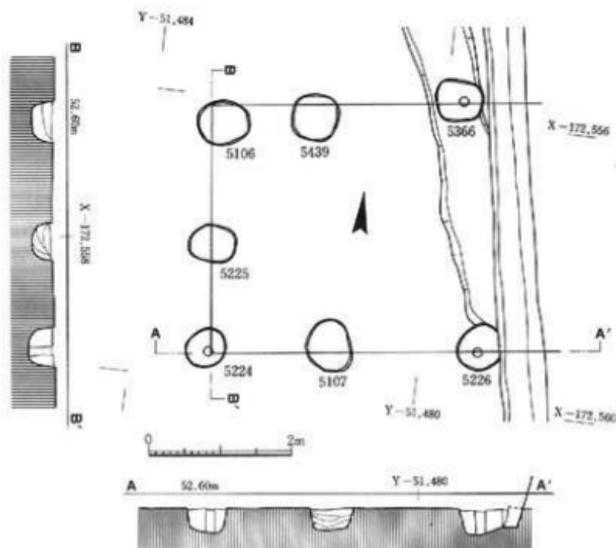
柱は抜き取られるか、切り取られているが、5327-O Pの東柱を除いて、全て柱位置を確定することができた。それによると、桁行柱間については $1.67 \pm 0.06m$ 、梁間柱間については $1.59 \pm 0.08m$ の値が得られる。それぞれ、高麗尺の4.5ないし4.75尺と4.5尺、唐尺(天平尺)の5.5尺と5.25ないし5.5尺に相当するとみられる。

柱掘方は、平面が方形に近いものが多い。東柱を除いても、平均一辺長(径)0.55mとやや小型であるが、一方、柱径は、側柱で平均17.0cmと太い。

次項で述べる、後代の掘立柱建物5700-O Bの柱掘方によって切られる。



第124図 5650-O B 平面・断面図 (1/80)



第125図 5750-OB 平面・断面図 (1/80)

出土遺物

5017-OPの柱痕跡の部分から、土師器の壺または甕の破片が出土しているが、図示できない。時期の指標ともなりがたく、5650-OBの年代は、遺物の上からは不明である。

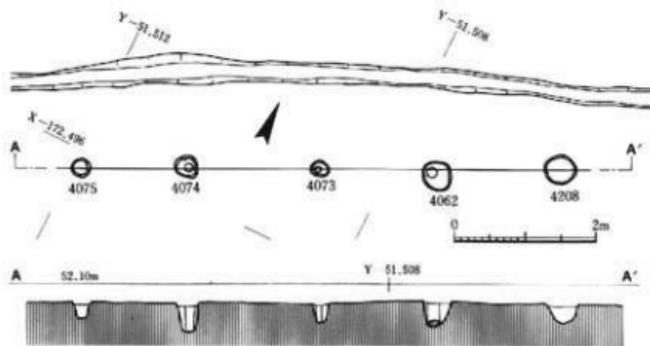
5750-OB (第125図)

5区のはほぼ中央、調査区の東壁沿いで検出された東西棟建物。桁行2間(総長3.73m)以上、梁間2間(総長3.50m)の規模をもつが、桁行は調査区の外方へさらに延びる。棟方位は、E-7°-Nである。

梁間の平均柱間は1.75mで、唐尺(天平尺)の6尺または高麗尺の5尺に相当する。桁行については確定しがたいが、隅の間とその東とで柱間寸法を違えており、それぞれ高麗尺の4.5尺と6尺または唐尺の5.5尺と7尺とみる一案を示しておく。柱掘方の平均径は0.64m、平均柱径13.1cmを測る。溝5091-OSによって切られる。

出土遺物

5107・5366・5439-OPの掘方から、須恵器の坏・壺または甕、土師器の壺ないし甕が出土しているが、細片のため図示しえない。



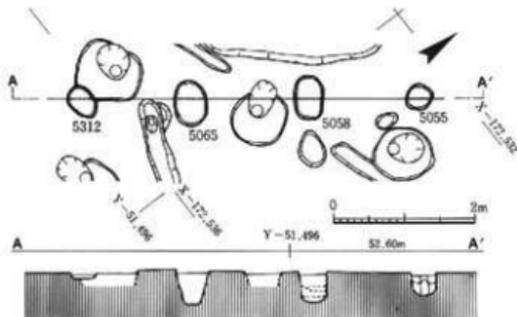
第126図 4220-O F 平面・断面図 (1/80)

4220-O F (第126図)

4区の中央やや南寄りに位置する東西方向の柱列。南北にこれと対応する柱は認められないので、塼ないしは横と考えられる。方位はE-25°-Nである。確認した総長は6.72mであるが、柱間はばらつきが大きい。柱掘方の平均径0.33m, 平均柱径11.7cmを測る。

5490-O F (第127図, 図版60)

5区のやや北寄りから検出された柱列。方位はN-38°-Eである。3間4本を確認したが、5312-O Pは他に比べて著しく浅いため、除外すべきかもしれない。柱掘方径は平均0.45mである。柱痕跡の知られる例はなく、柱径については不明であった。5312-O Pを一連のものと考えると、5600-O Bの掘方を切ることになる。



第127図 5490-O F 平面・断面図 (1/80)

土 坑

5026-00 (第128図, 図版61)

5区の東北隅から検出された舟形の土坑。
長さ6.6m・最大幅1.4m、深さは中央部で20-25cmである。両端は浅く、中央に向かって次第に深くなっている。方位はW-36°-N程度であり、近接する2棟の竪穴住居5050-O・5100-OのDの主軸方位に近い。

埋土は、灰黄褐色(10YR 5/2)の砂礫を交えたシルトで、ほぼ均質である。土質による分層はできなかった。比較的短期間に埋没したのであろう。この中から、多量の須恵器・土師器が出土している。接合により完形となる例は僅少で、ほとんどが破損したために廃棄されたものと考えられる。

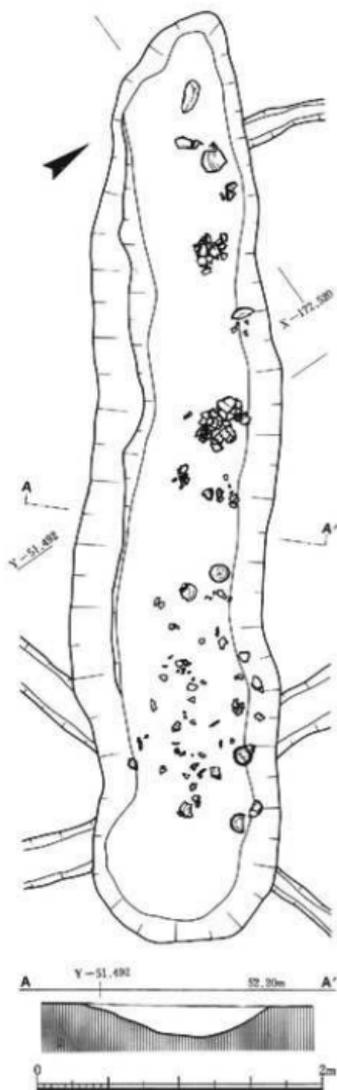
5027-05の埋土を切る。

出土遺物 (第129・130図, 図版71・72)

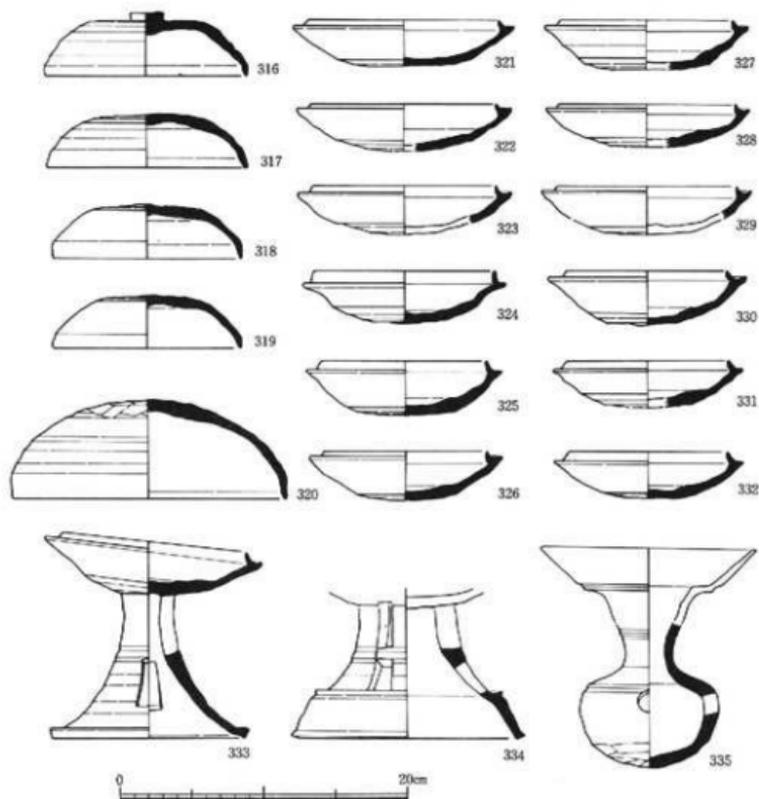
須恵器の坏・高坏・瓶・甕・壺, 土師器の甕など, 6.7kgに及ぶ遺物が出土している。遺構ごとの出土量では5039-00に次ぐ。個体数としては須恵器の坏が最も多い。

須恵器 (第129図) 坏蓋は、器高が高く鈕をつけた、高坏の蓋と思われるもの(316)と、鈕のない通常のもの(317-319)、とくに大型のもの(320)とがある。(316)は、回転ヘラ切り後鈕をつけて、ロクロナアを施す。

(317)は、回転ヘラ切り後、粗雑な回転ヘラケズリを行う。(318-319)は回転ヘラ切り・無調整。(320)は、回転ヘラ切り後、頂部に手持ちヘラケズリを施す。



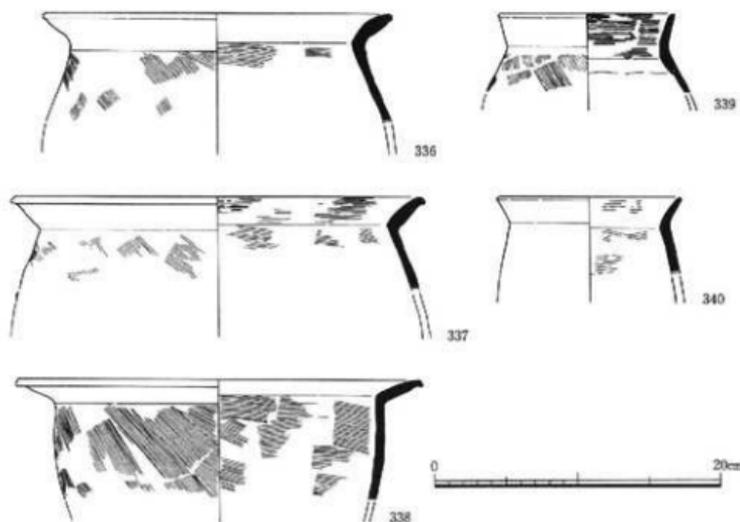
第128図 5026-00 平面・断面図(1/80)



第129図 5026-〇〇 出土土器(1) (1/4)

坏身(321~332)は、回転ヘラ切り後、底部に回転ヘラケズリを施すものがほとんどである。ただし、その範囲はさほど広くなく、調整の簡略化が認められる。(321・324・325・327)のヘラケズリは粗雑で、回転ヘラ切り痕を残す。また(332)は回転ヘラ切り後の調整を行っていない。(321・322)の焼成は甘く、浅黄~灰白色を呈する。

高坏(333)は、坏部外底面を回転ヘラケズリした後、脚部を接合してロクロナデする。透しは、上段に2孔・下段に2孔がそれぞれ向い合うかたちで開けられているが、上段と下段とでは互い違いとなる。壺の脚台(334)は三方透し。全面にロクロナデが認められる。

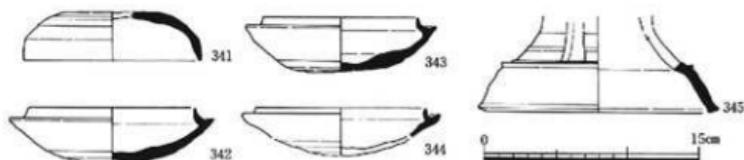


第130図 5026-〇〇 出土土器(2) (1/4)

甕(335)は、頭部の中ほどから上を欠失するが、大きく開く口縁部をもつものと思われる。底部には手持ちへラケズリが施されている。

土師器(第130図) 大型の甕(336~338)と小型の甕(339・340)がある。(336)は外面の頭部以上にヨコナデ、体部にハケメを施す。内面の多くは剥離のため調整不明であるが、一部横方向のハケメが残る。(337)は外面の頭部以上を除いて、全面にハケメが施されている。(338)は、体部が外側に張り出さず、形態を異にするが、調整手法はこれに近い。(339)は外面の頸部付近から上をヨコナデし、体部と内面の頭部以上にハケメ、以下にナデ調整を加える。内面には粘土紐の接合痕が残る。(340)の内面には粗い横方向のハケメが施されるが、外面は摩耗のため調整不明。

以上の遺物は、Ⅱ型式第4~第5段階に相当するものと考えられる。しかし、5026-〇〇 Sの壘上の上位・下位から出土した遺物で相互に接合する例があること、出土土器の若干の型式差が出土部位の上下とは必ずしも整合しないことなどから、一括ないしはそれに近い状態で、短期間に廃棄されたものとみられる。したがって、5026-〇〇の年代はⅡ型式第5段階にあって、5050-〇Dや5100-〇Dとの併存を想定することができる。



第131図 5037-〇〇 出土土器 (1/4)

5037-〇〇

5区の西北隅付近、5650-〇Bの南から検出された不整形土坑。長径4.0m・短径2.7m前後であるが、深さは20cm内外と浅い。埋土は、にぶい黄褐色(10YR 4/3)のシルトで、土質による分層はなしであった。比較的短期間に埋没したものと思われる。

出土遺物(第131図、図版75)

須恵器の坏・高坏・壺、土師器の壺または甕が出土している。5037-〇〇の中でも、南端に近い部分から、まとめて出土した。

須恵器 坏蓋(341)は、回転ヘラ切り後、頂部に回転ヘラケズリを施す。坏身も回転ヘラケズリを加える点と同じであるが、(342・343)のヘラケズリは粗雑で、回転ヘラ切り痕を残す部分が多い。(345)は壺の脚台で、三方に透しをもつ。

これらの遺物からみて、5037-〇〇は、Ⅱ型式第4ないし第5段階の時期に相当すると考えられる。

5039-〇〇(第132図、図版62)

5区の西北部、5037-〇〇の南側に位置する土坑。調査区の西壁にかかり、さらに外方へ広がる。そのため全体の規模については不明であるが、確認された部分で2.2×1.2mほどの大きさを有する。現状での深さは、中央部で15~20cmである。

この土坑の中から、須恵器の大甕が底部を下にして出土した。原形をとどめるのは底部付近の一部にすぎず、大半は破損しているが、元来は据えられた状態であったと思われる。ここが耕地化された際に、体部以上は耕作により壊されたのであろう。口頭部や体部の破片が、多く甕の内部に重なった状態で落ち込んでいた。

このほかにも須恵器の坏・高坏や短頸壺、土師器の壺や甕など、大量の遺物が出土している。それらは、破損したものが多く、いずれも原位置かそれに近い状態を保つ。また、全体に残存率も高く、接合によって完形に近くなるものもかなり存在する。したがって、後代の耕作などによる欠失を考慮すれば、当初はほぼ完全な形の土器が集積されていた可

能性が高い。

出土土器の総量は17.9kgに及び、遺構単位の遺物量としては、他をひきはなして圧倒的に多い。その集積の度合も群を抜く。

以上の諸点からみると、5039-Oの性格は、単に不用となった破損品を廃棄した土坑とは考えにくい。とはいえ、伴出遺物としては自然石数個があるにすぎず、性格を特定しがたいが、何らかの祭祀にかかわる遺構であった可能性を認めることもできるかもしれない。

出土遺物(第133・134図, 図版73・74)

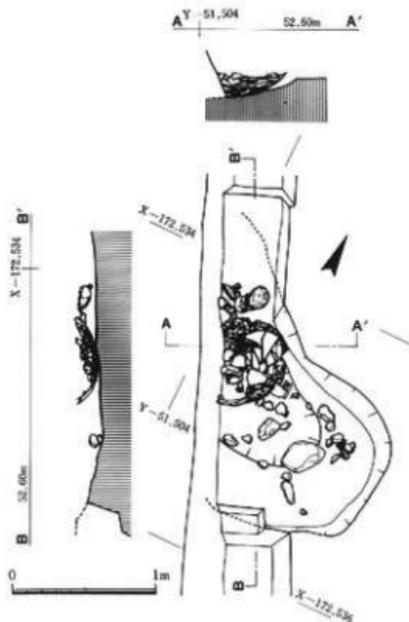
須恵器の坏・高坏・提瓶・甕, 土師器の壺・甕などが出土している。

総計545片, 17.9kgに達するが, 重量比で過半を占めるのは, 須恵器の大甕である。これを除くと, 須恵器・土師器ともに3kg前後と, 重量では拮抗する。

須恵器 坏蓋は, 鈕をもたないもの(346・347)と, 鈕をもち, (355)の高坏と組み合わせるもの(348)とがある。前者は頂部に回転ヘラケズリを加える。一方, 後者は, 頂部の広い範囲に丁寧なカキメを施している。内面の中央部付近には, 数箇所に同心円文が残り, カキメ調整を行う際などに, 当て具をシッタとして使用したことを示すものとみられる。

坏身(349-354)は, 摩耗により調整手法が明らかでないものを除き, いずれも回転ヘラケズリを施す。ただ(354)の調整は粗雑で, 回転ヘラ切り痕が残る。(350・353)は焼成が甘く, 軟質で灰白～黄灰色を呈する。

高坏のうち, (355)は, 蓋(348)と同じくカキメを施した丁寧なつくりである。坏部の内底面中央部に, 同心円文当て具痕を残していることも共通する。同一工人により, セットとして製作されたものであろう。脚部上端はきわめて器壁が厚く, ヘラによる透しの切り開きが完全でない部分もある。透しは三方に開けられている。(356)は脚部だけの破片



第132図 5039-OO 平面・断面図(1/80)

であるが、二方に二段の透しを有する。(355)に類似した有蓋の高坏になるものと思われる。5039-〇〇から、無蓋高坏とわかる破片は出土していない。

提瓶(357)は、口縁部を欠失する。把手は退化して、粘土を貼付した鬘状の小突起と化している。ほぼ全面にオリブ色の自然釉が厚くかかる。このため調整手法については明確でない部分もあるが、ロクロ上で体部を成形し、上面の開口部に円盤で蓋をした痕跡はよく残っている。その上には丁寧なカキメが施される。反対側は、回転ヘラ切り痕をとどめる部分が多く、屈曲部付近に一部、回転ヘラケズリが加えられているようである。器壁には、焼成時に他の器物の一部が熔着している。

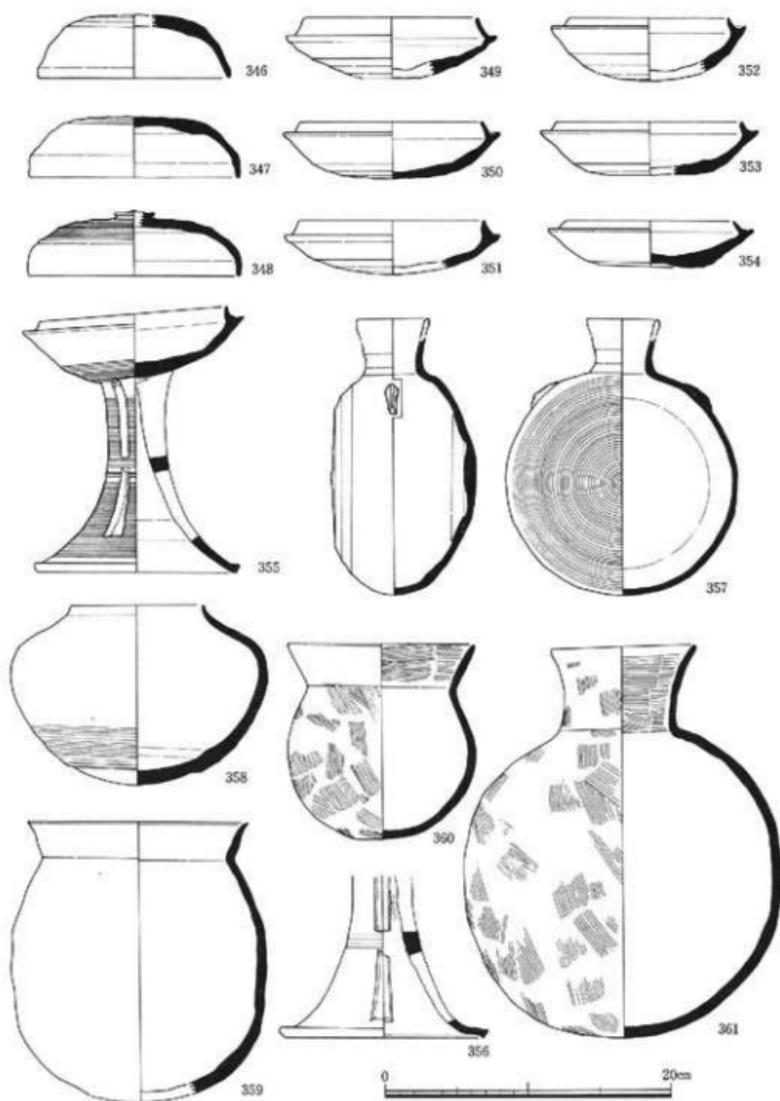
短頸壺(358)は、焼成が甘く、軟質で明黄褐色を呈する。摩耗のため調整が不明瞭な部分もあるが、体部から口縁部にかけてはロクロナデが認められる。体部外面の下半にはカキメが施され、その下には明らかな段差がある。底部は丸底で、外面には指頸痕が残る。これらの痕跡からみると、この短頸壺はまずロクロ上で平底の器形として製作され、切り離しのち、カキメ調整とともに底部が押し出されて、丸底となったものと推定される。底部近くに段差が存在することや、それを境として上下で調整手法が全く異なることは、そうした成形技法を反映するものと考えられる。

甕(362)は、器高71.5cm・体部最大径60.0cmの大型品である。肩が大きく張り、体部下半は比較的長い。底部は成形の際の自重によるのか、多少ひずんでいる。頸部以上はロクロナデのち、ヘラにより多数の縦方向の沈線を描き、その上にロクロによる4条の横方向の沈線を加える。体部外面は、全面に平行叩きが施され、それに対応する内面の頸部以下には、同心円文の当て具痕が残る。

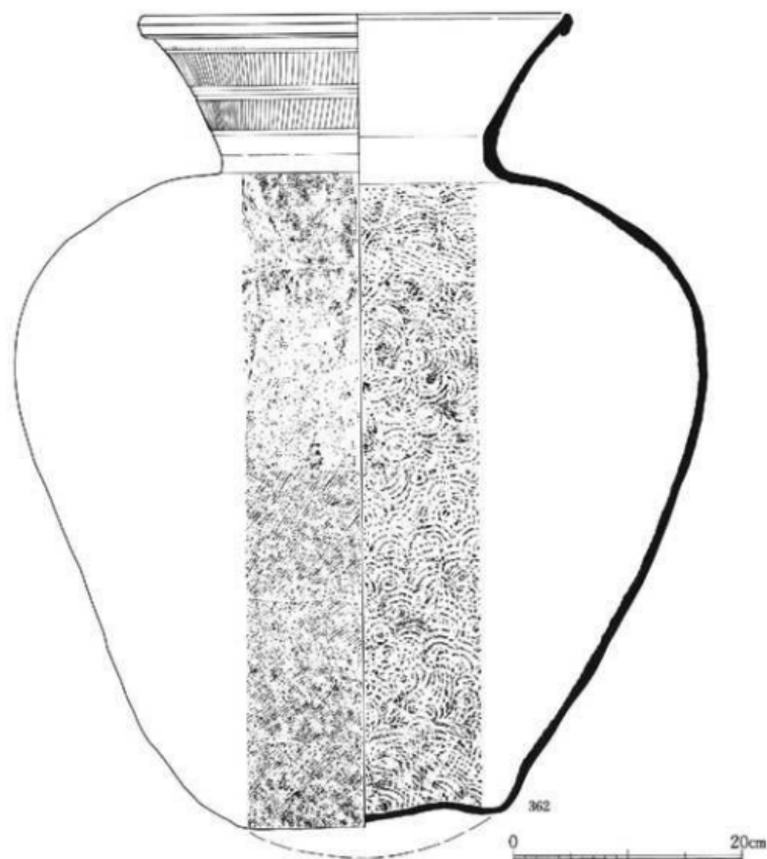
土師器 甕(359・360)と壺(361)がある。(359)の甕は、器壁の剥離・摩耗のため、調整手法に関しては不明な部分が多い。頸部以上はヨコナデによるらしく、体部外面にはハケメが僅かに残る。(360)は小型の甕で、外面の頸部以上はヨコナデ、体部は縦～斜方向のハケメが施される。内面は、頸部以上に横方向のハケメ、体部にヘラケズリが認められる。

壺(361)は、球形に近い体部に、細めの口頸部がつくものである。口縁部はやや外反する。その上端にヨコナデを僅かに残す部分があるのを除いて、外面は全体に縦～斜方向のハケメが施される。内面は、頸部以上に横方向のハケメが残る。体部は、ヘラケズリのち、ナデ調整が行われているようである。

以上の遺物は、Ⅱ型式第4および第5段階に相当するものと考えられる。器形や調整手



第133図 5039-〇〇 出土土器 (1) (1/4)



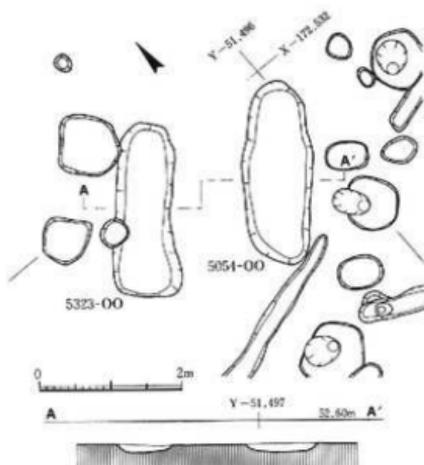
第134図 5039-〇〇 出土土器 (2) (1/5)

法には若干の型式差が存在し、製作された時期のばらつきを示すものとみることが可能である。ただし、出土状況を考えあわせると、5039-〇〇が掘られてから埋まるまでに、長期間を経たとは認めがたい。人為的に、一括かそれに近いかたちで、まとめて埋められたものと推定される。したがって、5039-〇〇にこれらの土器が集積された年代については、Ⅱ型式第5段階をあてることができよう。

5054-00・5323-00 (第135図)

5区の西北部、5039-00の東側で検出された2基の土坑。いずれもやや不整な長方形の平面をもつ。ほぼ並列しており、方位はN-40°-E前後である。

東側の5054-00は長径2.6m・短径1.0m、西側の5323-00は長径2.5m・短径0.8-1.0mの規模を有する。現状での深さは、ともに15cm弱と浅い。埋土はにぶい黄褐色(10YR 5/4)のシルトで、ほぼ均質である。



第135図 5054-00・5323-00 平面・断面図(1/80)

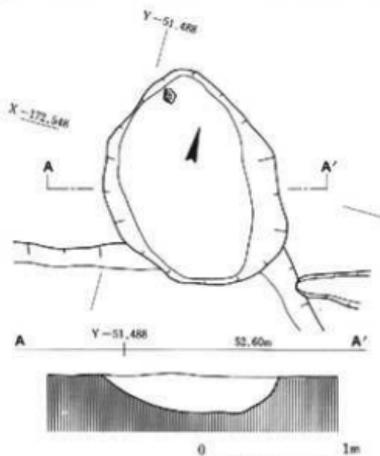
この2基の土坑は、規模や形状などから、墓塚である可能性も想定されたが、それを裏づける資料は得られなかった。むしろ逆に、埋土の断面に棺材の痕跡が全く認められないこと、人為的な埋納を窺わせる状態では遺物が出土していないことから、墓塚とは認めがたい。

出土遺物

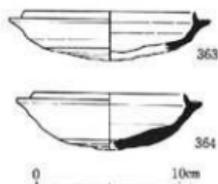
5054-00から、須恵器の坏や壺と土師器の壺ないし甕、5323-00から土師器の壺または甕の破片が出土しているが、いずれも微量である。また、細片のため、時期についても特定しがたい。

5090-00 (第136図)

5区の中央部、5250-0Bの南から検出された土坑である。後述する大型の不整形土坑5243-00と重複し、その埋土を切る。平面形は卵形に近く、長径1.5m・短径1.2mほどの大きさを有する。



第136図 5090-00 平面・断面図(1/40)



第137図 5090-〇〇
出土土器(1/4)

深さは、中央部で25cm程度であった。埋土は褐灰色（7.5 Y R 6/1）の細礫を含むシルトである。

出土遺物（第137図）

須恵器の坏と壺または甕、土師器の甕などが出土している。坏以外は細片のため、図示しえない。

須恵器 坏身は2個体（363・364）ある。（364）の底部は回転ヘラ切り後、無調整。Ⅱ型式第5段階であろう。

5239-〇〇（第138図）

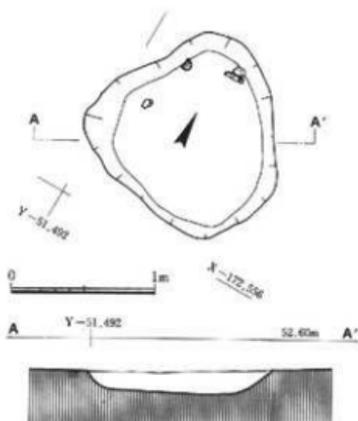
5区の中央部、調査区やや西寄りで検出された土坑。径1.4mほどの不整形円形をなし、深さは現状で15cm内外である。埋土は、灰黄褐色（10 Y R 5/2）の砂礫を交えたシルトである。後述する溝5027-〇〇 Sの屈曲部に位置しており、何らかの関連を想定すべきであるかもしれない。

出土遺物（第139図）

須恵器の坏・壺、土師器の壺または甕などがあるが、図示できるものは少ない。ほとんどが5239-〇〇の底面近くから出土したものである。

須恵器 坏蓋（365）は摩耗のため、調整については不明。軟質で灰白色を呈する。

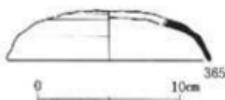
遺物からみて、5239-〇〇の時期は、Ⅱ型式第4ないし第5段階と考えられる。



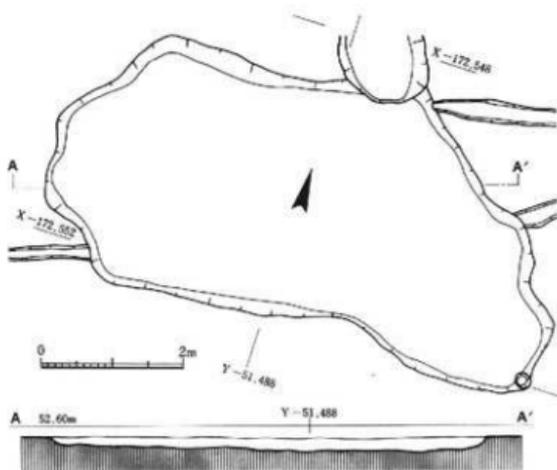
第138図 5239-〇〇 平面・断面図(1/40)

5243-〇〇（第140図、国版61）

5区のほぼ中央部から検出された、大型の上坑。長径3.8m・短径1.7mほどの不整形を呈する。深さは全体に浅く、15-20cm程度である。埋土は、にぶい黄褐色（10 Y R 4/3）の砂を交えたシルトで、土質によりこれをさらに分層することはできなかった。5239-〇〇と一部重複し、



第139図 5239-〇〇 出土土器(1/4)



第140図 5243-〇〇 平面・断面図 (1/80)

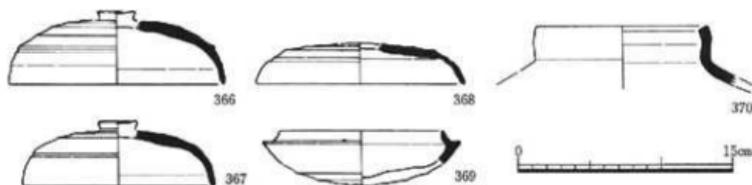
それによって切られる。

出土遺物 (第141図, 図版75)

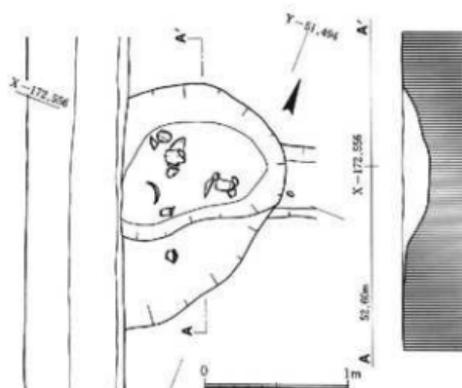
須恵器の坏・高坏・壺, 土師器の壺または甕が, 計0.7kgほど出土している。比率としては須恵器が大半で, 土師器はごく少ない。上坑の西南部と東北部から, それぞれまとまったかたちで出土した。

須恵器 器高が高く, 鉦をつけた高坏の蓋と考えられるもの (366・367) は, いずれも頂部に回転ヘラケズリを施したのち, 鉦をつけてロクロナデを加える。扁平な坏蓋 (368) も, 頂部は回転ヘラケズリを施す。坏身 (369)・壺 (370) はロクロナデ。

これらの遺物から, 5243-〇〇は, ほぼⅡ型式第4段階に相当する時期と考えられる。



第141図 5243-〇〇 出土土器 (1/4)

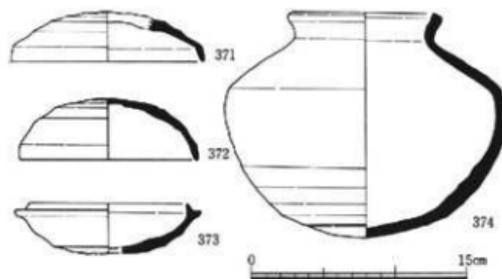


第142図 5244-00 平面・断面図(1/40)

出土遺物 (第143図, 図版75)

須恵器の坏・高坏・壺, 土師器の壺ないし甕など, 比較的多量の遺物が出土している。須恵器 坏蓋は, 若干扁平なもの (371) と, 器高の高いもの (372) がある。後者の頂部は, 回転ヘラ切り後, 無調整。軟質で, 灰白色を呈する。坏身 (373) は, 回転ヘラ切りのち, 底部にやや粗雑な回転ヘラケズリを施す。壺 (374) は, 外面の下半を回転ヘラケズリする。体部と丸底をなす底部の間には段差があり, これを境として, 以下には指頭痕を除いて調整が認められない。ロクロ上で成形した平底の器形を, 回転ヘラケズリを加えながら底部を押し出すことによって, 丸底化したものと解される。

これらの遺物から, 5244-00の時期は, II 型式第5段階に相当する頃と考えられる。



第143図 5244-00 出土土器(1/4)

5244-00 (第142図, 図版63)

5区の中央西寄り, 調査区の西壁沿いから検出された土坑。径1.0~1.2mほどの不整形円形をなす。深さは20cm程度で, 褐色 (7.5Y R 4/3) のシルトを埋土とする。その状況からみて, ごく短期間に埋没したものと考えられるが, 性格については明らかにしがたい。溝5027-0Sを切って掘削されているようである。

5342-00 (図版63)

5区の西北部, 調査区の西壁沿いで検出された大型の不整形土坑。全形を把握できないが, 確認した部分で, 長径9m・短径3.5mほどの規模を有する。深さは, 検出面から10~20cmと浅い。

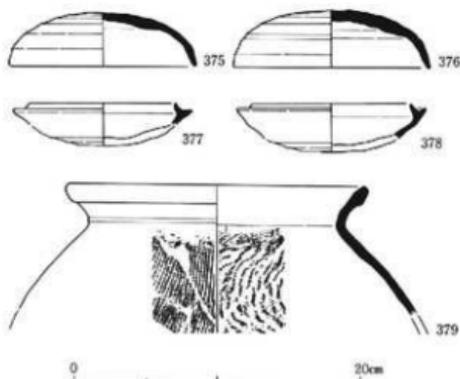
埋土は黄褐色 (2.5Y 5/4) の火雑物を交えたシルトで、ほぼ均質である。埋没するまで長期間を経過していたとは考えられない。5344-〇〇に先行し、5402-〇〇よりは遅れる。

出土遺物 (第144図, 図版75)

須恵器の坏・高坏・壺・甕、土師器の甕などが出土している。

須恵器 坏蓋 (375・376) は、頂部に回転ヘラケズリを施す。

Ⅱ型式第5段階であろう。



第144図 5342-〇〇 出土土器 (1/4)

5344-〇〇

5区の西北部に位置し、5342-〇〇を切る小型の土坑。径1.1-1.3mほどの卵形に近い平面形である。埋土は、褐灰色 (7.5YR 4/1) の小礫を含むシルト。

出土遺物 (第145図)

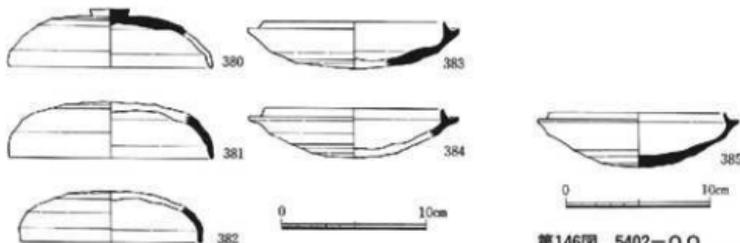
須恵器 坏蓋のうち (380) は、頂部を回転ヘラケズリした後、鈕をつけてロクロナデを加える。坏身 (383) は、回転ヘラ切り後、無調整。Ⅱ型式第5段階と考えられる。

5402-〇〇

5区の西北部、5342-〇〇の下から検出された、径1.2mほどの不整円形をなす土坑。

出土遺物 (第146図, 図版75)

須恵器 坏身 (385) は底部に粗い回転ヘラケズリを施す。Ⅱ型式第4-第5段階。



第145図 5344-〇〇 出土土器 (1/4)

第146図 5402-〇〇
出土土器 (1/4)

溝

4008-O S

4区のほか中央部から検出された小型の素掘溝。多少屈曲するが、方位はN-42°-E前後である。確認した全長は22.5mであり、南西方向は調査区外へさらに延びる。検出面での幅は0.4m内外、深さは一定しないが、10~20cmである。溝底の標高は、西南部が51.65mと最も高い。東北の消失点付近が最も低く、51.37mである。

溝の埋土は、灰黄褐色(10YR 4/2)ないしそれに近い色調のシルトで、基盤層中の粗砂や小礫を多く含んでいる。埋土をさらに分層することはできなかった。

出土遺物 (第147図, 図版76)

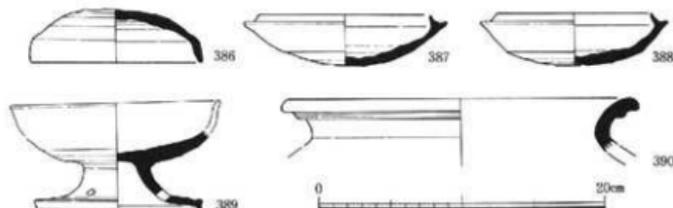
須恵器の坏・高坏・壺・甕、土師器の壺などが出土している。坏類は残存率の大きいものが多く、ほぼ完形の個体もみられる。

須恵器 坏蓋(386)は、回転ヘラ切り後、頂部に粗い回転ヘラケズリを加える。坏身の底部調整も回転ヘラケズリであるが、(388)の調整は粗雑で、回転ヘラ切り痕をとどめる部分が多い。高坏(389)は、坏部外底面を回転ヘラケズリし、脚部接合後クロコナデを施す。脚部には三方に円形の透し孔をあけている。

遺物からみて、4008-O Sの年代は、ほぼⅡ型式第5段階に相当する頃と考えられる。性格については必ずしも明らかでないが、小規模ながら集落内の何らかの区画溝とみることができよう。

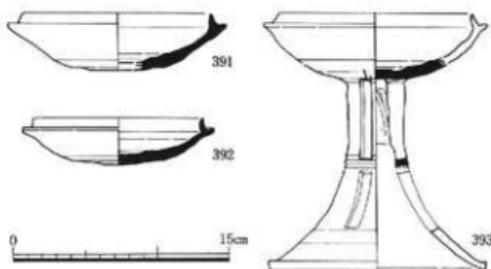
4200-O S (図版63)

4区と5区にまたがって検出された、やや大型の素掘溝。北側是水田の段差によって、4区の中ほどで消失しており、以北の状況は明らかでない。確認された総延長は37.5mである。北半は調査区の西壁に沿うかたちで直線的に延び、4区の南端で屈曲して、5区の東北隅へ続く。方位は、屈曲部以北がN-20°-W、以南がW-15°-N前後である。



第147図 4008-O S 出土土器 (1/4)

溝底にはかなりの起伏があり、屈曲部以南では陸橋状にとぎれた部分もみられる。5区の東壁にも、延長にあたる溝の断面がかかっているのので、南東方向は調査区外へさらに延びると考えられる。溝の幅は、遺存状況の良い部分で1.4m



第148図 4200-O S 出土土器 (1/4)

を測る。検出面からの深さは、10~30cmと一定しない。埋土は、灰褐色(7.5Y R 4/2)のシルトで、基盤層に由来する小礫や粗砂を多く含む。性格については、集落内の区画溝と考えておきたい。

出土遺物 (第148図, 図版76)

須恵器 坏身(391・392)は、底部に回転ヘラケズリを施すが、(391)の調整は粗雑で、回転ヘラ切り痕を残している。高坏(393)は、坏部外底面に回転ヘラケズリを加えたのち、脚部を接合してロクロナデを施す。

遺物からみて、4200-O Sの年代は、II型式第4~第5段階にあてることができよう。

5027-O S

5区の東北隅から中央部にかけて検出された。小型の素掘溝。幅0.25~0.40m、深さは10cm内外である。確認された全長は38.5mに及ぶ。多少蛇行しつつも北側の大部分は直線的に延びるが、南端近くで屈曲して、調査区外の西方へ続く。溝底の標高は、北端で52.07m、南端で52.22mであった。方位は、直線部でN-5°-E前後である。

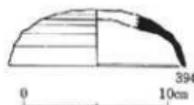
溝の埋土は、にぶい黄褐色(10Y R 5/3)を呈するシルトで、細礫を含む。掘立柱建物5250-O B・5470-O B・5600-O B、土坑5026-O O・5244-O Oによって切られる。

出土遺物 (第149図)

須恵器の坏・高坏、土師器の壺または甕が出土しているが、量的には少ない。

須恵器 坏蓋(394)は、頂部に回転ヘラケズリを施す。

遺物と遺構の重複関係からみて、5027-O Sの年代は、II型式第4~第5段階と推定される。

第149図 5027-O S
出土土器(1/4)

5170-O S

5区の南端近くから検出された、やや大型の素掘溝。調査区を縦断するかたちで、長さ約10mにわたって確認した。検出面での幅は0.9~1.1m、深さは10~20cmである。溝の埋土は、細礫を含むシルトで、褐色(7.5YR 4/3)ないしそれに近い色調を呈する。溝底は多少の起伏があるが、全体としては西が高く、東が低いようである。方位はW-15°-S前後。掘立柱建物5450-OBによって切られる。

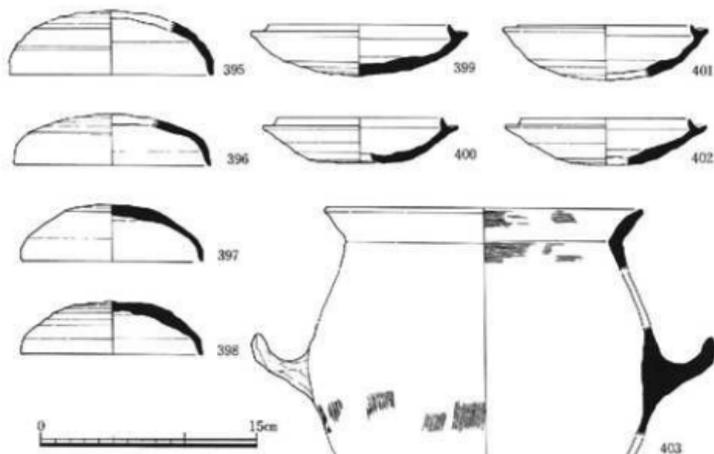
出土遺物 (第150図, 図版76)

須恵器の坏・高坏・壺・甕, 土師器の甕が, 計1.4kgほど出土している。

須恵器 坏蓋(395~398)は、いずれも頂部に回転ヘラケズリを施すが、(398)の調整は粗雑で、回転ヘラ切り痕を多くとどめる。坏身(399~402)も、底部には回転ヘラケズリを加えており、切り離したままのものはない。ただ、(399・400)の調整は粗く、中央部に回転ヘラ切り痕を残す。

土師器 把手つきの甕(403)は、内面の口頸部付近に横方向のハケメ、外面の体部に縦方向のハケメを施す。体部内面と外面の口頸部は、摩耗のため調整不明。

遺物からみて、5170-O Sは、Ⅱ型式第4~第5段階にかけての時期のものと考えられる。竪穴住居を中心とする集落内の区画溝である可能性が高い。



第150図 5170-O S 出土土器 (1/4)

小型方形周溝状遺構

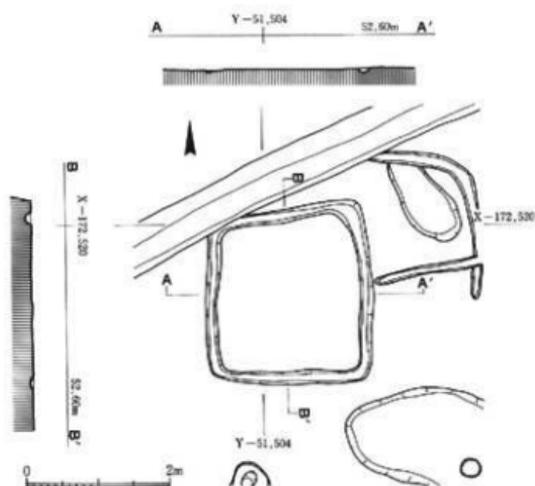
5014-OX (第151図, 図版64)

5区の西北隅から検出された遺構で、平面がほぼ長方形となるように、幅の狭い溝をめぐるしている。長辺が2.2~2.4m、短辺が2.1m前後の規模を有する(溝心々間距離、以下同じ)。長辺の方位は、真北方向に近い。

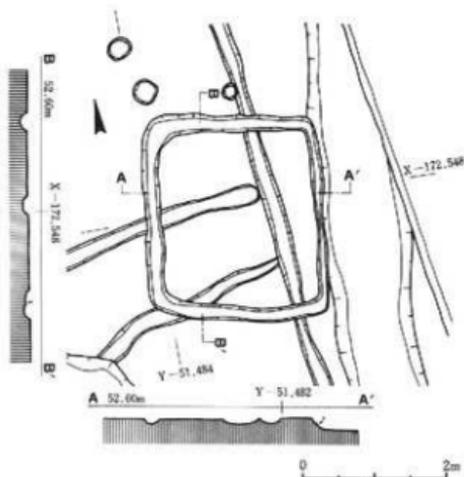
溝は、検出面での幅13~20cm、深さは5~10cmである。埋土は、黄褐色(2.5Y 5/4)のシルトで、地山に火雑物を交えたものである。また溝に囲まれた内側には、現状で遺構は存在しない。周辺も精査したが、例えばこれに関連する柱穴などの遺構は確認されなかった。したがって、性格については全く不明である。

出土遺物は皆無であるため、時期を特定することができないが、溝の埋土は、他の古墳~奈良時代の遺構とはほぼ共通している。この点で、耕土系の上を含む平安時代以後の遺構とは明らかに異なることから、いちおう古墳~奈良時代と考えておきたい。少なくとも、この地域が耕地化される以前の遺構であることは間違いない。

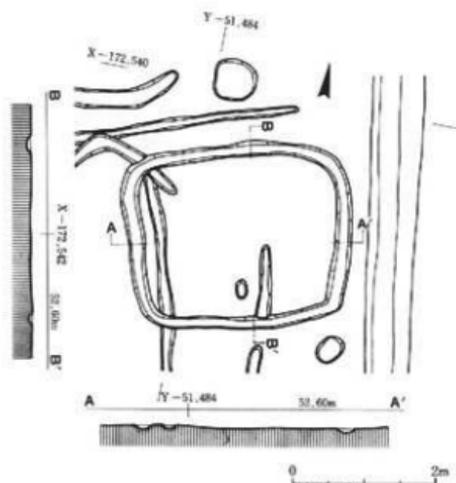
次に述べるように、この種の遺構は、今回の調査で他に2例確認されている。いずれも共通性が強い。なお、周溝の一部が残るものを加えれば、さらに類例は増すと思われる。



第151図 5014-OX 平面・断面図 (1/80)



第152図 5246-OX 平面・断面図 (1/80)



第153図 5265-OX 平面・断面図 (1/80)

5246-OX (第152図, 図版64)

5区の中央付近, 調査区の東壁沿いから検出された。5014-OXに類似した, 小型の方形周溝状遺構である。

長辺2.7m・短辺2.3mほどの規模を有する。長辺の方位はN-10°-E前後である。

溝は, 幅約20cm, 深さ7-10cmを測る。溝の埋土は, にぶい褐色(7.5YR 5/3)のシルトで, 遺物は含んでいない。

小型の素掘溝3本と幅の広い溝5091-OXが重複するが, いずれによっても切られる。

5265-OX (第153図, 図版64)

5区の中ほど, 5246-OXの北側で検出された, 同様の小型方形周溝状遺構。

長辺2.7-3.0m・短辺2.25-2.45mの規模をもつ。長辺の方位はE-11°-Nと, 他の2例とは逆に, はほぼ東西方向にとられている。

溝は, 幅15-25cm, 深さは4-8cm程度である。5246-OXと同じか, やや淡い色調を呈するシルトを埋土とする。やはり遺物は含まれていないため, 時期を明確にしがたい。

第4項 平安時代以後の遺構と遺物

この時期に属する遺構はさほど多くなく、掘立柱建物1棟のほか、水田跡数面とそれに伴うとみられる素掘溝など数十条の溝、井戸1基があるにすぎない。これらは、古墳～奈良時代の遺構と同じく地山面で検出されたものと、上部の包含層中で確認されたものに分けられる。前者には、掘立柱建物と溝があるが、その柱掘方や溝の埋上は、いずれも灰白～褐灰色の水田耕土系の土である。したがって、この地域が水田化した後の遺構と考えられる。それ以外の水田跡や大部分の素掘溝、井戸などは後者に属する。ただし、包含層中の遺構検出作業は、Ⅲb層上面を除いて全面的には行っていないため、水田関係の遺構の総数はさらに増すことが確実である。

この時期の遺物は少ないが、個々の遺構と結びついたかたちで出土したものは僅かである。また耕地化に際して、旧地表面以下は最大数十cmほど攪拌されて耕土となっているので、当初そこに含まれていた遺物の多くは、細片化して二次的にこの耕土系の土に含まれている。そのため、これらの包含層や、耕土系土壌を埋土とする遺構から出土した遺物は、大半が古墳時代のものという結果となっている。したがって、上限は別として、この地域が耕地化された年代や、個々の遺構の時期を確定することは困難であった。

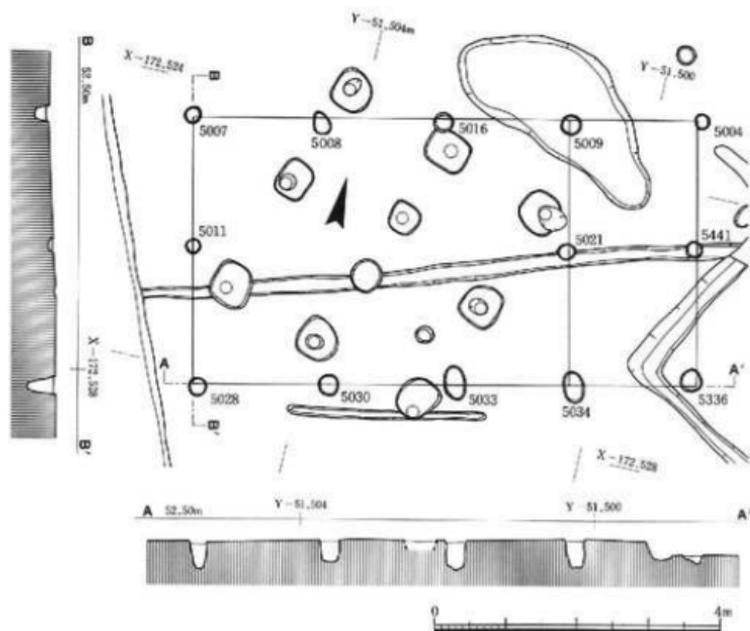
掘立柱建物

5700-O B (第154図)

5区の西北隅から、5650-O Bと重複して検出された東西棟建物。棟方位はE-13°Nである。3間×2間の身舎に東庇がついた形式をとり、全体としては桁行4間(総長6.99m)・梁間2間(総長3.76m)の規模を有する。

平均柱間は、桁行が1.75m、梁間が1.88mを測る。柱根や柱痕跡を残す例がなく、個々の柱間寸法については確定しがたいが、柱掘方の間隔は、桁行・梁間ともによく揃っている。梁間の柱間がやや長いため疑問があるが、これを仕事斑とみれば、桁行と梁間とはともに曲尺の6尺等間に設定されたと考えることができる。

柱穴は、掘方のみ明瞭で、柱痕跡や抜取穴は確認されなかった。柱掘方は、径0.2mほどの円形平面のものから、長径0.4m以上の長円形平面のものまであって、一定しない。検出面からの深さは0.4m前後あり、平面に比して深い。ただし、妻中央の柱は他に比べて明らかに浅めである。なお、身舎柱と庇柱の間には、規模などにおいて差違は認められなかった。このため、東の1間分は庇ではなく、身舎の一部であった可能性も残る。その



第154図 5700-OB 平面・断面図 (1/80)

場合、5021-OPは間仕切の柱とみられ、これを境として西の3間と東の1間とでは、屋内の空間利用に違いがあったことになる。

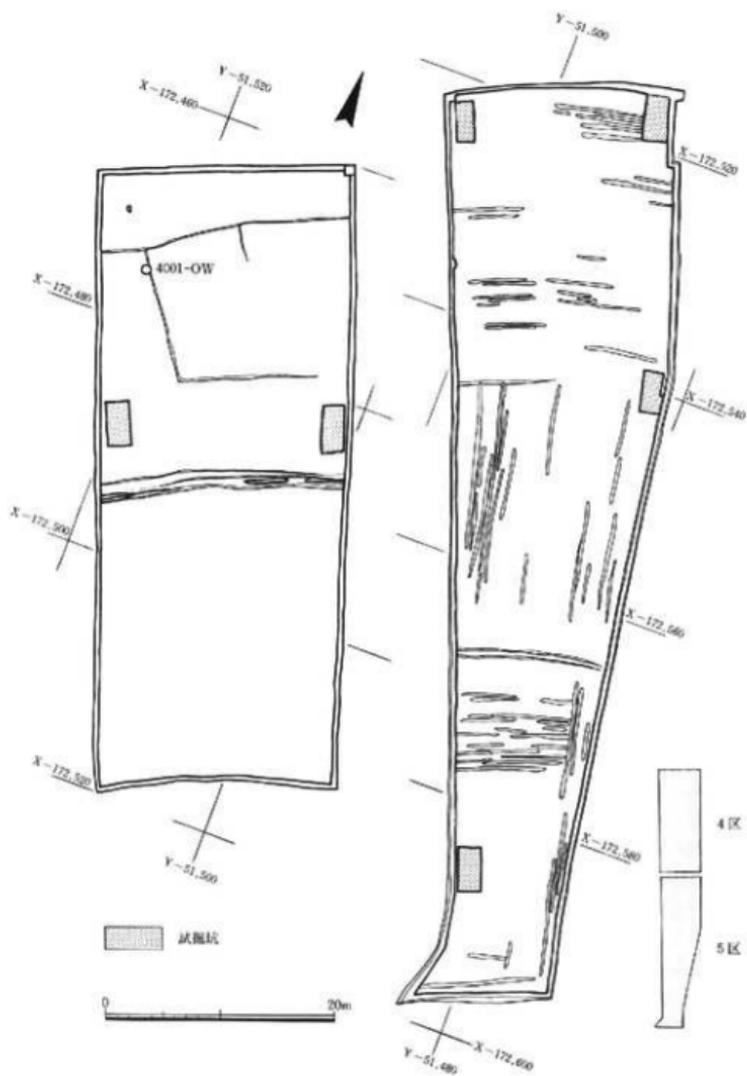
竪穴住居5050-OD・掘立柱建物5650-OBおよび重複する土坑を切る。

出土物

柱掘方内より、須恵器の坏または高坏の破片が少量出土しているが、図示できない。古墳時代のもと思われる、建物の年代とは直接結びつかない。

水田跡・素掘溝 (第85・155図)

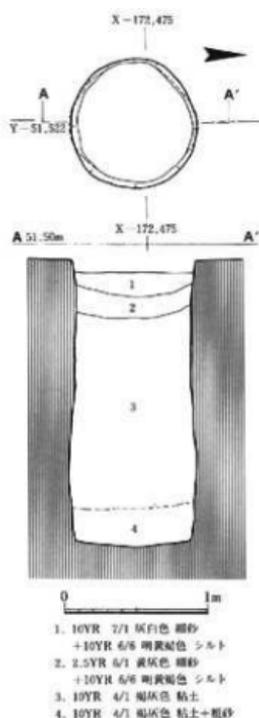
4・5区とも、各々数段の旧水田面と素掘溝多数を検出した。元來緩やかな斜面であったところを造成して、幾段かの水平面を造り出したものである。水田の方向は、ほぼ現在の地割と一致する。調査区の幅が狭いため、水田の東西の端部を確認できたのは4区北半の一部にすぎないが、ここでは現地表に痕跡をとどめない小型の水田区画が検出された。



第155図 二俣池北遺跡4・5区Ⅲb層上面遺構図(1/500)

水田間の段差の部分には、畦畔の痕跡が認められる。これには4区北端の東西方向の畦畔のように、杭による補強を行った例もあるが、大半は土を積み上げただけで、特別の工作を施していない。畦畔の位置は近年に至るまでほぼ踏襲されており、水田面の嵩上げに際しても、多少下段側へ積土がなされる程度で、大きな移動はない。また、段差の下には、畦畔に沿ってやや広めの溝が検出される例があった。おそらく、排水とともに、畦畔の盛土をする目的で掘られたものとみられる。

素掘溝は、地山面で検出されるもの(第85図)と、Ⅲb層上面で検出されるもの(第155図)がある。前者の多くはⅢ層を耕土とする耕地に伴い、後者はⅡ層の耕土に伴うと考えられる。幅20~30cm、検出面からの深さ5~10cmのものが多い。なお、Ⅱ層の上面は



第156図 4001-OW
平面・断面図(1/40)

かでも、より時代の下る同様な溝群を検出しており、別に存在は確かめられても、形状が不明確で図化しえないものもあるため、実数はさらに増加する。

これらの溝は、現在の地割つまり旧水田の方向には沿っており、かつ水田面ごとに方向を異にする例が認められた。土地区画や耕作の単位を示すものであろう。ただ性格については、条里の坪内をさらに区分する小畦畔を造成する際の採土痕跡とみる考えや、畑作とくに水田の裏作時の畝の造成に関わるものとする考えがこれまで提示されているが、明確にしがたい。

井戸

4001-OW (第156図)

4区の西北部から検出された素掘りの井戸である。Ⅲb層上面で確認されたが、もっと上から掘り込まれている可能性が高い。平面は直径0.9mほどの円形を呈し、検出面からの深さは2.3mを測る。上端から下端まではほぼ同径で、壘面は垂直に近い。

出土遺物

土師質土器の細片や陶器・磁器・瓦が出土しているが、図示しえない。遺物からみて、近世以降に掘削・使用された野井戸であろう。

第5項 包含層の遺物

4・5区の遺物の70%以上は、包含層から出土したものであり、とくにⅢ層からは、全体の50%を越える大量の遺物が出土している。時期的には古墳～奈良時代、中でも6世紀代のものが最も多く、中世の遺物がこれに次ぐが、その他の時代のものは少ない。

層別別にみると、Ⅲ層に含まれる遺物は、弥生時代ないしそれ以前と推定される石器類を上限とし、中世の土器類を下限としている。また、Ⅱ層は、古墳時代を上限とし、近世を下限とする遺物を含むようである。したがって、Ⅲ層とⅡ層の年代は、それぞれ中世・近世と考えておきたい。Ⅰ層は近世以降、現代にかけての耕土層であろう。

これらの包含層から出土した遺物は、大半が細片化しており、図示しうるのは、総数に比して少ない。ただ、Ⅲ層はⅡ層に比べると大型の破片を多く含んでいる。この傾向はとくにⅢb層に著しく、近接して出土した遺物相互の接合率も高い。包含層の上部へいくにつれて、耕作による攪拌が進んだ結果と考えられる。

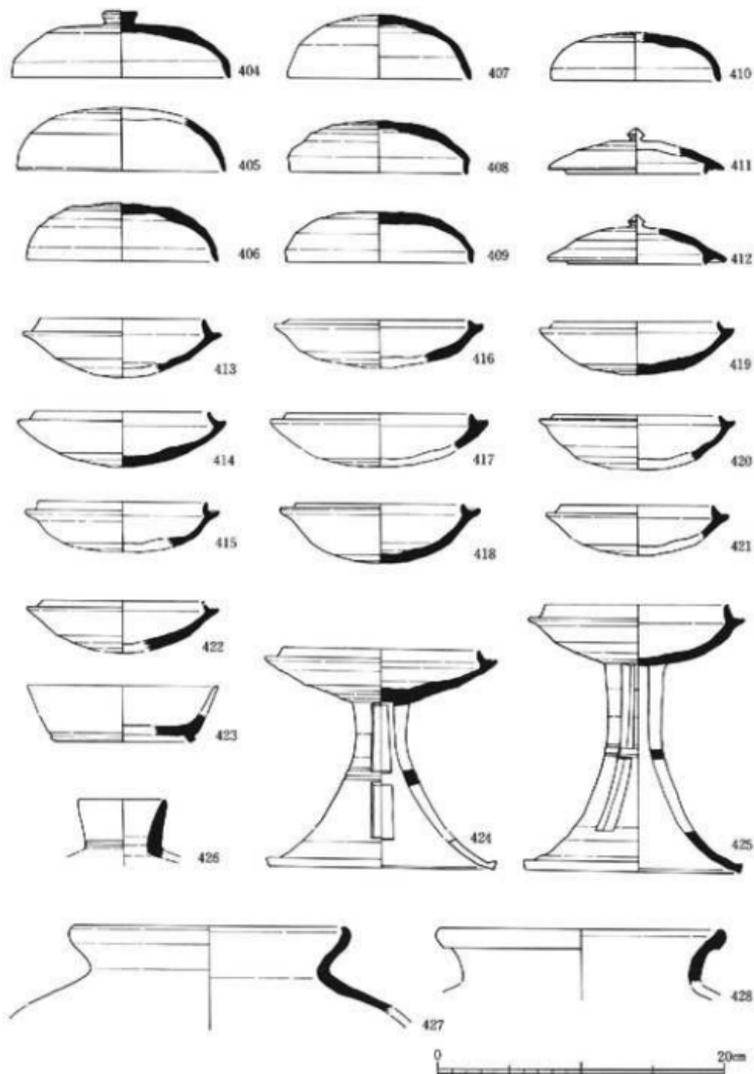
以下、主要な遺物について概観しておく。

Ⅲ 層 (第157～159図, 図版77～79)

須恵器 (第157図) 坏蓋 (404～412) は、立ち上がりをもつ坏身に組み合うもの (404～410) と、かえりを有するもの (411・412) がある。量的には前者が圧倒的に多い。このうち (404) は、やや中くはみの扁平な鈕をもち、高坏の蓋とみられる。頂部に回転ヘラケズリを施した後、鈕をつけてロクロナダを行う。(405～410) は、回転ヘラ切りの中の、頂部を回転ヘラケズリするが、(406) の調整は粗雑で、回転ヘラ切り痕をとどめる。かえりをもつ蓋 (411・412) は、頂部に広く、丁寧な回転ヘラケズリを施す。小さく高い宝珠鈕がつくものと考えられる。

坏身 (413～423) は、立ち上りを有する形態 (413～422) と、鈕をもつ坏蓋と組み合う、高台を有するもの (423) がある。大部分は前者に属し、後者の例は少ない。底部には回転ヘラケズリを加える例が多いが、(414・419) は回転ヘラ切り後、無調整。高台をもつ坏身 (423) は、回転ヘラ切りの中の、高台をつけてロクロナダを施す。

高坏 (424・425) は、ともに長脚二段透しの有蓋高坏である。(424) は扁平な坏部に、下で大きく開く脚部がつく。坏部外底面は回転ヘラケズリ。透しは二方向にあげられている。(425) は、やや丸みのある坏部の外底面に回転ヘラケズリを施し、長めの脚部をつけてロクロナダを加える。透しは三方向である。



第157図 III層 出土土器(1) (1/4)

瓶(426)は、口頸部のみの小片であるが、おそらく提瓶であろう。全面にロクロナデが認められ、頸部には2条の沈線をめぐらす。

小型の甕(427・428)のうち、(427)は頭部以上をロクロナデし、肩部外面に平行叩きののち、カキメを施す。内面には同心円文の当て具裏が残る。(428)はロクロナデ。このほか大型



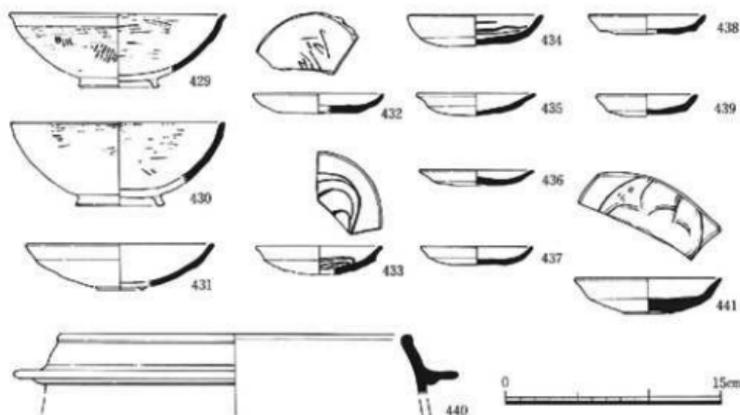
第158図 須恵器甕の叩き目
と当て具痕(1/2)

の甕の中には、内面に特徴的な車輪文の当て具痕を残す例がみられる(第158図)。

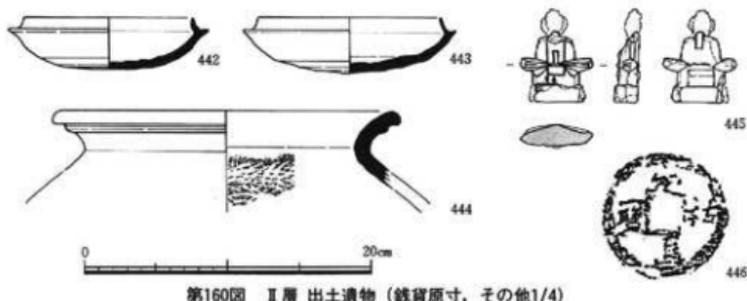
瓦器(第159図) 碗(429~431)のうち、(429)は、外面に平行叩きののち、横方向のヘラケズリを加え、さらにヘラミガキを施す。口縁部付近はヨコナデ。内面には、ほぼ全面にヘラミガキを施す。(430)は、内外面ともにヘラミガキ。(431)は、口縁部をヨコナデし、内外面にヘラミガキを加えるが、摩耗が著しい。皿(432~437)は、いずれも口縁部にヨコナデを施す。内面にヘラミガキ、外面に指頭裏の残るものが多い。

土師質土器(第159図) 皿(438・439)は、口縁部をヨコナデし、体部にはナデが認められる。羽釜(440)は、外面にヨコナデ、内面にナデ調整を施す。

青磁(159図) 皿(441)は、見込みに櫛状工具による花文が描かれる。底部外面は焼成前に軸を掻き取っている。龍泉窯系。



第159図 Ⅲ層 出土土器(2)(1/4)



第160図 II層 出土遺物（銭貨原寸，その他1/4）

II 層（第160図，図版78・79）

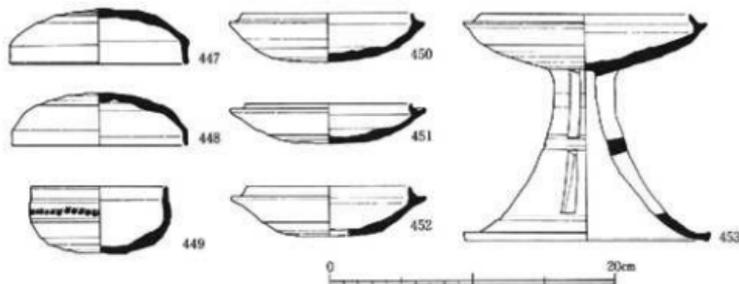
須恵器 坏身（442・443）は、ともに底部外面に回転ヘラケズリを施すが、（442）の調整は粗雑で、回転ヘラ切り痕をとどめる。甕（444）は、頸部以上をロクロナデし、体部外面に平行叩き、内面に同心円文の当て具痕を残す。

ミニチュア土製品（445）は、頭部を欠失する土師質の人形で、表型と背面型の型合わせによる。合わせ目にはヘラケズリを施している。「天神座像」で、江戸時代のもの。

銭貨 北宋の元祐通寶（1086年初鑄）が出土している。外径2.4cm、3.1g。このほか同じく北宋の元豊通寶（1078年初鑄）とみられる銭貨があるが、文字は不明瞭である。

攪乱層・その他（第161図，図版78）

須恵器 坏蓋（447・448）は、頂部を回転ヘラケズリする。碗（449）は、底部に回転ヘラケズリを施し、2条の沈線間に拂描波状文をめぐらす。坏身（450～452）の底部調整は回転ヘラケズリ。高坏（453）は三方に透しをもつ。坏部外底面は回転ヘラケズリ。



第161図 攪乱層他 出土土器（1/4）

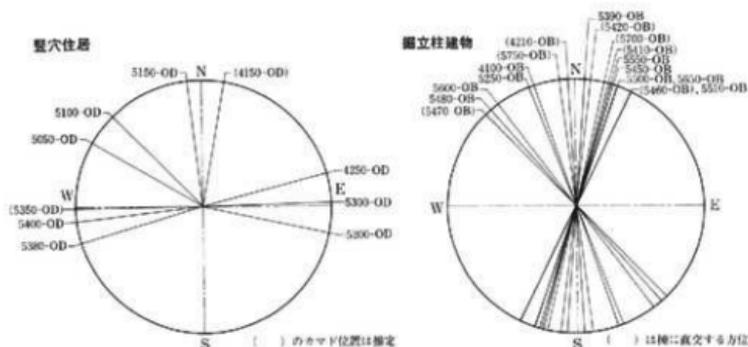
第6項 小 結

遺 構

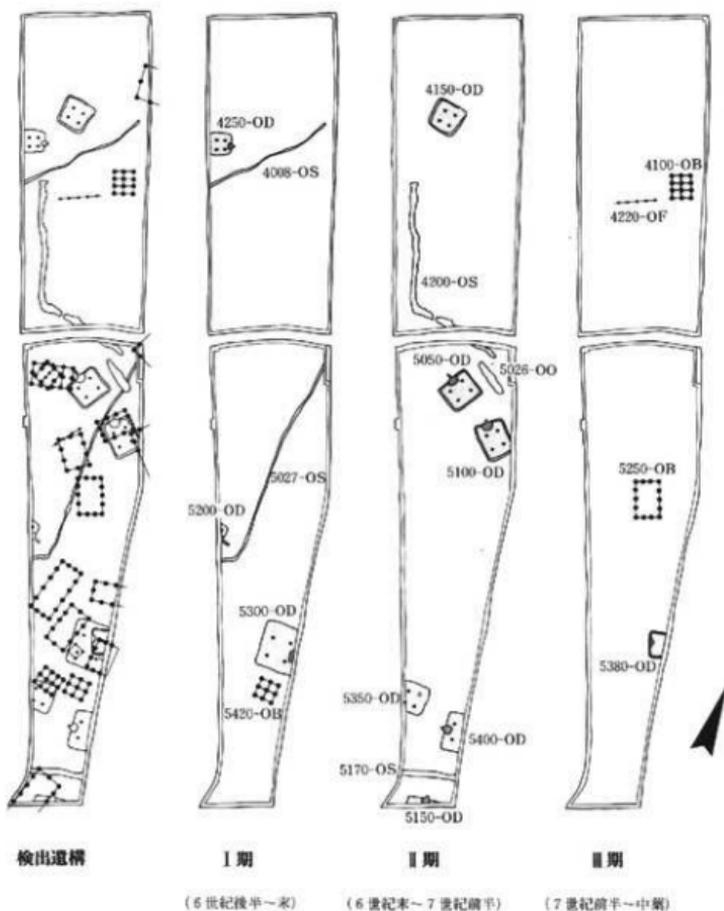
今回検出された遺構は多岐にわたるが、そのうちの建物を中心とした様相と時期的な変遷について、以下にまとめておきたい。ただし、竪穴住居と掘立柱建物が重複する例はあっても、竪穴住居間・掘立柱建物間で重複関係を有するものは僅少である。そのため、遺構の重複から先後関係を確定できる例は多くない。また掘立柱建物は、その性格上、上限を決定しうる資料を除いて、直接存続年代に結びつく遺物をほとんど伴っていない。したがって、個々の建物の実年代比定や同時性の認定は、多くの場合困難であった。

こうした状況の中で、建物の群としての構成やその変遷を復元することは、一定の限界を伴う。それを踏まえたうえで、ここでは、建物の方位（第162図）を基本的な指標とし、建物の構造的特徴や配置、出土遺物などの要素を勘案することにより、集落の変遷について一案を示してみたい。もとよりこれは試案であって、別の解釈も可能であるし、周辺の調査の進展によって、大幅な修正を必要とする場合もあることを付言しておく。

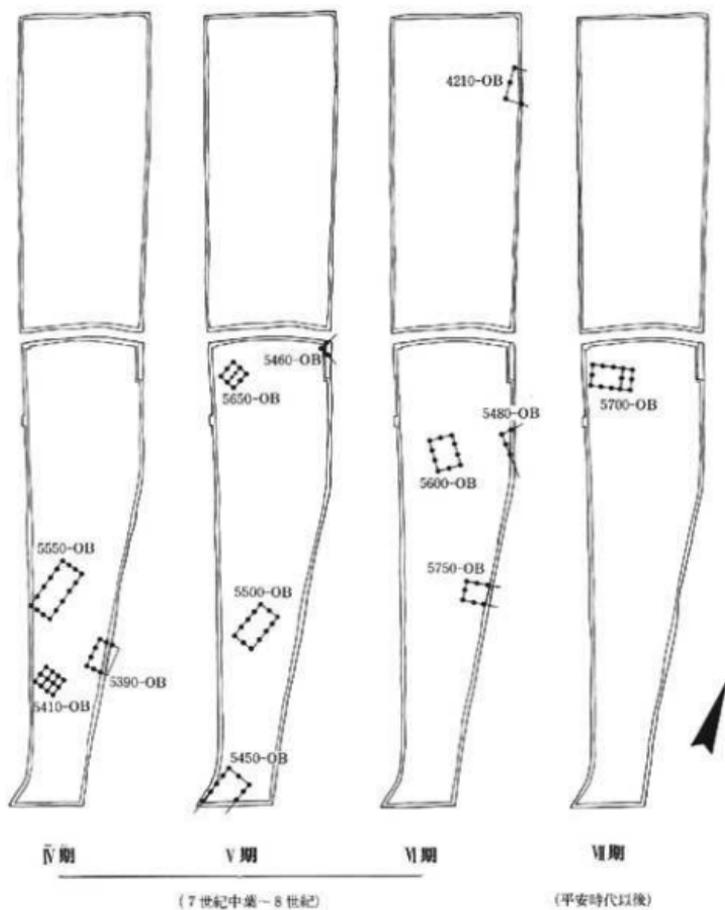
上記の視点からみると、4・5区で今回検出された建物は、大きく7つの時期に分けることができると思われる（第163・164図）。それぞれをⅠ期～Ⅶ期と仮称すると、Ⅰ期は6世紀の後半～末、Ⅱ期は6世紀末～7世紀前半、Ⅲ期は7世紀前半～中葉に相当すると考えられる。Ⅳ期～Ⅵ期は、ほぼ7世紀中葉から8世紀にかけての年代を比定することができよう。Ⅶ期は、この地域が耕地化された後の時代で、年代的にはかなり下降する。



第162図 竪穴住居と掘立柱建物の方位



第163図 遺構変遷試案(1) (1/1000)



第164図 遺構変遷試案(2) (1/1000)

I 期

竪穴住居4250-OD・5200-OD・5300-ODおよび小型の倉庫とみられる掘立柱建物5420-OBが、この時期に属すると考えられる。また2条の細い溝4008-OS・5027-OSも、この時期の集落の内部における何らかの区画溝と推定される。

竪穴住居はいずれもカマドを備えており、その位置はほぼ東側である。ただし、大型の住居5300-ODは、東辺の中央ではなく、やや南に寄せてカマドを設置している。主柱形式は、規模の大小にかかわらず全て4本柱とみられ、また壁溝をもたない点も共通する。なお、掘立柱建物5420-OBは、5300-ODの南に付設された倉としての機能をもつものと解されるが、別の時期の遺構となる可能性もある。

ともあれ、古墳時代後期から奈良時代頃まで存続したこの集落に、人々が定着して生活を営みはじめた初期の段階を示すものと考えられる。

II 期

竪穴住居4150-OD・5050-OD・5100-OD・5150-OD・5350-OD・5400-ODおよび2条の溝4200-OS・5170-OSが、この時期の遺構と推定される。また、舟形の土坑5026-OOも、ちょうど4200-OSがとざれた部分の南側に、これと並行するようなかたちで掘られており、一連のものとみることができる。これらの溝は、I期のものに比べて幅が広いが、流水を窺わせる堆積はほとんどなく、やはり集落やその内部の区画溝と考えられる。

竪穴住居は、一部存在が不明確なものを除いて、全てカマドをもつ。その位置は、北端の4150-ODと南端の5150-ODが北辺、5050-ODと5100-ODが西北辺、5350-ODと5400-ODが西辺である。いずれも、辺の中ほどに設けられている。したがって、方位の上からは、3つのグループに分けることも可能であるが、5050-ODと5100-ODは4200-OSや5026-OOに並行しており、5150-OD・5350-OD・5400-ODも、5170-OSとほぼ同じか、それに直交する方位をもっている。そうした点からみると、これらの竪穴住居の方位の差は、むしろ近接する溝の方向に規制された結果と考えるのが自然であろう。少なくとも、4150-ODを除けば、各々から出土した遺物に型式差は認められない。あるいは、調査区外に竪穴住居の存在を予想して、2棟ずつが隣接するかたちで、集落を形成していたとも考えられる。

ただし、北側の3棟が壁溝をもつものに対し、南側の3棟は壁溝をもたないという違いは認められる。そのため、こうした構造上の相違が、時期差を反映するものである可能性は

否定できない。また、4150-ODは、型的に少し新しいとみられる遺物も含んでいることから、これに続くⅢ期の遺構として捉えるべきかもしれない。

Ⅲ 期

竪穴住居5380-OD、掘立柱建物4100-OB・5250-OB、竪4220-OFが、この時期に属するとみられる。いずれも調査区にはほぼ平行ないし直交した方位を示しており、北で西へ20°前後振れる。

5380-ODは小型の竪穴住居で、Ⅰ期・Ⅱ期の他の住居と異なり、内部に明確な主柱穴をもたない。少なくとも4本柱の形式ではないことが確実である。壁溝を有する点ではⅡ期からの連続性が認められるが、出土遺物からみて、今回検出された竪穴住居の中では最も新しいものと考えられる。主柱形式の違いも、規模とともに、そうした時期差との関わりの中で捉えるべきかもしれない。

掘立柱建物は、床張りの住居と推定される5250-OBと、倉庫として用いられたとみられる4100-OBとがある。前者は、桁行を4間という偶数間に、梁間を3間にとる。こうした構造は、奈良県斑鳩町の法隆寺東院下層遺跡（推定斑鳩宮跡）で検出された建物に類似する。また、身舎の梁間を3間にとるという構造は、同じく明日香村の稲淵川西遺跡などにも類例がみられるものである。これらは7世紀の初頭から中葉にかけての時期に比定されており、7世紀後半以降、身舎の梁間が2間にほぼ固定化していく状況との対比において、より古い時期の特徴を示すものと解することができる。なお、4100-OBについては不明であるが、5250-OBの柱間設定は高麗尺によっている可能性が高い。これも古式な要素とみることができよう。

このようにⅢ期は、住居構造が竪穴住居から掘立柱建物へと変わっていく、過渡期に相当すると考えられる。両者が併存する状況や、竪穴住居のカマド位置が前代のものと類似することなどからみれば、集落自体はⅡ期から連続するのであろう。

Ⅳ 期

掘立柱建物5390-OB・5410-OB・5550-OBが、この時期の遺構と推定される。竪穴住居は塗を消し、北で4°(5390-OB)～16°(5550-OB)東偏する掘立柱建物群によって構成される時期である。

建物のうち5550-OBは、当該期の主眼的な性格を有する大型の住居である。明確なかたちで床束を検出することはできなかったが、おそらく床張りであったと思われる。桁行は5間と奇数間になるが、梁間はやはり3間で、構造や梁間総長などにⅢ期の掘立柱建物

5250-OBとの強い類似性が窺われる。これの南側に位置する総柱の倉庫5410-OBも、3×2間という構造および桁行総長が、同様にⅢ期の4100-OBとよく一致する。なお5390-OBは規模が確定しないが、3×3間である可能性が高い。とすれば、梁間を短い柱間で3間にとるという点で、5550-OBと類似するものといえる。

以上のように、この時期の建物は、倉庫を除いて、身舎の梁間のとり方に共通性が認められるようである。また、柱間設定についても、高麗尺が使用されているらしく、Ⅲ期の建物との間に連続性がみられる。しかし一方で、建物の方位は、続くⅤ期のものと近似しており、前後の時期にそれぞれ結びつく要素をうかがうことができる。

Ⅴ期

掘立柱建物5450-OB・5460-OB・5500-OB・5650-OBが、この時期に属すると考えられる。建物の方位は、北で20°前後東偏しており、Ⅳ期の5550-OBなどに近い。Ⅳ期においてもその傾向はみられたが、南北棟の建物が多いことが特徴である。

この時期の建物は、規模の不明な5460-OBを除いて、梁間が2間に固定される。ただし、5450-OBや5500-OBの梁間は、Ⅳ期の3間どりの建物5550-OBとほぼ同じか、むしろそれを凌ぐ規模を有している。したがって、こうした構造の違いは、建物の規模に起因するものではなく、時期差によるものであろう。とくに5550-OBと隣り合う5500-OBは、ごく近接した位置関係にありながら柱筋が一致せず、併存は考えがたいが、全体の規模や柱の大きさからみると、前代の5550-OBを破棄して5500-OBが建てられた可能性が高い。当該期の中でも、主要な建物とみることができる。

倉庫と推定される5650-OBは、2×2間の規模を有するが、内部の柱は柱筋の交点の1ヶ所ではなく、棟通りの2ヶ所に設置される。これらの柱掘方は、側柱に比べると小型で浅く、大引を受ける東柱と考えられる。床板は、この上に大引と直交してわたされたのであろう。ともあれ、前代までの通常の総柱構造の倉庫とは、多少形態を違えている。

当該期の建物において用いられた尺は、必ずしも明らかではなく、高麗尺と唐尺（大宝令小尺・いわゆる天平尺）のいずれか、決めがたいものが多い。ただ5450-OBは、とくにその梁間の柱間について、前者では完好的な数値を得ることができず、後者によったものと思われる。この時期には、建物の構造の変化とあわせて、使用尺度も高麗尺から唐尺へと移行していったことが推測される。

Ⅵ期

掘立柱建物4210-OB・5480-OB・5600-OB・5750-OBが、この時期に属する遺

構とみられる。Ⅳ期・Ⅴ期と北で東偏する建物方位が続いたが、Ⅵ期は北で西に振れる。ただし、西偏の割合は、 $3\sim 7^\circ$ (4210-OB・5750-OB)、 $37\sim 41^\circ$ (5480-OB・5600-OB)と違いがあり、方位の上からは、2つのグループに分け、それぞれに時期差を想定することが可能である。しかし、建物方位にはⅤ期にみられたような齊一性は希薄で、たとえば調査区外に蛇行する大溝を想定すれば、それに平行するかたちで建てられたと解することもできるような状況にある。また、2時期に分けたとしても、先後関係は不明であり、かつ各々の時期の棟数が過少となるのを避けられない。したがって、ここでは便宜的に、Ⅵ期として一括することにしたい。

4210-OBは全容をつかみがたいが、当該期の主殿的な性格を有するとみられる大型の建物である。桁行・梁間ともに唐尺(大宝令小尺・天平尺)の10尺と推定されるその柱間は、今回確認された中では最大である。5600-OBは、 3×2 間の規模をもつ建物で、柱間設定はやはり唐尺によるものと考えられる。ここにはじめて、「奇数間の桁行 \times 2間の梁間」という、奈良時代に通有の形式が認められる。5480-OBと5750-OBについては、規模・形式などに不明な点が多いが、4210-OBや5600-OBと同時期とみることに無理はない。なお5470-OBは、5480-OBに隣接する位置関係から、併存は考えたいけれども、方位は5480-OBや5600-OBに近い。よって、建て替えを想定すれば、この時期に含めて考えることが可能である。

Ⅵ期は、建物の構造などについては、前代からの連続性が認められるが、方位は大きく異なる。これが、周辺で検出されている真北方位の建物群と、どのように関わっていくのかという点が大きな課題であろう。ただ、使用尺度はいずれも唐尺(いわゆる天平尺)とみて矛盾はなく、建物の形式とあわせて、奈良時代の範囲でとらえることができる。

Ⅶ 期

掘立柱建物5700-OBが、この時期の建物として挙げられるにすぎない。前代までの建物とは異なり、耕土系の土を掘方の埋土としている。また掘方の形状も、径に比べてかなり深いものとなっており、明らかな違いをみせる。Ⅰ期からⅥ期まで継続して営まれた集落がいったん廃絶し、この地域が耕地化された後の時期にあたることは間違いない。したがって、Ⅵ期との間には、かなりの時間的断絶があったものと思われる。ただし、その具体的な時期は不明である。なお、5700-OBの柱間寸法は、唐尺でも完好な数値を得られるが、これはむしろ曲尺とみるべきであろう。ともあれ、建物やそれを窺わせる他の遺構が稀薄であることから、当該期の集落の中心は別の場所にあったことが確実である。

遺物

4・5区から出土した遺物は、総重量189.898kg、破片数にして21,432点に及ぶ。これらの取り上げは、第Ⅱ章第2節に記したように、方4mのグリッドを単位として、遺構や層位別に行った。そのうち、ある程度全形の窺われる資料については前項までに図示したが、今回はそれを除く大多数の破片資料も含めて、データの数値化とその活用を試みた。以下にその方法と結果を、問題点とともに簡単にまとめておきたい。

器種分類

整理にあたって、まず器種による分類を行った。以後の資料操作の基本となるものである。その意味では、分類はなるべく細かいことが望ましいが、今回出土した遺物の大半は須恵器・土師器であるので、分類はその二つを中心とし、量的に少ないものについては、とくに器種分類を行っていない。そのため、瓦器と瓦質土器は「瓦器」として一括し、また土師質土器は「土師器」に含めている。しかし、後述する「標準重量（完形品1個体あたりの標準的重量）」との関係からは、器種による分類は当然行うべきで、また同じ器種であっても、大きさの差によりいくつかのグループに分けることが望ましい。

破片数計測

接合作業の前に、器種ごとに破片数の計測を行った。遺物の絶対量および相対的な比率を示す手段はいくつか考えられるが、現在は一般に、破片数を用いて表示されることが多い。本書の中でも、他の調査区から出土した資料の分析には、この破片数データが使用されており、4・5区においても、資料の数値化の一環として実施した。

ただし破片数データの場合、その性質上、完形に近い大型の破片も、また径1cmにも満たない極小の破片も、同じく1片として数えるという大きな問題点を内包している。

これが問題となる第一の点は、総体としての遺物量の実体が明確でないことである。破片〇〇点と聞いたとき、その量的なイメージを掴みにくいのも、それがどの程度の大きさの破片なのか、不明なことによるものと思われる。

第二に、須恵器と土師器といった土器の種類や器種によって、破損率や細片化の度合に違いがある場合でも、同じレベルで捉えざるをえないことである。例えば、土師器は須恵器に比べて細片化しやすい傾向にあることが予想され、それは後に述べるように、ある程度正しいと考えられる。したがって、幾100片といっても、一般に須恵器と土師器とは実質としての量に違いがあるとみられるが、数値の上では同量となる。

第三に、遺構の性格により、あるいは遺構と包含層、またその中でも表土近くの包含層

と下部の包含層という出土部位の相違により、細片化の程度に差がある場合、それに影響されて実情を反映しないことである。一般的には、表土付近の包含層など度重なる攪乱を受けている部分では、細片化の度が進んでいるため、破片数は実体に比べて多くなる傾向にあると考えられる。

このように破片数データは、その性格上、異なる条件下の資料を比較する際には、必ずしも実体を示さない場合があることが推測される。したがって、一つの遺跡内で、地区その他により比較する場合はもちろん、遺跡と遺跡とを比べるときに、それがどこまで意味のあるものなのか、十分に吟味する必要がある。

また土器が、埋没後、発掘調査時にいくつの破片となって出土するか（緻密には、整理作業の段階で何片の破片となっているか）ということは、きわめて偶然性に左右される問題で、あらかじめ一定の数値化を行うことは不可能である。そのため破片数データは、どのような操作によっても、個体数に還元することは、本質的に困難である。

以上のように破片数計測は、それに要する労力にもかかわらず、結果の有意性という点で根本的な問題を含んでおり、データの利用に際しては、こうした性質とその限界を常に認識する必要がある。

第10表 4・5区出土遺物集計表(1) 総合計

器種 (標準重量) g	重量 g	重量比 ⁽²⁾ 換算個体数	破片数	細片化指数 ⁽³⁾
須恵器				
杯 (190)	10,329	54.4	662	12.2
高杯 (550)	8,576	15.6	465	29.8
杯or高杯 (260)	22,069	85.0	2,581	30.4
瓶 (650)	2,085	3.2	75	23.4
埴 (250)	52	0.2	9	—
壺 (1,500)	7,110	4.7	475	101.1
壺 (7,000)	14,159	2.0	218	109.0
壺or壺 (3,000)	57,052	19.0	3,278	172.5
取 (500)	901	1.8	82	45.6
鉢 (1,200)	551	0.5	7	—
蓋 (260)	16	0.1	1	—
不明	1,876		498	
小計	124,806	186.5	8,351	
土器				
杯 (180)	37	0.2	10	—
高杯 (360)	277	0.8	29	—
杯or高杯 (270)	2	< 0.1	1	—
瓶 (210)	2,266	10.8	605	56.0
壺 (1,500)	3,815	2.5	516	206.4
壺 (900)	2,977	3.3	593	179.7
壺or壺 (1,200)	18,832	15.7	3,367	214.5
羽釜 (1,500)	3,410	2.3	151	65.7
皿 (30)	968	32.3	337	10.4
飯 (1,500)	674	0.4	100	250.0
甕 (6,000)	249	< 0.1	6	—
鍋 (1,500)	165	0.1	2	—
不明	4,820		3,266	
小計	38,492	68.4	8,983	
その他				
瓦器 (300)	13,807	46.0	3,813	82.9
陶磁器 (250)	1,655	6.6	103	15.6
瓦 (3,000)	10,990	3.7	165	44.6
石器・銅片	100		12	
鉄器	11		1	
銭貨	5		3	
土人形	32		1	
小計	26,600	56.3	4,088	
合計	189,898	311.2	21,432	

- (1) 完形品1個体あたりの標準的重量(概算値)。
- (2) 「重量/標準重量」0.1未満は計算から除外した。重量比で完形品何個体分に相当するかを示す。
- (3) 「破片数/重量比換算個体数」1個体が平均何片の破片となっているかを示す。破片数50未満の資料は計算から除外した。

第11表 4・5区出土遺物集計表(2) 遺構・包含層別合計

		遺 構 出 土 遺 物						包 含 層 出 土 遺 物			
器 種	(標準重量)	重 量 g	重量比換算 個体数	(1)	破 片 数	平均遺存率 (%)	破片比重数	重 量 g	重量比換算 個体数	破 片 数	破片比重数
	g			最小個体数							
須 恵 器	坏 (190)	6,623	34.9	111	352	31.4	10.1	3,706	19.5	310	15.9
	高坏 (550)	2,331	4.2	34	76	12.5	18.1	6,245	11.4	389	34.1
	坏or高坏 (260)	2,574	9.9	110	292	9.0	29.5	19,525	75.1	2,289	30.5
	瓶 (650)	951	1.5	8	24	18.3	—	1,134	1.7	51	30.0
	埴 (250)							52	0.2	9	—
	壺 (1,500)	2,494	1.7	27	119	6.2	70.0	4,616	3.1	356	114.8
	甕 (7,000)	13,001	1.9	11	195	16.9	102.6	1,158	0.2	23	—
	壺or甕 (3,000)	2,475	0.8	59	194	1.4	245.5	54,577	18.2	3,084	169.5
	瓶 (500)	548	1.1	5	15	21.9	—	353	0.7	67	95.7
	鉢 (1,200)	370	0.3	1	5	30.8	—	181	0.2	2	—
	甕蓋 (260)	16	0.1	1	1	6.2	—				
	不明	54			16	30		1,822		468	
	小 計	31,437	56.4	383	1,303			93,369	130.3	7,048	
土 器	坏 (180)							37	0.2	10	—
	高坏 (360)	77	0.2	2	11	10.7	—	200	0.6	18	—
	坏or高坏 (270)	2	<0.1	1	1	0.7	—				
	碗 (210)	133	0.6	15	31	4.2	—	2,133	10.2	574	56.3
	壺 (1,500)	3,196	2.1	21	477	10.1	227.1	619	0.4	39	—
	甕 (900)	2,964	3.3	22	589	15.0	178.5	13	<0.1	4	—
	壺or甕 (1,200)	5,469	4.6	97	1447	4.7	314.6	13,963	11.1	1,920	173.0
	羽釜 (1,500)	224	0.1	3	8	5.0	—	3,186	2.1	143	68.1
	皿 (30)	16	0.5	4	9	13.3	—	952	31.7	328	10.3
	瓶 (1,500)	634	0.4	4	99	10.6	247.5	40	<0.1	1	—
	甕 (6,000)	202	<0.1	2	5	1.7	—	47	<0.1	1	—
	鍋 (1,500)	11	<0.1	1	1	0.7	—	154	0.1	1	10.0
	不明	853			52	752		3,967		2,514	
小 計	13,781	11.8	224	3430			24,711	56.4	5,553		
そ の 他	瓦器 (300)	71	0.2	17	40	1.4	—	13,736	45.8	3,773	82.4
	陶磁器 (250)	147	0.6	6	8	9.8	—	1,508	6.0	95	15.8
	瓦 (3,000)	1	<0.1	2	2	<0.1	—	10,989	3.7	163	44.1
	石器・剥片	42			3	3		58		9	
	鉄器							11		1	
	銭貨							5		3	
	土人形							32		1	
小 計	261	0.8	28	53			26,339	55.5	4,045		
合 計	45,479	69.0	635	4,786			144,419	242.2	16,646		

- (1) 遺構単位での接合後、遺物相互の比較・検討により推定した、器種ごとの最小個体数。
- (2) 「(重量比換算個体数/最小個体数)×100」。
- ここでは、最小個体数が当初の実数に近いものとして、重量比で平均何%遺存しているかを示す。

重量計測

破片数計測と並行して、器種ごとに重量計測を実施した。前述のように破片数データは、その性質に起因するいくつかの欠点を内包しているが、重量データのばあいには、それらの大半は解消されると考えられる。

まず重量データにおいては、遺物量がそのまま客観的・一義的なデータとして明確に示される点が評価できる。この場合、破片数で表示されたときのように、破片の大きさの程度という不確定要素は介在しない。〇〇kg・□□tといえば、経験の差にもよるが、量的なイメージをつかむことが可能であり、かつその数値は実体としての量を正しく反映するとみられる。また重量データは、器種や出土部位の違いなどによって細片化の度合に差がある場合でも、その影響を受けることがない。このため破片数と違って、条件の異なる資料についても、それらを考慮することなく、同一の観点から比較することが可能である。さらにデータの安定性という点からみると、重量はきわめて安定した数値であるということが出来る。破片数のように、1片の土器が割れて10片になるといった不確実性はない。

以上のように重量データは、破片数データに比較すると、その有意性という点でより優れたものと考えられる。これはデータの性格に由来する本質的な相違であり、かりにどちらか一方しか選べないとすれば、重量データを採用する方が有意義であろう。また作業の能率からいっても、器種ごとの一括計量が可能な点で、破片数計測に比べて簡便であることは大きな特長である。

ただし、重量データの場合、個体数が同じであっても、1個体あたりの重量が大きいものは、小さいものに比べて破片重量は大きくなるため、そのまま個体数の比に還元はできない。もちろん、大型品は小型品より重くみるべきだとする考えは当然成り立つから、重量データを用いて器種間の量的な比較を行うことは有効であるが、それは個体数には直結しない点に留意しておかねばならない。

重量比換算個体数の算出

ここで、重量をもとに個体数を反映したデータを得る方法として考えられるのが、器種ごとに「標準重量」（完形品1個体あたりの標準的重量）を設定して、器種単位の総重量をそれとの比率で表すことである。つまり、標準的な大きさ（重さ）の完形品に換算して何個体分に相当するかという数値であり、これを「重量比換算個体数」と呼んでおくことにする。この場合、標準重量の設定さえ正しく行われれば、「重量比換算個体数」は、器種ごとの個体数の比率を示すきわめて有効な指標となる。とりわけ須恵器や土師器は、小

型の器種においてとくに顕著なように、1つの型式内での法量の規格性が強く、標準重量の算定やそれに基づく種々のデータ処理は、大きな意味をもつとみられる。したがって、重量データにおける個体数との乖離という問題は、これによって解消することができ、異なる器種間であっても、また総体においても、同じ次元で個体数の問題を扱うことが可能となろう。

個体数の算出法としては、他に1つ1つの個体を識別する方法や、器種・法量ごとに口縁部の残存率を合計する方法などが行われている。しかし前者は、限られた一括資料の検討には有効であっても、大量の資料を対象とする場合は、多大の労力を要する反面、精度が低下する。一方後者は、口縁部以外の破片を資料化できないという根本的な問題を含んでおり、その方法上の有意性は、口縁部の残存率が個体の残存率と等しいが、少なくとも大きな差違はないという仮定に依拠せざるをえない。また口縁部破片のうち、法量の復元が困難な小片については、残存率の計算にかなりの誤差が含まれることになる。

したがって、重量と標準重量の比から個体数を算出する方法は、これらに比べて、大量の資料を迅速に処理できるうえに、器種不明のものを除く全ての資料を対象にしようという点で、より優れていると考えられる。そこには、土器の部位による残存率の違いなどの不確定要素が介在する余地はない。以上のことから、重量計測とあわせて、それを補完する形で重量比換算個体数を算出することにより、遺物の量に関してはほぼ不足のない情報を得ることができると思われる。

ただしこれには、標準重量をどのように設定するかが大きな影響を与える。今回は、器種ごとに完形品またはそれに近い個体の重量をいくつか計測し、標準的な重量を概算した。「坏または高坏」のように、どちらの器種になるのか不明な場合は、個体数の比率を大まかに推定して、各々の標準重量から算出している。ここでは器種の細分や法量による分類はおこなわなかったが、先にも述べたように、こうした分類は細かい方が望ましい。とくに、同一器種内で法量分化が認められる場合などは、いっそうその必要性が顕著となる。したがって、復元口径などからいくつかのグルーピングを行い、それぞれに標準重量を設定する作業が要求されよう。また、長期にわたる遺跡の場合、当然複数の型式の土器が含まれることになるが、そうした型式間の重量差が大きい場合は、型式分類とそれに応じた標準重量の算定が必要となる。

なお今回の遺物の集計にあたっては、遺構・層位単位で、器種ごとの重量比換算個体数が0.1未満のものは切り捨てとし、計算から除外している。

最小個体数の推定

重量と破片数の計測後、遺物の接合を行った。接合作業は、まず取り上げの単位ごとに、次いで遺構ごとにまとめて実施している。この際に、遺構から出土した土器については、個別に比較検討することにより、遺構単位で器種ごとの最小個体数を算出した。

作業にあたっては、接合を経て、ある程度全形を知りうる状態になった遺物を中心に、形状や法量、また胎土や焼成の具合を比較して、各器種が最低何個の個体からなるかを推定した。このときに、口縁部や底部の個数やその残存率も、あわせて考慮の対象に加えている。なお、別個体であることが明瞭なもの以外は、計算上同一個体に含めているので、遺構単位の実際の個体数は、この最小個体数より幾分多くなると思われる。ただし、別々の遺構から出土した土器や、遺構と包含層から出土した遺物を、相互に比較する作業は行っていない。そのため、遺構の種類ごとの集計や遺構全体の合計においては、実際の個体数を上回る場合もあることが想定される。また包含層出土の遺物については、作業量が膨大なものになるため、一部を除いて接合作業や最小個体数の算出は行わなかった。

各種計量法の比較

以上のように、今回は各種の方法を用いて、遺物の計量を実施した。もちろん不備な点も多いが、ここで実際の遺物を、重量・破片数・重量比換算個体数・最小個体数のそれぞれによって数値化した結果を比較しておきたい。

器種構成 まず出土遺物全体について、遺物の種類や器種別の構成比を示すと、第165図のようになる。なお土器以外の遺物は、合計には加えているが、微量のため、この図からは除外した。これから明らかなように、須恵器は重量において全体の65.7%を占めるが、破片数では39.0%にすぎない。重量比換算個体数は、60.0%と重量に近いが、両者の中間の値を示す。逆に土師器は、重量では20.3%にすぎないけれども、破片数は全体の41.9%を占め、須恵器のそれを凌ぐ。重量比換算個体数が21.9%と、やはり重量に近く、両者の中間の値を示すことは変わらない。

したがって須恵器は、土師器に比べて1片あたりの平均重量が大きく、逆に土師器は、平均して破片1個あたりの重量が小さいことが知られる。そしてそれは、両者の比重や器厚に顕著な差が存在しない点からみて、土師器の方が、須恵器に比べて細片化が進んでいることを示すものと考えられる。

こうした傾向は、瓦器についても認められる。すなわち瓦器は、破片数において全体の17.8%を占める一方、重量では7.3%にすぎない。よって、「破片数比/重量比」の数値が

大きいほど破片1個あたりの平均重量が小さい、つまり細片化していると考えれば、瓦器は土師器よりさらに細片化が進行していることになる。

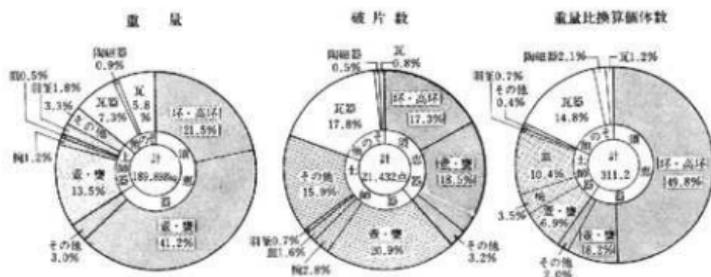
これと対照的なのが、瓦である。瓦は、破片数では僅か0.8%にすぎないが、重量では全体の5.8%を占める。この「破片数比/重量比」の数値は、他のいずれよりも小さく、1片あたりの平均重量が大きいことが知られる。これは、瓦が土器に比べてかなり厚みをもっていることにも関係するが、遺物の細片化傾向を左右する要素の一つと考えられる「表面积/厚さ」の値が、瓦の場合かなり小さく、基本的に細片化しにくい遺物であることを示すものとも解される。

次に須恵器・土師器の各々について、器種別の構成比をみてみよう。まず須恵器においては、甕または甕という大型品の比率が、重量比で全体の41.2%（須恵器に限れば、その62.8%）に達し、破片数でも18.5%（同じく47.6%）を占める。しかし、これらの数値が個体数に結びつかないのは既に述べたとおりで、個体数を最もよく反映すると考えられる重量比換算個体数では、これらの大型品の比率は8.2%（同13.8%）にすぎない。逆に坏または高坏という小型品は、重量で21.5%（同32.9%）、破片数で17.3%（同44.4%）と少ないが、重量比換算個体数では49.8%（同83.1%）に達する。

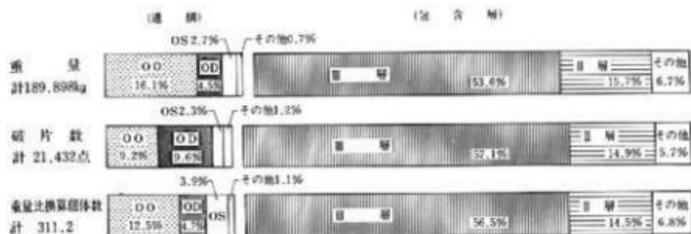
したがって大型品は、個体数は少ないものの、個体あたりの重量が大きいため、全体に占める重量比はかなり大きく、また多数の破片となることが推測される。逆に小型品は、個体数は多いが、全体の中での重量比は小さく、破損する場合もそれほど多くの破片にならないことが窺われる。

土師器についても同様のことがいえよう。すなわち、重量比や破片数の比率が高い甕や甕などの大型品は、重量比換算個体数では相対的な比率が低下し、逆に皿などの小型品は、重量や破片数では低く、重量比換算個体数で高い比率を示している。なお、破片数において「その他」の占める割合が多いのは、器種不明の細片が多数含まれていることによる。

遺構・層位別出土量 第166図には、遺構・層位別に遺物の出土量を比較した。これによると、遺構に比べて、包含層から出土した遺物の量がかなり多いことがわかる。そしてその比率は、重量・破片数・重量比換算個体数で、それぞれ76.0%・77.7%・77.8%とほぼ一定している。また包含層出土遺物は、Ⅲ層・Ⅱ層・その他と層位によって分けたが、各々の比率も、重量から重量比換算個体数の間で大きな違いはない。このように3種の計量法による結果がほぼ一致するのは、各層位間で、また遺構と包含層の双方において、器種構成に大きな差違が存在しないことを示すものであろう。



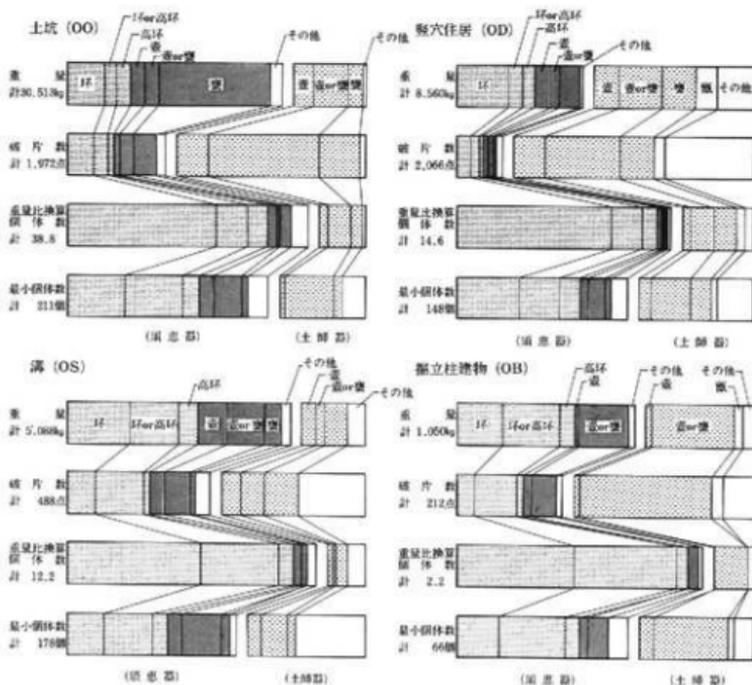
第165図 出土遺物の器種構成



第166図 遺物の遺構・層別出土量

遺構から出土した遺物は、重量で24.0%、破片数で22.3%、重量比換算個体数で22.2%と、比較的少ない。遺構別にみると、全体に土坑（OO）出土のものが多く、竪穴住居（OD）・溝（OS）出土の遺物がこれに次ぐ。ただし破片数においては、竪穴住居出土遺物の割合が最も大きくなっている。また各々の量的な比率も、計量法ごとに若下の違いが認められ、遺構の種類により、器種構成や遺存状況が異なることを予想させる。

遺構別器種構成 そこで、まず土坑・竪穴住居・溝・掘立柱建物のそれぞれについて、遺構別の器種構成を示したものが第167図である。ここでは遺物量を、重量・破片数・重量比換算個体数・最小個体数の4種の方法を用いて表示した。なお、いずれも遺構別に比率で表しているが、遺物の絶対量は、重量および重量比換算個体数でいうと土坑が最大で、以下、竪穴住居・溝・掘立柱建物の順で続く。各々の間には大きな差が存在することを付言しておきたい。また、最小個体数は、個々の遺構ごとの数値を集計しているため、遺構の種類による合計は、実数をやや上回っていると思われる。



第167図 遺構別器種構成

この図から明らかなように、竪穴住居を除くと、重量では須恵器の出土量が土師器のそれを凌駕する。これは、程度の差はあっても、重量比換算個体数・最小個体数において共通してみられる事象であり、第165図に示した全体の中での構成比とあわせて、基本的に須恵器が主体となる土師器構成であったことをうかがわせる。なお、他の計量法では須恵器に比べ少なかった土師器が、破片数においては須恵器と拮抗するか、むしろそれを凌ぐ比率を有しているのは、土師器が一般に細片化しやすいことを明確に示すものである。また竪穴住居からの土師器の出土量が、他の遺構と比較して多いという状況は、最小個体数を除く全ての項目において認められる。この理由はいくつか想定されようが、いずれにしても遺構の性格の違いに起因するものと思われる。

須恵器の器種別にみると、先に全体の器種構成でも触れたように、坏などの小型品は重

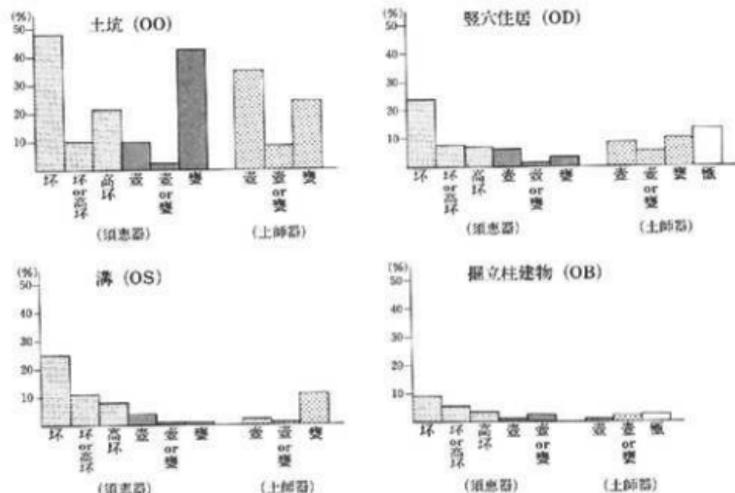
量や破片数ではさほど多くないが、重量比換算個体数では圧倒的な比率を占める。壺や甕などの大型品は、ちょうどこれとは逆に、重量比換算個体数では少ないけれども、重量や破片数ではかなりの割合を占めている。そうした様相は、各遺構を通じてほぼ共通しており、須恵器の中では小型品の個体数が多く、大型品の個体数は少ないという全体的な傾向は変わらない。ただし、遺構の種類によってその比率には差違があり、とくに重量において顕著なように、甕などの大型品の比率が高いものもみられる。

土師器は、壺・甕・甗が多く、それ以外の器種は微量である。重量比換算個体数でも、小型の器種はごく僅かしかみられないので、調理用的大型品を中心とした器種構成であったことは間違いない。竪穴住居から各々の器種が比較的多量に出土しているのが目をひくが、それを除くと、遺構の種類による相違はとくに認められなかった。

平均遺存率

これまで述べてきたように、今回は複数の方法を用いて遺物の計量を行った。それぞれの結果の比較は前に記したが、次にそれらの数値を組み合わせることによって得られる情報について、考えてみることにしたい。

まず、先ほどの遺構別器種構成の比較に引き続いて、遺構の種類により土器の遺存状況



第168図 遺構出土土器の平均遺存率

に違いがないか、検討してみよう。ここで、遺構から出土した土器については、遺構単位に最小個体数を推定しているのだから、便宜的にそれを当初の個体数に近いものと仮定する。すると、発掘調査によって得られた土器の量は、器種ごとの重量比換算個体数により、近似的に個体数として示されるため、両者の比を用いて土器の遺存率を表すことが可能となる。これを「平均遺存率」としよう。すなわち「平均遺存率(%) = (重量比換算個体数 / 最小個体数) × 100」ということになる。

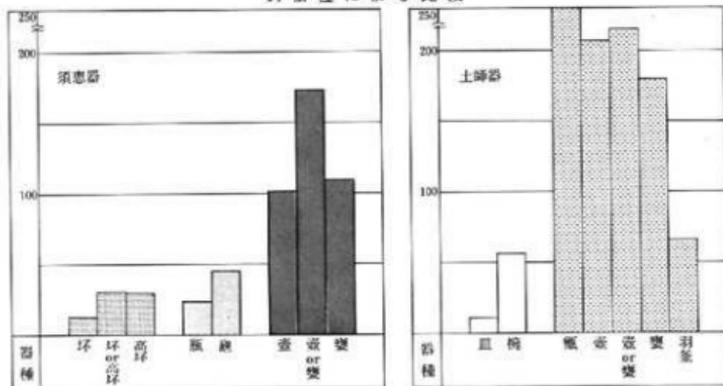
この場合、最小個体数を当初の実際の個体数に近いと考えたのは、その算出が遺構単位での個体識別という信頼性の高い方法によっていることに基づく。ただ、先にも記したように、遺構の種類ごとの最小個体数は、個々の遺構の数値を合計しているのだから、当然重複があり、実数をやや上回っていると思われる。また、最小個体数とは別に、当初の個体数を的確に表示する指標があれば、それを用いた方が望ましいことは言うまでもない。

以上のようにして平均遺存率という概念を定め、それを土坑・竪穴住居・溝・掘立柱建物の四者間で比較したものが第168図である。これによれば、遺構の種類によって、土器の遺存率には明らかな差があることが窺われる。つまり、土坑の平均遺存率は他に比べて非常に高く、竪穴住居や溝がそれに次ぎ、掘立柱建物ではごく低い。

これは、土坑出土の土器の場合、廃棄によるものと一定の意図にもとづく集積・埋納によるものとを問わず、一括性が強く、後世の攪乱を除いて基本的に原位置を大きく動くことがないためと考えられる。埋没するまでの時間も長くはなかったであろう。それに対して溝の場合は、流水などによって土器の位置が大きく移動することがあるうえに、遺物自体が土坑ほどの一括性をもたない。竪穴住居出土遺物の平均遺存率が比較的低いのは、住居の廃絶後、自然の営力によって埋没する場合の覆土中に、当該住居とは無関係の土器片（多くは細片である）が混入した結果と思われる。床面上やそれに準ずる位置から出土した遺物に限れば、平均遺存率はずっと高い数値を示すことが確実である。掘立柱建物の柱穴から出土した土器は、柱掘方や抜取穴が掘削され、埋められる（埋まる）過程で偶然取りこまれたもので、当然その遺存率は低い。ほとんどが細片であり、掘方や抜取穴中に意図的に埋置・廃棄された例は認められなかった。

土器の器種別では、須恵器と土師器の間で、平均遺存率が大きく異なることはないようである。ただ、坏などの小型品は、大型品に比べて高い遺存率を示している。大型品の平均遺存率が低いのは、攪拌などにより完形に近い状態を保つのが難しく、とくに耕地化のため、包含層中に多くが含まれる結果となったことに関連するのであろう。

1. 器種による比較



2. 須恵器と土師器の比較



3. 遺構と包含層の比較 (須恵器)



4. Ⅰ層とⅡ層の比較



第169図 出土土器の細片化指数

細片化指数

これまで何度か、土器の種類や器種の違いなどにより、細片化傾向に差があることを述べてきた。ここでは、それらを数値化することによって比較してみたい。まず土器1片あたりの重量については、重量と破片数の比を用いて表すことができるが、これによると、器種による大きさの違いは捨象されることになる。そこで、重量比換算個体数と破片数の比をもって、器種ごとに1つの個体が平均何個の破片となっているかを示す「細片化指数」とすることにしたい。つまり「細片化指数＝破片数／重量比換算個体数」と定義する。以下、これに基づいて、各種の資料の比較を行った。

器種による比較 須恵器・土師器の各々について、器種による細片化指数の違いを比較した(第169図1)。図から明らかなように、須恵器においては、坏・高坏や甕・瓶などの小型品・中型品の細片化指数が小さいのに対し、壺・甕のような大型品のそれは大きい。この状況は土師器においても明瞭に認められ、平均して大型品は小型品に比べ、著しく多数の破片となっている様相が看取される。また、須恵器に比較して、土師器の細片化指数が一般に大きいことが窺えよう。

須恵器と土師器の比較 そこで、両者の細片化傾向の違いを明確に示すため、壺・甕または甕・甕の三者について、須恵器と土師器の細片化指数を比較した(第169図2)。これによって、土師器は須恵器に比べて明らかに細片化指数が大きいことがわかる。そして、須恵器のこれらの器種、とくに甕が、土師器に比べてかなり大型のものであることを考慮すれば、実際にはその傾向はよりいっそう顕著なものであることが窺える。

遺構と包含層の比較 次に、一般に包含層の土器は、遺構内から出土した土器に比べて細片化が進んでいると考えられるため、両者の細片化指数を須恵器について比較することにした(第169図3)。土師器については、両者に共通する資料が乏しいため、除外している。ここでは「壺または甕」を除いて、包含層出土資料の細片化指数が、遺構出土資料のそれを、いずれもかなり上回っていることが確認された。

Ⅲ層とⅡ層の比較 包含層の中でも、上部のⅡ層は、下位のⅢ層に比べて攪拌による細片化が進んでいる可能性が想定されるため、両者の細片化指数を比較した(第169図4)。ところが、須恵器については、いずれの器種においてもⅡ層の資料の細片化指数がⅢ層をやや上回るが、土師器については必ずしもそうならない。この理由は明確でないが、硬質の須恵器の場合、段階的に細片化が進むのに対し、軟質の土師器の場合は、外力により一時に細片化しやすいことを示すものかもしれない。

第Ⅳ章 上フジ遺跡の調査成果

第1節 基本層序

本調査区は、幅（東西）20m、延長（南北）215m、比高2.2mの緩傾斜面に位置する。調査区北側は植木の植林地、南半部は水田、畑として利用されていた。土層断面観察の結果、土層は、大きくⅠ～Ⅲ層に分層できた。

基本的には、Ⅰ層からⅢ層までは、ほぼ水平に堆積していた。また現在の水田区画に対応する位置に段差を検出した。

基本土層は、以下のとおりである。

Ⅰ層 表土層。水田耕土及び植林にともなう置き土。

Ⅰa層は10Y R2/1黒色シルト泥じり微砂。

Ⅰb層は10Y R6/3にぶい黄橙色シルト。

Ⅰc層は10Y R4/2灰黄褐色シルト・礫混じり微砂。

Ⅰd層は10Y R7/8黄橙色砂礫。

Ⅰe層は10Y R3/1黒褐色微砂混じりシルト。

Ⅰf層は10Y R6/4にぶい黄橙色シルト泥じり微砂。

Ⅱ層 近世水田層。厚さ23cm。シルトを主とする。酸化層。

Ⅱa層は10Y R6/3にぶい黄橙色細礫・細砂混じりシルト。

Ⅱb層は7.5Y R5/6明褐色シルト。

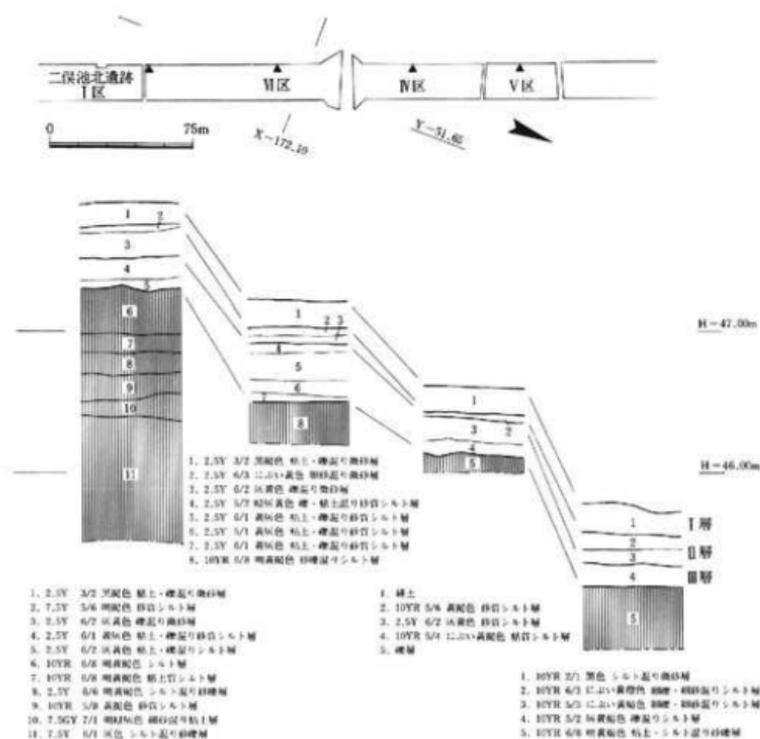
Ⅱc層は10Y R6/2灰黄褐色シルト。

Ⅱd層は10Y R5/4にぶい黄褐色細礫・細砂混じりシルト。

Ⅱe層は10Y R6/1褐灰色砂礫混じりシルト。

Ⅱf層は10Y R6/6明黄褐色砂礫混じりシルト。

Ⅱg層は10Y R5/2灰黄褐色シルト。



第170図 M~V区 基本層序模式図 (1/3000, 1/40)

III層 中世水田層。厚さ20cm。シルトを主とする。還元層。

III a層は10Y R5/2灰黄褐色礫混りシルト。

III b層は10Y R5/4にぶい黄褐色粘土混りシルト。

地山層 北半部はシルトを、南半部は砂礫を主とした土層。

IV a層は10Y R6/6明黄褐色粘土・砂礫混りシルト。

IV b層は10Y R6/8明黄褐色粘土・シルト混り砂礫。

第2節 IV区の調査

第1項 調査の概要

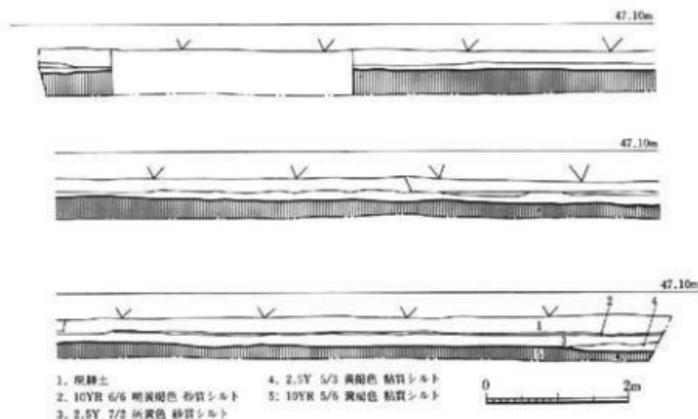
IV区は上フジ遺跡の南半部にあたり、幅（東西）20m、延長（南北）68mの調査区である。調査区南端から北端までの比高約0.7mをはかる緩傾斜面に位置する。

当調査区では、サヌカイト製石器や古墳時代から近世にかけての遺物を包含する中近世の耕作土と推定される層を確認したのを始め、最終遺構確認面上においては古墳時代後期の谷状の「落ち」や、奈良時代の土坑、中世のピット・溝等を検出した。

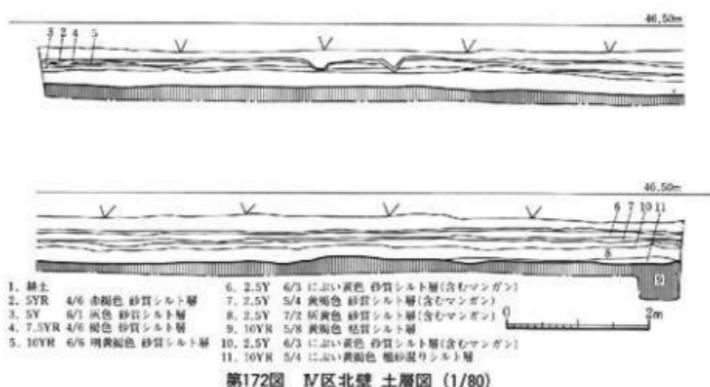
I層は近現代の耕土・床土に、II層は近世の耕土・床土、III層は中世の耕土・床土に相当する。畦畔は検出されていないが、他の調査区の状況から推して、III層を耕土とする耕作面が存在していたものと考えられる。遺構の大半は、地山面にて検出された。

第2項 弥生時代以前の遺物

当該期の遺構、包含層は検出されていないが、中世包含層であるIII層および古墳～奈良時代にかけての谷状遺構854-OXから、サヌカイトの剥片が出土した。



第171図 IV区 南壁土層図 (1/80)



第3項 古墳～奈良時代の遺構と遺物

土 坑

853-00 (第173図, 図版82上a・b)

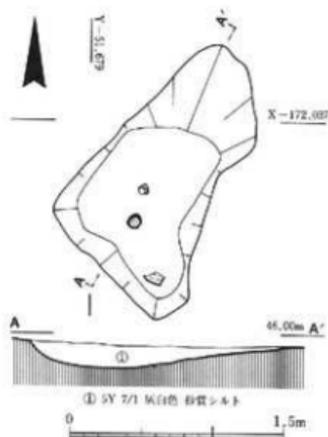
854-OXの縁辺に位置している。長径1.78m、深さ0.15m前後をはかる不定形な土坑である。長軸線は、およそ北東から南西方向に走る。深さは南西部が深く、北東方向に向かって浅くなっている。埋土は礫を含んだ灰白色系の砂質シルトである。下層の一部で砂の堆積が認められた。

遺物を4点検出した。土師器高坏、須恵器坏蓋・鉢は比較的大きな破片である。この他に坏身とみられる小破片がある。

この土坑は、出土遺物から奈良時代前期の時期が比定される。

出土遺物 (第174図, 図版83)

須恵器坏蓋(1) 口径16.8cm、器高2.9cmをはかる。外面のおよそ1/2にヘラケズリを施す。他に回転ナアを施す。扁平な宝珠つまみを有する。宝珠径3.0cm、宝珠高0.6cmをはかる。焼成はやや不良である。



第173図 853-00 平面・断面図 (1/40)

須恵器鉢(2) 底径8.9cmをはかる。底面にヘラケズリを施す。その他に回転ナダを施す。焼成は良好である。

上器器高坏(3) 脚部径4.4cmをはかる。脚部に8面の面取りを行ない、外面端部付近にハケ調整を施す。外面色調は2.5Y8/2灰白色を呈し、断面色調は5YR6/8橙色を呈する。焼成は良好である。



谷状遺構

854-OX (第175図, 図版81下)

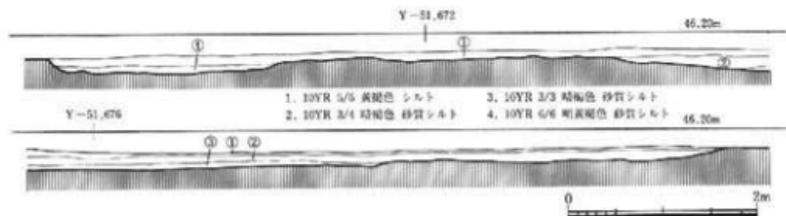
調査区を斜めに縦断する浅い谷状の「落ち」である。この「落ち」の幅は一定しておらず、最大幅およそ15mを測る。深さは最深部で0.2m前後を測り、北西に向かい浅く 第174図 853-OO 出土土器(1/4)なる。堆積は大きく2層に分れる。上層は黄褐色系のシルト、下層は暗褐色系の砂質シルトである。

遺物の多くは、中央部の幅が広がった付近で検出した。上層からは古墳時代から奈良時代にかけての土器が、下層からは古墳時代の土器が出土した。下層出土の土器の中には、ほぼ原形のまま土圧により粉砕されたとみられるものもあった。この他に、サヌカイト剥片を2点検出した。

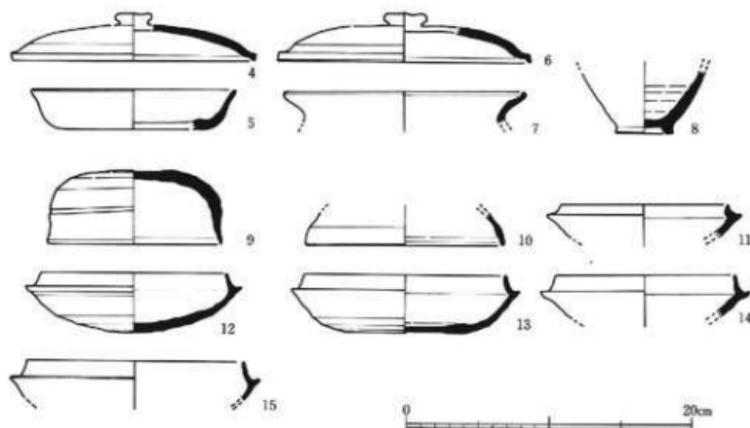
出土遺物やその検出状況からこの「落ち」は、古墳時代後期から奈良時代にかけて徐々に堆積したとみられる。またこの「落ち」は、上フジ遺跡Ⅱ・Ⅲ区で検出された自然河川(562-OR)と類似しているが、今回の調査では明らかな流水の痕跡は確認されなかった。

出土遺物 (第176図, 図版83)

須恵器坏蓋(4・6) 口径はそれぞれ16.8cm, 17.6cmをはかる。天井部から口縁端部にかけてが「乙」字状に屈曲する。外面のおよそ2/3にヘラケズリを施す。



第175図 854-OX 断面図 (1/60)



第176図 854-O X 出土土器 (1/4)

須恵器坏身 (5) 口径14.4cm, 器高2.8cmをはかる。底部の残存は僅かであるが, 底面はヘラ切り未調整とみられる。

土師器甕 (7) 口径16.5cmをはかる。口径端部を丸く仕上げ, 内彎させる。外面色調は7.5Y6/6橙色, 断面色調は7.5Y5/6明褐色を呈する。胎土に1.0mm大の白色砂粒を多く含む。焼成は良好である。

須恵器瓶 (8) 底径4.0cmをはかる。体部外面に回転ヘラ削りの後, 回転ナデを施す。底面に回転糸切り痕が認められる。高台が「ハ」の字状に取り付く。

須恵器坏蓋 (9・10) (9)は口径12.0cm, 器高5.2cmをはかる。口径端部は鋭い。外面のおよそ1/4の範囲にヘラケズリを施す。天井部と体部の境目に鈍い凹線を巡らせる。

(10)は口径13.8cmをはかる。天井部と体部を隔する稜線は不明瞭である。焼成はやや不良である。

須恵器坏身 (11-15) 口径はいずれも11.6-15.0cmの範囲に含まれる。(12)は口径12.8cm, 器高4.2cmをはかる。底部は丸く, 外面のおよそ1/3にヘラケズリを施す。(13)は口径14.0cm, 器高4.2cmをはかる。底部は平たく, 外面のおよそ1/4にヘラケズリを施す。

(59)は図示できなかった。弥生上層もしくは土師器である。器形は不明である。端部が「Γ」字状に屈曲し, 面をもつ。端面の幅約2.0cm, 1条の凸線が巡る。ナデ調整とみられる。胎土に3mm大の白・灰色砂粒を多く含む。焼成はやや不良。

第4項 鎌倉～室町時代の遺構と遺物

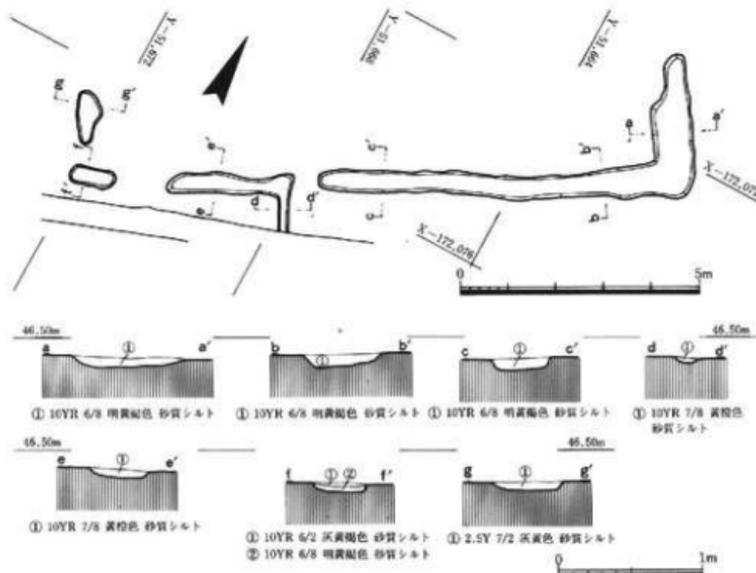
溝

850-O S (第177図, 図版82下d)

調査区の南端部で検出した一連の溝である。幅40cm前後、深さ8cm前後をはかる。現在、溝は分断された状態で「コ」の字状に巡るが、もとは一本の溝であったと思われる。

埋土はそれぞれ微妙に異なるが、基本的には明黄褐色系の砂質シルトである。埋土中から土師器片を検出したが、細片のため器形、時期ともに不明である。

埋土が中世耕作土と推測される包含層Ⅲ層と同質であることから、この溝は中世の耕作に伴うものと考えられる。現在の地割方向とは若干異なっている。



第177図 850-O S 平面(1/120), 断面図(1/40)

ピット

852-O P (第178図, 図版28下c)

852-O Pは径0.25m前後、深さ0.1mをはかるピットである。埋土は灰黄褐色系砂質シ

ルトである。ピット内で瓦質土器
片が立った状態で検出された。

当初、柱穴とみられたが、他に対
応する柱穴は検出できなかった。

出土遺物 (第178図, 図版83)

瓦質土器甕である。外面にタタキ
を施す。焼成はやや不良である。



第178図 852-OP 平面・断面図(1/40), 出土土器(1/4)

第5項 その他の遺構

検出された遺構の中には、径1m内外の不定形な土坑が多数見られた。いずれからも遺物は検出されなかった。また掘方も不明瞭であった。これらはⅡ・Ⅲ区で検出された風倒木痕と同質のものとみられる。また樹木の根の跡とみられる溝状を呈するものもあった。

他に、中近世あるいは近現代の耕作に関連する杭列も検出された。

第6項 包含層の遺物

第179図に示した土器は、いずれもⅢ層から出土した。

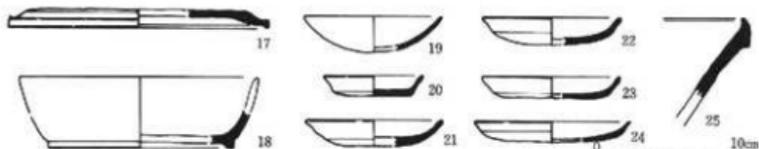
須志器坏蓋 (17) 天井部に宝珠つまみが付き、口縁部が屈曲するもの。復原口径18.0cm、残存高1.3cm。

須志器坏身 (18) 高台径は12.8cmで、口縁部を欠く。

瓦器椀 (19) 復原口径9.6cm、復原器高2.3cmで、底部は丸味をもつ。

瓦器皿 (20~24) (20)は復原口径6.8cm、器高14.5cmである。(21~23)は復原口径9.6cm、器高1.4~1.9cmである。(24)は復原口径10.8cm、器高1.5cmである。(20~24)の底部はいずれも丸味をもった平底である。

須志質土器鉢 (25) 口縁部の破片で、口縁部端部を上方に立ち上がらせる。



第179図 Ⅲ層 出土土器 (1/4)

第3節 V区の調査

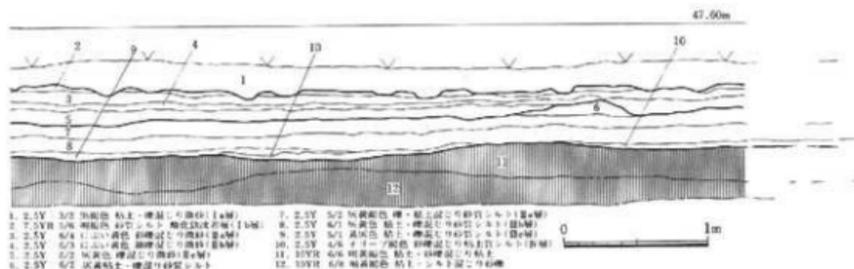
第1項 調査の概要

V区は、幅(東西)20m、延長(南北)39mの調査区である。比高約0.5mの緩傾斜面に位置し、調査前までは植木の植林地として利用されていた。

層序は、基本的に他の調査区と同じで、I層は近現代の耕土・床土、II層は近世の耕土・床土、III層は中世の耕土・床土で、各層は数層に細分される(第180図)。基本的には、I層からIII層までは、ほぼ水平に堆積していた。

調査の結果、検出した遺構は溝、土坑、樹根痕等である。遺物を出土した遺構は少なく、しかも出土遺物はいずれも小片であるため、各遺構の年代は不明である。

包含層からは、弥生時代以前のサヌカイトの石鏃、古墳時代の須恵器坏蓋、耳環等が中世の遺物に混入した状態で出土した。

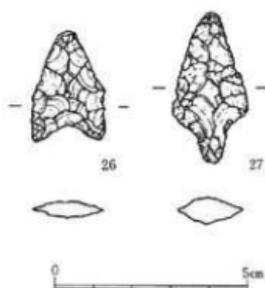


第180図 V区西壁 土層図(1/40)

第2項 弥生時代以前の遺物

弥生時代以前の遺構および包含層は検出されていないが、石鏃、剥片等の石器が後世に形成された包含層中より出土している。石質はいずれもサヌカイトである(第181図、図版87上)。

石鏃(26・27) (26)は凹基式の石鏃で、長さ4.0cm、幅1.95cm、厚さ7.0mmをはかる。重量は1.73gである。(27)は凸基式の石鏃で、長さ2.8cm、幅1.9cm、厚さ4.0mmをはかる。



第181図 III層 出土石器(2/3)

重量は3.74gである。

第3項 古墳～室町時代の遺構と遺物

土 坑

902-00 (付図7, 図版84)

E24VAに位置する。径65×80cm, 深さ16cmをはかる。主軸は南北。埋土は10YR4/4褐色粘土質シルトで、遺物は出土しなかった。

916-00 (付図7, 図版84)

E24YAに位置する。径51×105cm, 深さ9cmをはかる。主軸は北東。917-00を切っている。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色礫混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

917-00 (付図7, 図版84)

E24YAに位置する。径60×80cm, 深さ14cmをはかる。916-00に切られている。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色礫混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

919-00 (第184図, 図版84)

E24XBに位置する。径180×115cm, 深さ14cmをはかる。埋土は10YR3/2黒褐色粘土質シルト層で、埋土から土師器の破片が出土した。

920-00 (第184図, 図版84)

E24XBに位置する。径93×142cm, 深さ10cmをはかる。埋土は10YR6/2灰黄褐色シルト混じり細砂層で、遺物は出土しなかった。

922-00 (第184図, 図版84)

E24XCに位置する。平面プランは径143×440cmの不整形を呈し、深さ13cmをはかる。底面は凹凸が著しい。埋土は10YR5/2灰黄褐色礫混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

924-00 (第184図, 図版84)

E24XDに位置する。径120×155cm, 深さ3cmをはかる。埋土は10YR5/3にぶい黄褐色シルト層で、遺物は出土しなかった。

932-00 (第184図, 図版84)

E24YDに位置する。径100×152cm, 深さ19cmをはかる。主軸は北東。この土坑は933-00Sを切っている。埋土は10YR6/3灰黄褐色礫混じりシルト層で、遺物は出土しなかつ

た。

941-00 (第184図, 図版84)

I 04 A B に位置する。径 57×103 cm, 深さ20cmをはかる。土坑の主軸は北西。埋土は10 Y R 4/3にぶい黄褐色砂礫混じりシルト層で, 遺物は出土しなかった。

942-00 (第184図, 図版84)

I 04 A C に位置する。径 50×400 cm, 深さ23cmをはかる。主軸は北西。埋土は10 Y R 3/2 礫混じりシルト層で, 遺物は出土しなかった。

944-00 (第182・184図, 図版84)

I 04 A C に位置する。径 2.6×6.4 m, 深さ36cmをはかる。主軸は東西。底面は凹凸が著しい。埋土は上下二層に大別できた。(1)層は10 Y R 6/8明黄褐色粘土質シルト, (2)層は10 Y R 4/2灰黄褐色砂礫混じりシルトで, 遺物は出土しなかった。

948-00 (第184図, 図版84)

I 04 A E に位置する。径 43×198 cm, 深さ9cmをはかる。主軸は東西。埋土は10 Y R 4/2 灰黄褐色粘土質シルト層で, 遺物は出土していない。

952-00 (第182・184図, 図版84)

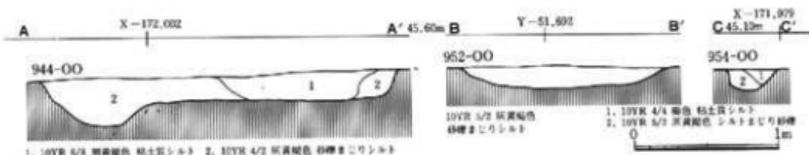
I 04 B C に位置する。径 154×254 cm, 深さ18cmをはかる。主軸は南北。底面は凹凸が著しい。埋土は10 Y R 5/2灰黄褐色砂礫混じりシルト層で, 遺物は出土しなかった。

954-00 (第182・184図, 図版84)

E 23 T X に位置する。径 36×76 cmの楕円形を呈する土坑である。検出面からの深さは12cmをはかる。主軸は北東。埋土は二層で, (1)層は10 Y R 4/4褐色粘土質シルト, (2)層は10 Y R 5/2灰黄褐色シルト混じり砂礫。遺物は出土しなかった。

962-00 (第184図, 図版84)

I 04 B C に位置する。径 74×133 cm, 深さ18cmをはかる。主軸は北西。埋土は10 Y R 5/2 灰黄褐色砂礫混じりシルト層で, 遺物は出土しなかった。



第182図 944-00, 952-00, 954-00 断面図 (1/40)

967-O O (付図7, 図版84)

E24UBに位置する。径96×142cm, 深さ4cmをはかる。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト層で、遺物は出土しなかった。

溝

933-O S (第183・184図, 図版84)

I04ADに位置する。幅47cm, 深さ8cmをはかり, 長さ13.8mを検出した。北北西方向



にのびる。この溝は、932・958・959-O Sに切られており, 953-O Sを切っている。埋土は10YR5/2灰黄褐色砂礫層で、遺物は出土しなかった。

第183図 933-O S, 958-O S 断面図(1/40)

953-O S (付図7, 図版84)

I04BDに位置する。幅108cm, 深さ3cmをはかり, 長さ4.6mを検出した。北西方向に伸びる。埋土は10YR5/2灰黄褐色砂礫混じりシルト層である。この溝は、933-O Sに切られている。須恵器甕体部の小片が出土した。

958-O S (第183・184図, 図版84)

I04CCに位置する。幅20cm, 深さ4cmをはかり, 長さ16.5mを検出した。西方向に伸びる。埋土は10YR6/2灰黄褐色細砂混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

959-O S (付図7, 図版84)

I04CCに位置する。幅20cm, 深さ4cmをはかり, 長さ1.1mを検出した。西方向に伸びる。この溝は、933-O Sを切っており, 現代の暗渠に切られている。遺物は出土しなかった。

960-O S (第184図・図版84)

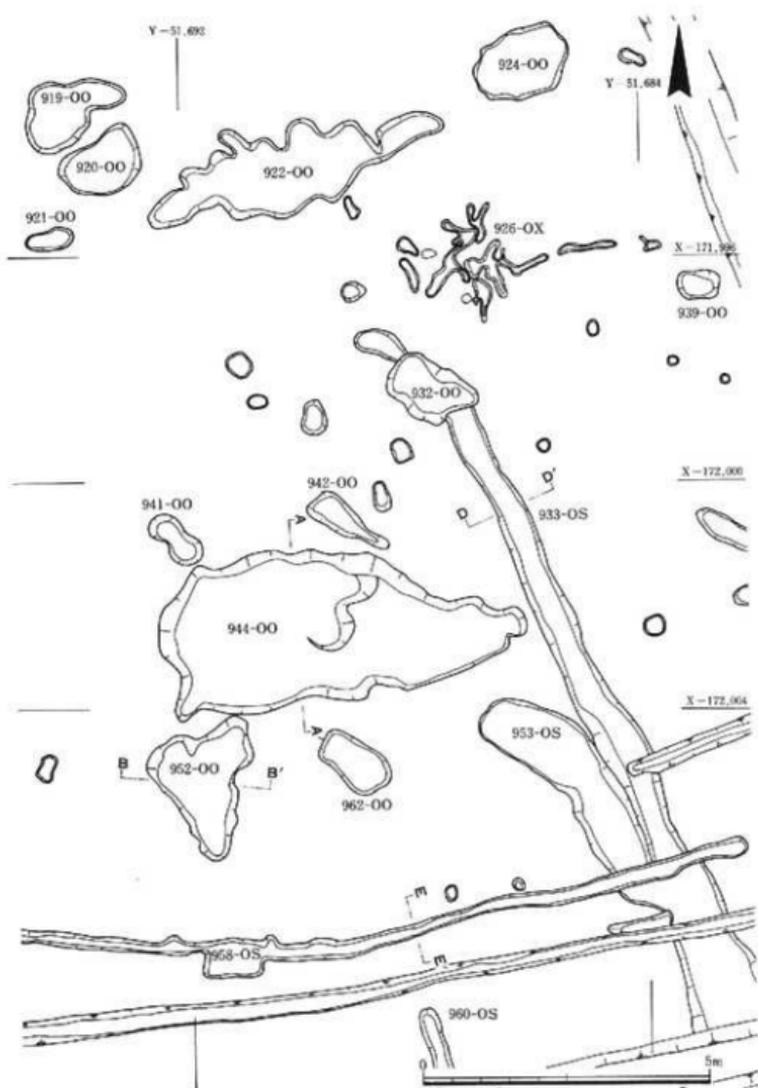
I04CDに位置する。31×150cm以上, 深さ18cmをはかる。北北西方向に伸びる。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト混じり砂礫層で、遺物は出土しなかった。

966-O S (付図7, 図版84)

E24UYに位置する。幅24cm, 深さ5cmをはかり, 長さ1.4mを検出した。北西方向に伸びる。埋土は10YR5/2灰黄褐色シルト層で、遺物は出土しなかった。

972-O S (付図7, 図版84)

E24XAに位置する。幅90cm, 深さ12cmをはかり, 長さ8.4mを検出した。西南西方向に伸びる。埋土は10YR6/1褐色砂礫混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。



第184図 944-00, 952-00, 933-OS, 958-OS 平面図 (1/100)

973-O S (付図7, 図版84)

E 23 X Y に位置する。幅90cm, 深さ15cmをはかる。長さ4.4mを検出した。西南西方向に伸びる。埋土は10 Y R 5/2 灰黄褐色シルト層で、遺物は出土しなかった。

第4項 包含層の遺物

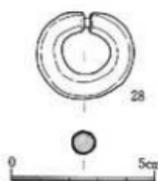
第185・186図に示した遺物は、いずれもⅢ層から出土した。

瓦器椀 (29-31) いずれも底部を欠失する。(29) は復原口径13.2cmで、内面を磨く。器高は比較的高い。(30・31) は復原口径13-14cm, 復原器高2.6cmで、内面は磨かない。(29) に比べて、(30・31) は器高が低い。

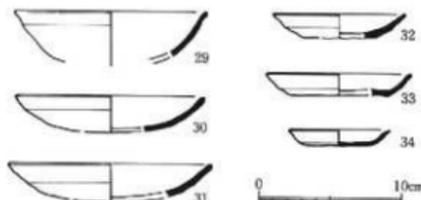
瓦器皿 (32・33) 復原口径9.2-10.0cm, 器高1.6-1.7cmで、平底である。

土師質土器皿 (34) 復原口径7.0cm, 器高1.1cmで、平底である。

耳環 (28) 表面の腐食が著しく、鍍金の痕跡をとどめないが、金銅製品であろう。大きさは3.5×3.1cm, 径は8mmをはかる。重量は31.58gであった。



第185図 Ⅲ層 出土耳環 (1/2)



第186図 Ⅲ層 出土土器 (1/4)

第4節 VI区の調査

第1項 調査の概要

VI区は上フジ遺跡の南端にあたり、幅（東西）20m、延長（南北）110mの調査区である。調査前までは水田、畑として利用されていた。

層序は、基本的に他の調査区と同じで、I層は近現代の耕土・床土、II層は近世の耕土・床土、III層は中世の耕土・床土で、各層は数層に細分される（第187図）。

調査の結果、検出した主な遺構は、畦畔、溝、土坑、樹根痕等である。遺構出土遺物は小さな破片が多く、年代を明らかにできた遺構は少ない。古墳時代及び中世の平面形の不整形な溝は、中世の開発（耕地化）以前の自然地形と推測できる。

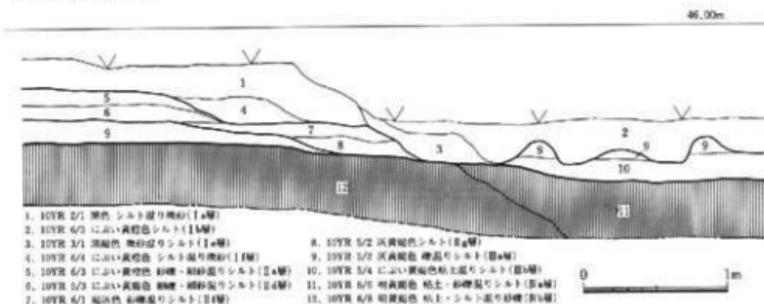
また、一定の幅をもって直線的にのびる溝は、人工的な溝と考えられる。遺構の重複関係からは古墳時代の自然地形が、中世のある時期に耕地化された後、再び荒地と化し、最終的に現地形に合った地割が形成されたと考えられる。

第2項 古墳時代の遺構と遺物

土 坑

2035-00（付図8）

I09J Nに位置する。土坑の規模は135×240cm、深さ7cmをはかる。平面形は南北に長い不整形な土坑。埋土は10YR5/8黄褐色シルト混じり細砂層である。須恵器有蓋高坏の破片が出土した。



第187図 VI区東壁 土層図 (1/40)

2086-O O (付図8)

I 04 V I に位置する。土坑の規模は108×138cm、深さ15cmをはかる。平面は南北に長い楕円形を呈する。埋土は10Y R 5/2 灰黄褐色細砂・礫混じりシルト層。埋土からは須恵器の小片が出土した。

溝

2049-O S (付図8)

I 09 A J に位置する。幅120cm、深さ18cmをはかる。長さ37mを検出した。北西方向に伸びる。溝の底は、I 09 C N以南で凹凸が著しく、以北は比較的平らであった。

埋土は4層に分けられる。(1)層は10Y R 5/2 灰黄褐色細砂・礫混じりシルトで、細礫を多く含む、(2)層は10Y R 5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂、(3)層は10Y R 5/1 褐灰色シルト混じり砂礫で、細礫を多く含む、(4)層は10Y R 5/2 灰黄褐色粘土・細砂混じりシルトである。

埋土の上層は粘性が強く、下層は砂礫を多く含む。埋土からは須恵器、土師器の小片が出土した。

2085-O S (付図8)

I 04 X K に位置する。幅35cm、深さ9cmをはかり、長さ3.15mを検出した。溝の底は平らで、北西方向に伸びる。埋土は2.5 Y 5/4 黄褐色シルト混じり砂礫層で、細礫・細砂を多く含む。埋土からは須恵器の小片が出土した。

第3項 鎌倉～室町時代の遺構と遺物

調査によって、畦畔、土坑、溝、ピット、樹根痕等を検出した。また、地割にかかわる溝も検出した。

土 坑

2017-O O (付図8)

I 09 J Q に位置する。土坑南辺に枝状の溝が付く不整形平面の土坑。土坑の規模は径230×130cm、深さ5cmをはかる。埋土は10Y R 4/6 褐色砂礫混じりシルト層。埋土からは黒色土器の小片が出土した。

2055-O O (付図8)

I 09 D N に位置する。平面プランは径50×100cmの楕円形を呈し、深さ4cmをはかる。主軸は南北。埋土は2.5 Y 5/4 黄褐色粘土混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

2056-O O (付図8)

I 04 D Nに位置する。径90×213cmの南北に細長い不整形円径を呈する土坑である。深さ6cmをはかる。埋土は2.5Y5/6黄褐色砂礫混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

2057-O O (付図8)

I 09 D Mに位置する。平面は径75×170cmの楕円形を呈し、深さ4cmをはかる。埋土は2.5Y5/6黄褐色砂礫混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

2081-O O (付図8)

I 04 X Mに位置する。規模は径67×150cm、深さ11cmをはかる。南北に細長い不整形な土坑である。埋土は10Y R5/8黄褐色シルト混じり砂礫層で、遺物は出土しなかった。

溝**2002-O S** (付図8)

I 09 T Uに位置する。幅150cm、深さ6cmをはかる。長さ1.9mを検出した。二俣池北遺跡I区の1005-O Sと同一の溝。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色細礫・細砂混じりシルト層で、細砂を多く含む。埋土からは瓦器、須恵器の小片が出土した。

2003-O S (付図8)

I 09 S Uに位置する。幅20cm、深さ5cmをはかる。長さ2mにわたって検出した。2002-O S北端から北東方向へ伸びる。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色細礫・細砂混じりシルト層で、細砂を多く含む。溝の底は、凹凸がある。遺物は出土しなかった。

2006-O S (付図8)

I 09 O Rに位置する。主軸は北西方向に伸びる。溝の南北両端が二股に分かれていた。東の溝は10.4mほど北流して、西の溝に合流する。溝底は、南が北よりも高い。東側の溝幅20cm、深さ6cmをはかる。西側の溝幅66cm、深さ5cmをはかり、長さ21.3m検出してゐる。埋土は東側が2.5Y4/6オリーブ褐色砂礫混じりシルト層で、細礫を多く含む。西側が2.5Y4/6オリーブ褐色細砂混じりシルト層。埋土からは須恵器の小片が出土した。

2007-O S (付図8)

I 09 P Rに位置する。幅70cm、深さ4cmをはかり、長さは16mを検出した。埋土は10Y R4/6褐色砂礫混じりシルト層。遺物は出土しなかった。

2008-O S (付図8)

I 09 Q Rに位置する。幅30cm、深さ5cmをはかり、長さ1.35mを検出した。埋土は10Y R4/6褐色粘土砂礫混じりシルト層で、細礫を多く含む。遺物は出土しなかった。

2009-O S (付図8)

I 09 P Qに位置する。幅38cm、深さ4cmをはかり、長さ12.4mを検出した。埋土は2.5 Y4/6オリブ褐色細砂・礫混じりシルト層で、細礫と細砂を多く含む。遺物は出土しなかった。

2010-O S (付図8)

I 09 M Pに位置する。幅12cm、深さ3cmをはかり、長さ5mを検出した。北西方向にのびる。埋土は2.5 Y5/3黄褐色シルト礫混じり細砂層。埋土からは瓦器の小片が出土した。

2011-O S (付図8)

I 09 M Pに位置する。幅36cm、深さ5cmをはかり、長さ3.2mを検出した。北西方向に伸びる。埋土は2.5 Y5/3黄褐色砂礫混じりシルト層で、細礫と細砂を多く含む。遺物は出土しなかった。

2012-O S (付図8)

I 09 L Oに位置する。幅20cm、深さ2cmをはかり、長さ5mを検出した。北西方向に伸びる。埋土は2.5 Y5/3黄褐色シルト礫混じり細砂層で、遺物は出土しなかった。

2013-O S (付図8)

I 09 P Pに位置する。幅34cm、深さ8cmをはかり、長さ4.5mを検出した。西北西方向に伸びる。埋土は2.5 Y5/3黄褐色シルト混じり砂礫層で、細礫を多く含む。遺物は出土しなかった。

2015-O S (付図8)

I 09 M Sに位置する。幅28cm、深さ5cmをはかり、長さ5.75mを検出した。北方向に伸びる。溝の断面形は浅いU字形を呈する。埋土は2.5 Y5/3黄褐色シルト混じり砂礫層で、細礫を多く含む。遺物は出土しなかった。

2016-O S (付図8)

I 09 K Pに位置する。幅18cm、深さ1cmをはかり、長さ5.1mを検出した。西南西方向に伸びる。埋土は2.5 Y5/2灰黄色砂礫混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

2019-O S (付図8)

I 09 J Qに位置する。幅19cm、深さ2cmをはかり、長さ75cmを検出した。西方向に伸びる。埋土は10 Y R 4/6褐色砂礫混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

2036-O S (付図8)

I 09 C Lに位置する。幅65~230cm、深さ10cmをはかり、長さ54.5mにわたって検出した。

北方向に伸びる。平面形が部分的に枝状を呈する。溝の底は、I09EL以南では凹凸が著しく、以北では平らである。埋土は4つに分けられる。(1)層は10YR5/8黄褐色砂礫混じりシルト、(2)層は10YR4/1褐灰色シルト混じり細砂、(3)層は2.5Y5/4黄褐色細砂・粘土・礫混じりシルトで、細礫を多く含む、(4)層は2.5Y5/1黄灰色礫混じり細砂で、細礫を多く含む。埋土上層は粘性が強く、下層は砂礫を多く含む。埋土からは瓦器皿の小片が出土した。

2038-O S (付図8)

I09INに位置する。幅36cm、深さ3cmをはかり、長さ1.72mを検出した。北方向に伸びる。溝の平面形は不整形。溝の断面形は浅いU字形を呈する。埋土は10YR5/8黄褐色シルト混じり細砂層。遺物は出土しなかった。

2039-O S (付図8)

I09HMに位置する。幅40cm、深さ4cmをはかり、長さ1.95mを検出した。北方向に伸びる。溝の断面形は浅いU字形を呈する。溝の平面形は不整形。埋土は10YR5/8黄褐色シルト混じり細砂層で、埋土からは須恵器坏身が出土した。

2040-O S (付図8)

I09FMに位置する。幅80cm、深さ10cmをはかり、長さ6.5mを検出した。北方向に伸びる。溝の底は凹凸が著しい。溝の平面形は、凹凸があり不整形。

埋土は2.5Y5/4黄褐色細砂・礫混じりシルト層。この溝は、2041-O Sを切っている。遺物は出土しなかった。

2041-O S (付図8)

I09FNに位置する。幅60cm、深さ6cmをはかり、長さ16.5mを検出した。北東方向に伸びる。溝の幅は一定で、直線的な溝である。埋土は2.5Y7/3浅黄色粘土質シルト層。この溝は、2036-O Sと2040-O Sとに切られている。遺物は出土しなかった。

2050-O S (付図8)

I09EMに位置する。幅40cm、深さ10cmをはかり、長さ11.5mを検出している。西南方向に伸びる。この溝は、2036-O Sと2049-O Sに切られている。埋土は10YR5/8黄褐色細砂・粘土混じりシルト層で、遺物は出土しなかった。

2051-O S (付図8)

I09ELに位置する。幅12cm、深さ4cmをはかり、長さ2.6mを検出した。北北西方向に伸びる。遺物は出土しなかった。

2052-O S (付図8)

I 09 E Mに位置する。幅22cm、深さ6cmをはかり、長さ1.76mを検出した。主軸は2050-O Sに平行し、西南方向に伸びる。埋土は2.5 Y 5/2暗灰黄色細砂混じりシルト層。埋土からは須恵器の小片が出土した。

2065-O S (付図8)

I 09 C Kに位置する。幅21cm、深さ7cmをはかり、長さ1.3mを検出した。北方向に伸びる。埋土は10 Y R 5/4に黄褐色シルト混じり砂礫層で、細礫を多く含む。遺物は出土しなかった。

2072-O S (付図8)

I 04 X Jに位置する。幅55cm、深さ11cmをはかり、長さ22.4mを検出した。北西方向に伸びる。溝の底は平らであり、溝の幅は一定であった。埋土は2層に分けられる。(1)層は2.5 Y 4/6オリーブシルト混じり砂礫、(2)層は2.5 Y 5/3黄褐色粘土・砂礫混じりシルト。埋土の上層は砂を多く含む、埋土下層は粘性が強い。(1)層と(2)層との間に、10 Y R 3/3暗褐色シルトが薄く堆積していた。I 09 A Kで2073-O Sに重なっていた。2072-O Sは2049-O Sとほぼ同じ方向に流れていた。埋土からは須恵器、土師器の小片が出土した。

2073-O S (付図8)

I 09 A Kに位置する。幅25cm、深さ8cmをはかり、長さ4.8mを検出した。北北西方向に伸びる。北端部と南端部は、2020-O Sに切られている。埋土は2.5 Y 5/4黄褐色シルト混じり砂礫層。遺物は出土しなかった。

2080-O S (付図8)

I 04 X Mに位置する。幅33cm、深さ12cmをはかり、長さ2mを検出した。西方向に伸びる。溝の断面はU字形を呈する。埋土は2.5 Y 5/4黄褐色泥混じりシルト層。遺物は出土しなかった。

2091-O S (付図8)

I 04 V Hに位置する。幅35cm、深さ6cmをはかり、長さ1.5mを検出した。北方向に伸びる。埋土は2.5 Y 5/1黄灰色粘土・礫混じり砂質シルト層。遺物は出土しなかった。

2092-O S (付図8)

I 04 W Gに位置する。幅24cm、深さ3cmをはかり、長さ1mを検出した。北方向に伸びる。埋土は2.5 Y 5/1黄灰色粘土・礫混じり砂質シルト層。遺物は出土しなかった。

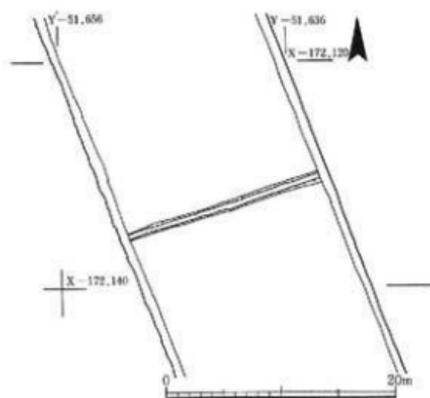
畦 畔

2001-OX (第188図)

I 09 I Oに位置する。基底部での幅85cm、高さ12cmをはかる。長さ19.5mを検出した。

畦畔の主軸は、西北西。畦畔は、2.5 Y6/2灰黄色粘土・礫混じり砂質シルトからなる。2001-OXを境にして、Ⅲ層上面は、南が北よりも10cm高く、段を形成していた。

埋土からは瓦器、須恵器の小片等が出土した。



第188図 2001-OX 平面図 (1/500)

第4項 包含層の遺物

第189図に示した遺物のうち、(37-40、56-58)がⅡ層から出土し、他の遺物はⅢ層から出土した。

須恵器環蓋 (35・38・40・41) (35)は復原口径11.2cm、復原器高4.5cmをはかる。口縁部と天井部との境には低い稜が残り、口縁部内側は段がつく。(38)は復原口径12.8cm、復原器高3.5cmをはかる。口縁部と天井部との境は明瞭でない。口縁部内側にも段がつかない。(35・38)のロクロ回転は、ともに逆時計まわりである。

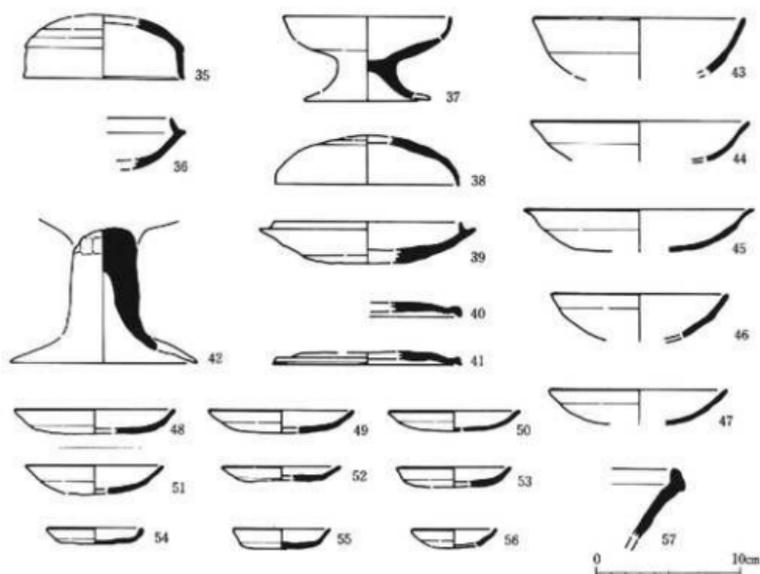
(40・41)は天井部に宝珠つまみがつき、口縁部が屈曲する。(41)の復原口径は13.2cm、残存高は0.9cmをはかる。

須恵器環身 (36・39) (36)は残存高3.6cmの破片。(39)は復原口径13.0cm、復原器高2.9cmで、ロクロ回転は時計逆まわりであった。(39)は(36)に比べて、口縁部の立ちあがりが高い。

須恵器高坏 (37) 短脚の高坏で、復原口径11.6cm、復原器高6.0cm、脚部に透かしは認められない。

土師器高坏 (42) 脚部の破片である。

瓦器椀 (43-47) いずれも底部を欠失するため、形態の詳細は不明である。(43)は比較的器高が高い。(44・45・47)は器高が低く、底部は平らである。(46)は口径が小さく、



第189図 II・III層出土土器 (1/4)

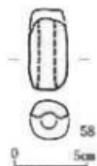
底部は丸味をもつと推測できる。

瓦器皿 (48~52) 復原口径8.4~11.2cm, 復原器高1.0~2.0cm。底部は (52) が丸底で、その他は丸味をもった平底である。

土師質土器皿 (53~56) 復原口径6.0~8.0cm, 復原器高1.2~1.4cm。底部はいずれも丸味をもった平底である。

須恵質土器鉢 (57) 口縁部の破片で、口縁端部は上方に「く」字状に屈曲する。

上錘 (58) 幅2.7cm, 残存長5.1cmの円筒形の土錘で、孔径は1.1cmをはかる。端部は丸味をもつ。



第190図 III層出土土錘 (1/4)

第5節 小 結

本項では上フジ遺跡Ⅳ～Ⅵ区の遺構と遺物について述べる。調査区名称は調査開始順に付けられたが、以下の記述は北からⅤ・Ⅳ・Ⅵ区の順で行う。

第1項 遺 構

Ⅴ区では、遺物を出土する遺構が少なく、また平面形が不整形な遺構が多かったため、調査地の変遷を復原することは難しかった。一定幅で直線的な溝のうち、972・973-OSは現在の畦畔直下で検出した。958-OSと933-OSとは直交する溝で、重複関係から、958-OSが933-OSよりも新しい。ともに現在の地割方向に合う。包含層からは、石鎌や須恵器、耳環等が出土しており、各遺物に対応する遺構が調査区付近に存在したことが推測できた。

Ⅳ区では、谷状遺構854-OS下層から古墳時代後期、上層から古墳時代後期から奈良時代の土器が出土した。中世の溝850-OSは現在の地割から西へふる溝である。遺構の検出状態から、Ⅳ区は中世以降耕地となったと考えられる。

Ⅵ区でも検出した遺構は不整形な形態のものが多く、出土遺物も少なかった。そのため調査地の歴史の変遷は、明確でない。一定幅の直線的な溝2041-OSの主軸は現在の地割と異なり、ほぼ真北であった。この溝より新しい2040-OSと2036-OSは不整形な溝である。2041-OSから遺物は出土しなかったが、2041-OSと直交方向の直線的な溝2006・2008～2012-OSのうち、2006-OSから須恵器の小片、2010-OSから瓦器の小片が出土した。一方、不整形な溝2036-OSからは瓦器皿の小片が出土した。また現在の地割と方向の一致する溝2002・2003・2013・2015・2016-OSなどがあつた。

2002-OSは13世紀代の遺構であることから、11～13世紀の間に、真北方向の地割が形成され（2041・2006・2008～2012-OS）、荒地となった（2036-OS）後、現地の地割が形成（2002・2003・2013・2015・2016-OS）されたと推測できた。

第2項 包含層の遺物

上フジ遺跡Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区および二俣池北遺跡1区では、居住域や墓域を示す遺構は検出できなかった。むしろ樹根痕や谷状遺構、耕作に関わる溝や、不整形な遺構が検出できた。

そのため遺構からは、上記調査区は、荒地および生産空間であったと考えられる。検出遺構以外にも、旧耕土（Ⅱ・Ⅲ層）の堆積状況にも共通性が認められた。

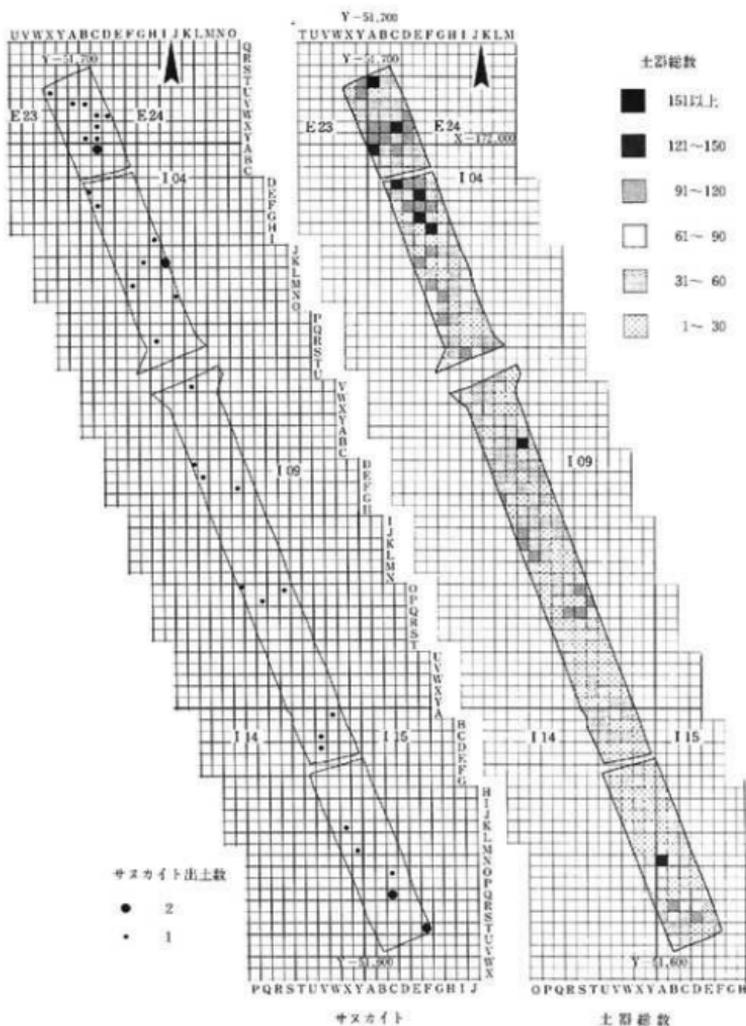
そこで上記調査区の遺物包含層出土遺物の分析を通じて、検出できなかった過去を復原することを試みた。第191図は各調査区のⅡ層とⅢ層とで各々の遺物が出土した破片数を示したものである。

この表は各遺物のⅡ層とⅢ層における出土数の対比を主な目的として作成した。上フジ遺跡Ⅵ区以外ではⅡ層出土遺物の数がⅢ層出土遺物の数よりも圧倒的に少ない傾向が認められた。

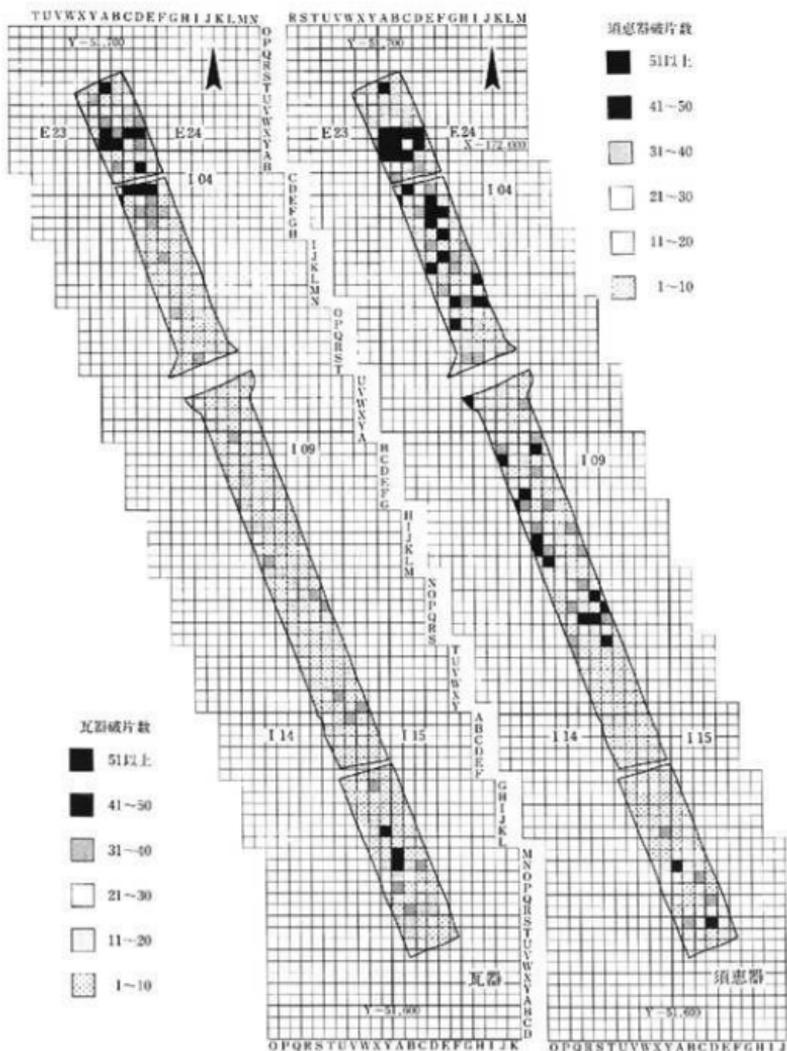
第193図は須恵器、瓦器の分布図である。4m方眼ごとの遺物出土量を数量化したものである。各遺物の分布密度の傾向を知ることを目的として作成した。第194図は須恵器坯の各型式ごとの分布図で、MT15～TK10、MT21、TK7の各型式がⅠ04に密に分布し、TK43～TK209型式はⅠ04以外にⅠ09R付近にも遍在し、TK217型式は調査区に普遍的に分布する傾向が認められた。言い換えれば、当該調査区では少なくとも6世紀前半から7世紀末頃までの土器がⅠ04を中心にⅠ09まで分布する。7世紀前半から後半の時期の土器は、調査区全域から普遍的に出土するが、7世紀末葉以降の土器は再びⅠ04を中心にⅠ09以北に分布することが明らかになった。土器の分布範囲が、どのような空間に相当するのかは本稿では明らかにできなかった。

	上フジⅤ区 1000 2000	上フジⅥ区 1000 2000 3000 4000	上フジⅦ区 1000 2000 3000	二俣池Ⅰ区 1000 2000
行 器	0 11 11	2 20 21	2 2 5	3 6 11
須恵器	174 190 130	178 2045 4124	1316 1072 206	259 1092 1360
土師器	109 514 623	122 2274 7309	561 903 1405	248 803 1114
黒 色 土 器	3 4 7	1 68 69	11 21 21	1 14 22
瓦 器	184 1013 1197	65 2238 2325	204 1191 1105	190 1420 1631
陶 器	0 0 0	2 4 8	1 2 2	0 0 6
陶 胎	0 0 0	2 0 2	3 4 8	0 14 2
磁 器	3 2 11	7 8 8	4 9 10	7 10 16
幼 土	8 4 8	8 2 2	2 2 2	5 2 5
瓦	11 2 20	1 11 18	18 15 23	14 12 26

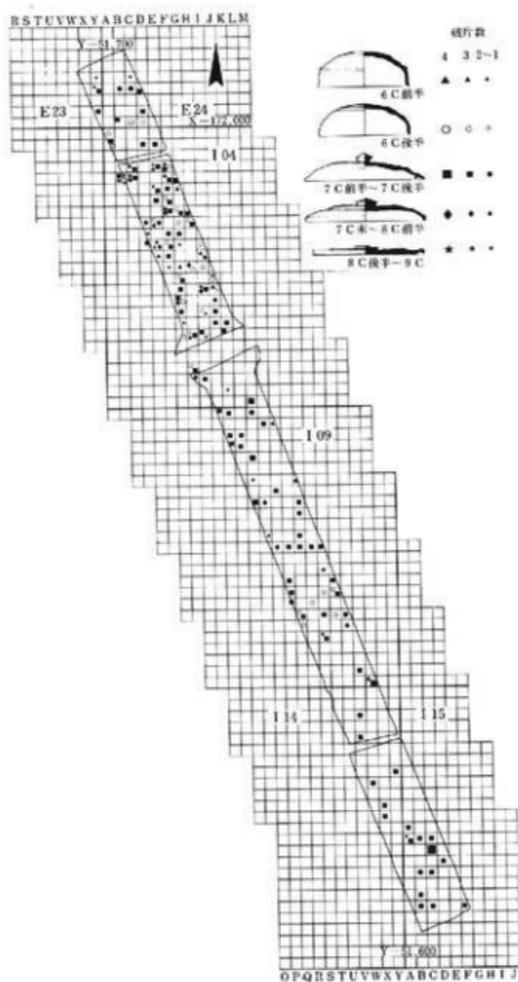
第191図 上フジ遺跡Ⅴ・Ⅵ区、二俣池遺跡Ⅰ区 出土遺物数量表(上段Ⅱ層,中段Ⅲ層,下段Ⅳ層とⅤ層の総数)



第192図 上フジ遺跡V・M・VI区、二俣池北遺跡1区 サスカイト・土器 総数分布図



第193図 上フジ遺跡V・M区、二俣池北遺跡1区 瓦器・須恵器 数量分布図



第194図 上フジ遺跡V・N・VI区、二俣池北遺跡I区 須恵器坏蓋 型式別分布図

以上の図、表によって、少なくとも弥生時代から中世までの遺構が、中世の断続的な開発によって削平されたことが明らかになった。そして、耕作の過程で各時期の遺物を包含する、遺物包含層が形成され、現耕上層に至ったと推測できた。

第V章 自然科学的分析

第1節 花粉・珪藻・火山灰分析

第1項 調査内容と位置

発掘調査に伴って露出した、二俣池北遺跡ならびに上フジ遺跡の土層断面より採取された試料について、花粉分析・珪藻分析・火山灰分析を行い、地質層序並びに植生や水域の古環境の推定を行ったものである。

分析を行った地点は、以下の7地点である（第207～208図）。

- | | | | |
|----------------|-------|-------------|------------|
| 1. 上フジ遺跡Ⅳ区③地点 | 5 試料 | 北壁 | |
| 2. 上フジ遺跡Ⅳ区④地点 | 5 試料 | 東壁 | 最終遺構面の断ち割り |
| 3. 上フジ遺跡Ⅵ区西壁 | 11 試料 | 西壁 | |
| 4. 二俣池北遺跡1区A地点 | 8 試料 | 西壁 | |
| 5. 二俣池北遺跡1区B地点 | 2 試料 | 西壁 | 最終遺構面の断ち割り |
| 6. 二俣池北遺跡3区A地点 | 17 試料 | 西壁 | |
| 7. 二俣池北遺跡3区B地点 | 14 試料 | Yライン東西セクション | |
| 8. 二俣池北遺跡3区C地点 | 5 試料 | 東壁 | |

第2項 調査の方法

花粉分析は約50gの試料を、分散・篩別→コロイド除去→濃縮→HF処理→重液分離→脱水処理→濃縮→標本作成して、顕微鏡（600倍）で計数した。

珪藻分析は約10gの試料を、乾燥粉碎→ H_2O_2 処理→分散処理→酸処理→コロイド除去→濃縮→標本作成して、顕微鏡（600倍）で計数した。

火山灰分析は、約50gの試料を重量測定→乾燥→含水比測定→篩別（62.5～250 μ ）→火山ガラスの粒数を計数→火山ガラスの重量算出する、というかたちで行った。また、火山ガラスの粒数比が約1%以上の試料は、全鉱物組成（粒数%）分析、火山ガラスの屈折率測定ならびに重鉱物組成（粒数%）分析を行った。

第3項 分析結果

(1) 花粉化石

検出花粉化石種類

検出された花粉化石の種類は合計67種類であって、卓越する花粉種類は樹木花粉としてニヨウマツ亜属、コナラ亜属、ツガ属、コウヤマキ属、アカガシ属、草本花粉としてイネ科、ヨモギ属、栽培種花粉としてイネ科 (>40)、ソバ属、アブラナ科(?) が挙げられる。このうちイネ科 (>40) は、イネ科のうち、花粉粒径が 40μ 以上のものであり、イネ属 (*Oryza*) を含んでいるが、イネ科のほかの属 (野生種) も含まれる。

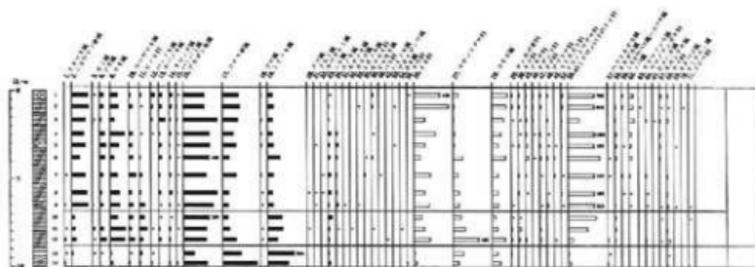
花粉化石組成の変遷と分帯 (第195~201図)

合計7地点のうち、花粉組成の変遷が連続的に検出できるのは二俣池北遺跡3区西壁A地点とB地点である。これら2地点を中心に花粉組成の特徴と分帯を記述する。

二俣池北遺跡3区西壁A地点は、下位より、アカガシ亜属とシイ属が卓越し、イネ科、イネ科 (>40) が出現しない (試料17: P2帯) → アカガシ亜属とコナラ亜属が卓越し、イネ科、ヨモギ属、イネ科 (>40)、ソバ属を伴う (試料5~16: P1帯b亜帯) → ニヨウマツ亜属、コナラ亜属、アブラナ科が増加し、アカガシ亜属、ヨモギ属は減少 (試料3~4: P1帯c亜帯) → ニヨウマツ亜属が卓越し、スギ属、アブラナ科、イネ科 (>40) を伴い、シイ属やアカガシ亜属はほとんど出現しなくなる (試料1~2: P1帯d亜帯) の変遷が認められる (第195図)。

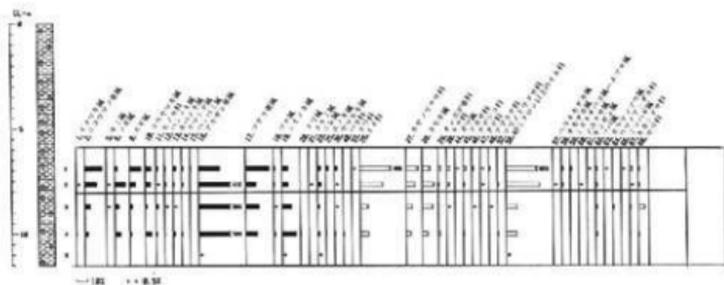


第195図 二俣池北遺跡3区西壁 (A地点) の花粉ダイヤグラム



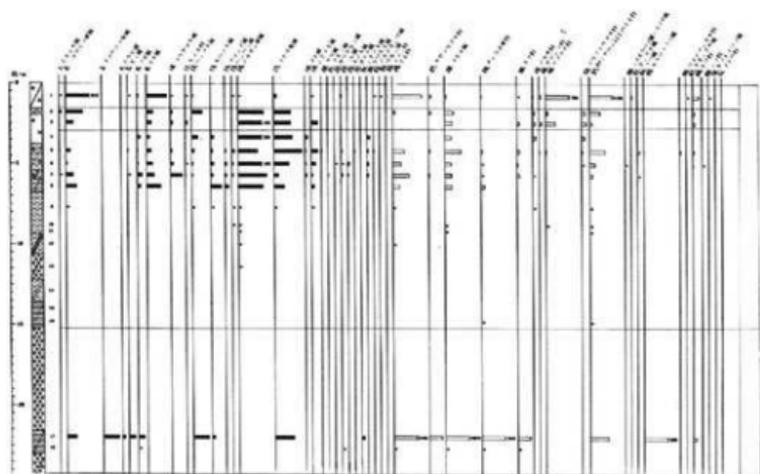
第196図 二俣池北遺跡3区北壁(B地点)の花粉ダイヤグラム

二俣池北遺跡3区B地点は、最下位にシイ属が卓越し、イネ科をはじめ草本種類はごく低率となる層準(試料13~14:P2帯)があり、その上位は、A地点には認められなかったニヨウマツ亜属が低率で、イネ科(>40)の急激な増加が認められる(試料10~12:P1帯a亜帯)。最上位にはアカガシ亜属とイネ科(>40)が卓越し、コナラ亜属、シイ属、イネ科、ヨモギ属を伴い(試料1~9)、これはA地点のP1帯b亜帯に対応する。そのほか、二俣池北遺跡3区C地点では、B地点におけるP1帯内のa亜帯からb亜帯に対応する変遷が認められる。

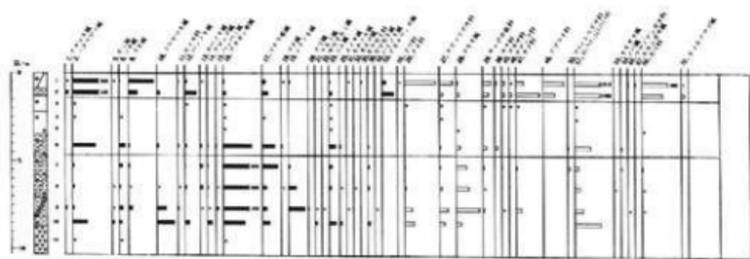


第197図 二俣池北遺跡3区東壁(C地点)の花粉ダイヤグラム

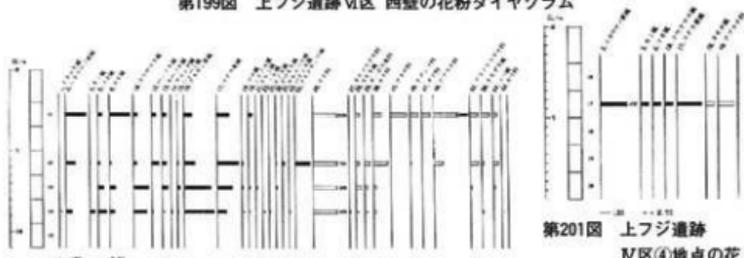
二俣池北遺跡1区西壁の最下位の礫層中に挟む炭質粘土層は、ニヨウマツ亜属、ハノキ属、コナラ亜属が卓越し、トウヒ属、モミ属、ツガ属などの樹木種類と、イネ科、ヨモギ属、タンポポ属とともにカラマツソウ属が高率で出現し、アカガシ亜属など暖温帯要素はもちろん、スギ属、コウヤマキ属、ブナ属などの冷温帯要素がまったく出現しない(P3帯)。その上位にはP1帯b亜帯(A~C地点のようにイネ科(>40)は高率を示さない)、P1帯c亜帯、P1帯d亜帯に対応する変遷が認められる。



第198図 二俣池北遺跡1区 西壁の花粉ダイヤグラム



第199図 上フジ遺跡VI区 西壁の花粉ダイヤグラム



第200図 上フジ遺跡IV区③地点の花粉ダイヤグラム

第201図 上フジ遺跡
IV区④地点の花
粉ダイヤグラム

上フジ遺跡Ⅵ区西壁では、P1帯b帯、P1帯c亜帯、P1帯d亜帯（アカメガシワ属の出現が認められる）に対応する変遷が認められる。

同じ上フジ遺跡Ⅵ区③地点ではP1帯b亜帯、P1帯c亜帯、P1帯d亜帯に対応する変遷が認められる。

Ⅵ区④地点ではP1帯d亜帯に対応する特徴が認められる。

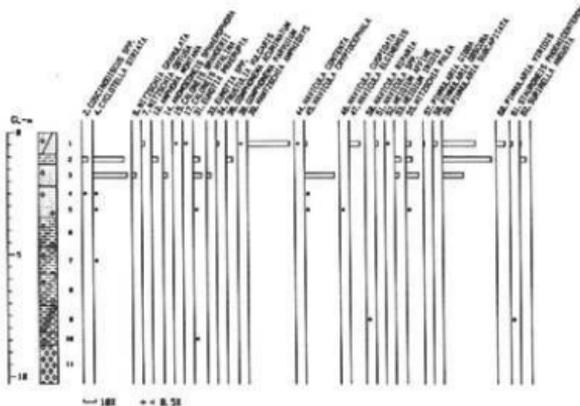
（2）珪藻化石

検出珪藻化石種類

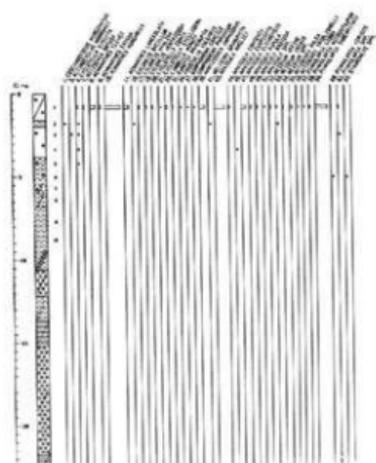
検出された珪藻化石の種類は合計62種類であって、卓越する珪藻種類は *Achnanthes hungarica*, *Cyclotella striata*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula anglica*, *Navicula elginensis*, *Eunotia valida*, *Pinnularia subcapitata* などであり、これらのほとんどは淡水域種であるが、*Cyclotella striata* を含め、*Coschinodiscus* 属、*Actinocyclus normanii*, *Achnanthes brevipes*, *Nitzschia obtusa* などの汽水～海水域種もわずかに出現する。

珪藻化石組成の特徴

上フジ遺跡Ⅵ区西壁の上位の3試料より得られた結果によると、*Cyclotella striata*, *Pinnularia subcapitata* が卓越し、このうち、*Cyclotella striata* は汽水域～海水域種である。流水域種もしくは不定性種が大半を占める。



第202図 上フジ遺跡Ⅵ区西壁の珪藻ダイヤグラム

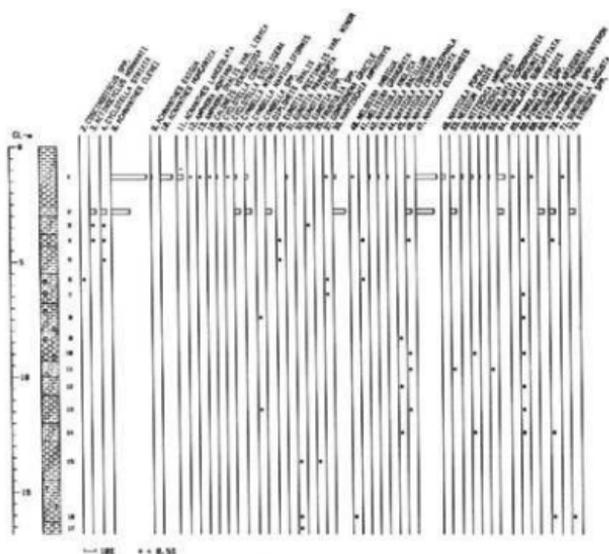


第202図 二俣池北遺跡1区 西壁の珪藻ダイヤグラム

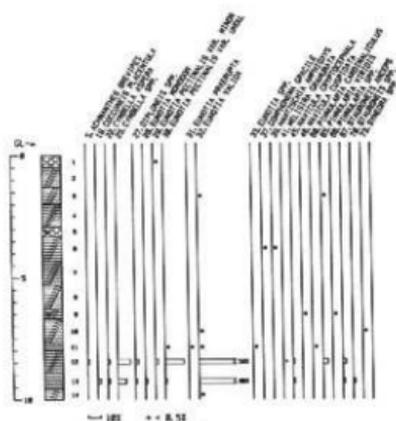
二俣池北遺跡1区西壁の試料1は *Achnanthes hungarica*, *Pinnularia subcapitata* が卓越し、流水域種ならびに不定種が大半を占める。

二俣池北遺跡3区西壁 (A地点) の試料1-2は *Achnanthes clevei*, *Navicula elginensis* が卓越し、組成は1区西壁と類似するが、止水性種がやや多い。

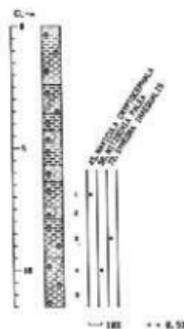
二俣池北遺跡3区北壁 (B地点) の試料12-13は *Eunotia valida* が卓越し、*Cymbella* 属などを伴う。酸性水域の種が多い。



第204図 二俣池北遺跡3区 西壁 (A地点) の珪藻ダイヤグラム



第205図 二俣池北遺跡3区 北壁(B地点)の珪藻ダイアグラム



第206図 二俣池北遺跡3区 東壁(C地点)の珪藻ダイアグラム

(3) 火山灰

火山灰分析は二俣池北遺跡の3区西壁(A地点)ならびに3区北壁(B地点)の合計18試料について行った。

二俣池北遺跡3区西壁(A地点)の試料8と12~13は1%以上のガラス粒数比, 0.18%以上の重量比を示す。試料6は0.19%の重量比を示す。これら4試料の全鉱物組成は、長石・石英が74~86%であり、岩片は10~20%、重鉱物は1~5%と低く火山性の本質物質は少ないと判断される。4試料のガラスの屈折率はいずれも1.495~1.501%の範囲にある。

二俣池北遺跡3区北壁(B地点)の試料9~12は1%以上のガラス粒数比を示し、特に試料11は0.35%の重量比を示す。これら4試料の全鉱物組成は、長石・石英が82~90%であり、岩片は5~10%、重鉱物は2~4%と低く火山性の本質物質は少ないと判断される。4試料のガラスの屈折率はいずれも1.494~1.500%の範囲にある。ただし、試料9は屈折率が1.507~1.509のものをわずかに交え、上記の範囲とは異なる。

(4) 年代測定結果

二俣池北遺跡の1区西壁の試料18に相当する植物質粘土層の¹⁴C年代測定を行った。その結果は以下の通りである。

>25,100 y.B.P. (I-15413)

ただし、含有炭素量が微量のためそれ以上の年代測定は不可能。

つまり、25,100 y. B.P.より古い年代であることは明らかとなったが、炭素量が少なかつたためにそれ以上詳しい測定は出来なかった。

第4項 考 察

(1) 花粉化石による地質層序区分

7地点の花粉分析の結果、花粉組成の大きな特徴に基づいてP1-P3帯の花粉帯に区分される。各帯の特徴は下記のように整理される。

①P1帯：本帯における花粉組成の推移は下位より上位に向かって、アカガシ亜属が卓越し、シイ属、コナラ亜属を伴うとともに、イネ科 (>40) が10%程度出現 (a 亜帯) → アカガシ亜属にコナラ亜属、シイ属、ニヨウマツ亜属を伴い、イネ科とイネ科 (>40) が高率を示し、ソバ属が連続出現 (b 亜帯) → ニヨウマツ亜属が増加傾向を、アカガシ亜属が減少傾向を示し、アブラナ科が高率 (c 亜帯) → ニヨウマツ亜属が卓越し、スキ属を伴う。イネ科 (>40) とアブラナ科が高率 (d 亜帯) の変遷をたどる。

②P2帯：シイ属、アカガシ亜属、コナラ亜属が高率で出現し、二次林要素、栽培要素はほとんど出現しない。本帯にみられる自然植生要素卓越から二次林要素中心への植生の大きな変化は、既往の研究資料によると、1,500 y. B.P.頃であると推定される。

③P3帯：ゴヨウマツ亜属、ハンノキ属、コナラ亜属が卓越し、トウヒ属が出現し、草本種類ではカラマツソウ属が高率出現する。本帯は針葉樹類を中心とする亜寒帯要素よりなることや25,100年前より古いという年代測定値からみても完新統ではなく、それ以前の更新世末期の最終氷期 (ウルム氷期) の寒冷期 (24,000~18,000年前) つまり、低位段丘時代に相当するものと考えられる。

(2) P1帯の各亜帯と土層区分との対応関係

二俣池北遺跡の3区西壁 (A地点) の試料7-14はⅢ b 1層-V層に対応し、試料16はⅤ b層に対応する。同じく3区北壁 (B地点) の試料2-9はⅢ b 1-V層に対応する。さらに3区東壁 (C地点) の試料1-2はⅢ b 3層-IV層に対応する。これらの各層準はすべてP1帯b亜帯に相当し、層序の上での矛盾はない。ただし、3区北壁 (B地点) の試料12はⅤ c層に相当するが、イネ科 (>40) が低率であることやシイ属の出現率がやや高いことからP1帯a亜帯に区分した。同じくⅤ b層とされている3区西壁 (A地点) の試料16は、イネ科 (>40) がかなり高率で出現する点から、上記のようにP1帯b亜帯とした。

(3) 栽培植物について

P1帯のb～d亜帯はイネ科 (>40) が高率で出現する点でイネの栽培が近辺で行われていたと推定される。各亜帯や地点によってイネ科 (>40) の出現率に変化が認められるが、これはイネの栽培の量比 (例えば密度や面積) を示すものが、単なる堆積状態によるものかは不明である。

ソバ属はP1帯b亜帯の中部から上部にかけて連続的に出現し、c亜帯やd亜帯ではほとんど出現しないので、b亜帯の時代にソバの栽培が最も盛んであったと推定される。P1帯c亜帯からd亜帯にかけてはアブラナ科が増加する。これは本遺跡だけでなく、すでに調査を行ったいくつかの遺跡でも見られる傾向であり、ナタネの栽培を意味すると考えられる。

(4) 植生の変遷

P3帯の時代 (低位段丘時代) の植生は、冷温帯上部のミズナラ・カバノキ林は平地に分布し、山腹から山地にかけてはコメツガ、シラベ、トウヒ、チョウセンゴヨウ、ハイマツなどからなる亜寒帯針葉樹林が分布し、草地にはカラマツソウなど亜高山性の草本が分布したと推定される。

P2帯の時代は低地から山腹にかけて広く暖温帯林 (シイ・カシ; 照葉樹林) が広がっていたと推定される。やはり高率を示すコナラ亜属はクスギ・アベマキなど暖温帯林の二次林の要素であろう。

P1帯のa～bの各亜帯の時代の植生状況は下記のように推定される。

- ① a 亜帯: P2帯に引き続き暖温帯要素が残るが、その中でコナラ亜属が減少し、逆にアカガシ亜属とイネ科 (>40) が増加する。これはイネの栽培が急速に拡大し、それに対応してクスギ・アベマキなどの二次林が減少したことを示すものではないかと考えられる。
- ② b 亜帯: a 亜帯に引き続き、カシ林はほぼそのままの状態では丘陵部～山腹部に残るが、低地～台地のシイ林が縮小するのに伴って、アカマツ・クロマツの二次林が拡大する。二次林の拡大はソバの栽培とも対応する。
- ③ c 亜帯: カシ林が衰退の兆しを見せ始めるとともに、コナラ亜属 (これはコナラを中心とする二次林) やアブラナ科 (ナタネ?) およびアカマツ・クロマツが本格的な拡大傾向を示す。シイ林はごく限られた分布となる。
- ④ d 亜帯: アカマツ・クロマツとコナラの二次林要素のみとなり、自然植生要素はほとんど消える。スギ属がやや増加するのはスギの植栽によるものと考えられる。

(5) 堆積環境

二俣池北遺跡の3区西壁(A地点)の試料1や1区西壁地点、上フジ遺跡Ⅵ区西壁地点の試料1はいずれも流水域種を10~26%含み、アルカリ水域種が44~67%であることから流れ込みのある水深のごく浅い沼(々水田)の環境と推定される。

これに対応して、二俣池北遺跡3区北壁(B地点)の試料12・13は、酸性水域種が77~83%含まれ、*Ennotia*属が多いことから湿原地の環境と推定される。

この他、上フジ遺跡Ⅵ区西壁地点の試料2・3は *Cyclotella striata* など海水~汽水域種を含むが、これは後背地海成層からの再堆積であろうと考えられる。

(6) 火山灰層について

火山灰分析を行った試料は花粉層序の点からP1帯、つまり完新統の上部に相当する層準であるが、長石・石英など異質物質の比率が高く、少量含まれる火山ガラスなどの火山性の本質物質は下位の地層から洗い出されて再堆積したと推定されるものである。ガラスの屈折率からみると、その範囲が1.495~1.500と比較的低いものは平安神宮火山灰層(アキラ火山灰層)に類似し、これとは別に1.507~1.509のものは鬼虎川火山灰層に類似する。

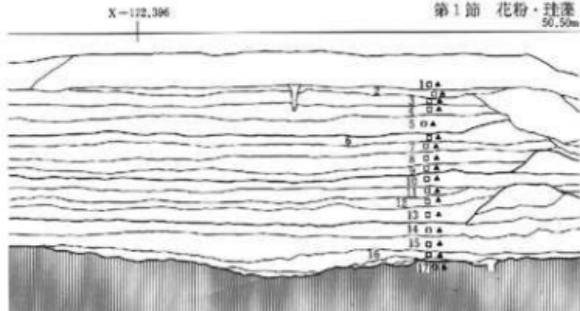
(註)

註1 財大阪府埋蔵文化財協会『山ノ内遺跡』大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第34輯 1988

財大阪府埋蔵文化財協会『平井遺跡』大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第21輯 1988

註2 完新世に形成された地層・岩石のこと。

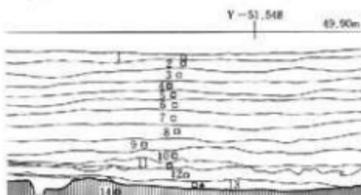
56.50m



二俣北遺跡 3区A地点

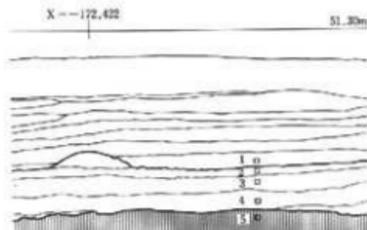
1. 耕土(1層)
2. 2.5Y 5/1 灰白色 細砂層(1層、約4~5cm程度のマンガンや礫を含む)
3. 10YR 6/1 灰白色 砂質シルト(2層)1~2cm程度のマンガンを含み、ややマンガン層を多く含む)
4. 10YR 7/2 灰白色 砂質シルト(2層)1~2層より大きなマンガンを含み)
5. 2.5YR 4/2 灰黄色 砂質シルト(2層)マンガン層を多く含む、1~2cm程度の礫を含む)
6. 2.5YR 5/1 灰白色 砂質シルト(2層)1層と2層と両層の礫を含む、ややマンガン層を多く含む)
7. 10YR 5/1 灰白色 砂質シルト(2層)1層と2層とは同じで、やや礫を多く含む)
8. 2.5Y 5/2 灰黄色 砂質シルト(2層)1層は人の少しマンガンを含み、2~3cm程度の礫を含み礫分を多く含む)
9. 2.5Y 6/1 灰白色 砂質シルト(2層)1層と2層とは同じで、礫分が少ない)

10. 2.5Y 5/1 灰黄色 砂質シルト(2層)1~2cm程度の礫を含む、少し礫状に礫分を含んでいる。マンガンは足らない)
11. 2.5Y 6/1 灰白色 砂質シルト(Va層)1~2cm程度の礫分を多く含む)
12. 2.5Y 5/1 灰黄色 砂質シルト(Va層)1~2cm程度の礫分を多く含む)
13. 2.5Y 5/2 灰黄色 砂質シルト(Va層)1~2cm程度の礫を含む、両層に大粒の礫を含むマンガンや礫分は足らない)
14. 10YR 4/1 灰白色 砂質シルト(2層)1層と2層とは同じで、礫分を多く含む)
15. 10YR 4/1 灰白色 シルト質粘土(Va層)
16. 10YR 5/2 灰黄色 シルト質粘土(2層)1層程度の礫分を多く含む)
17. 地山



二俣北遺跡 3区B地点

1. 5Y 6/1 灰白色 砂質シルト(2層)1~2cm程度のマンガン層・礫を含む)
2. 5Y 5/1 灰白色 シルト質粘土(1層)に礫があり、マンガン層の多い層が1層、2~3cm程度)
3. N 5/0 灰色 シルト質粘土(1層)に灰白色の礫分を多く含む、上面には少し礫が混入している。間隔を空けて礫色の礫分が層をなす。マンガンは少ない)
4. 7.5Y 5/1 灰色 シルト質粘土(層の中身に5cm程度の礫分が細かく混入している)
5. 2.5Y 4/1 灰黄色 細砂層(2層)のシルト層(1層)がジャジャリした音がする。断面はこれよりも色が濃く、赤く見える)
6. 7.5Y 5/1 灰色 細砂質シルト質粘土
7. 5Y 5/1 灰色 シルト質粘土(2層)比べて小さな礫分を含む層が少なく、細粒の礫分が認められ、5よりも色がやや暗く(礫の入りも多い)
8. 2.5GY 6/0 オリーブ灰色 シルト質粘土(1層)や礫分を多く含む)
9. 5Y 4/1 灰色 硬質シルト質粘土
10. 2.5GY 6/0 オリーブ灰色 シルト質粘土(1層)を多く含む、300-400)
11. 5Y 5/1 灰白色 シルト 珪藻土層(1層)を多く含む、300-400)
12. 7.5YR 5/1 黄褐色 シルト 珪藻土(粘り強い)
13. 5Y 5/0 オリーブ 砂質シルト(1層)の断面でやや粘り強くなる、300-400)
14. 5G 7/0 緑褐色 シルト質粘土(地山)



二俣北遺跡 3区C地点

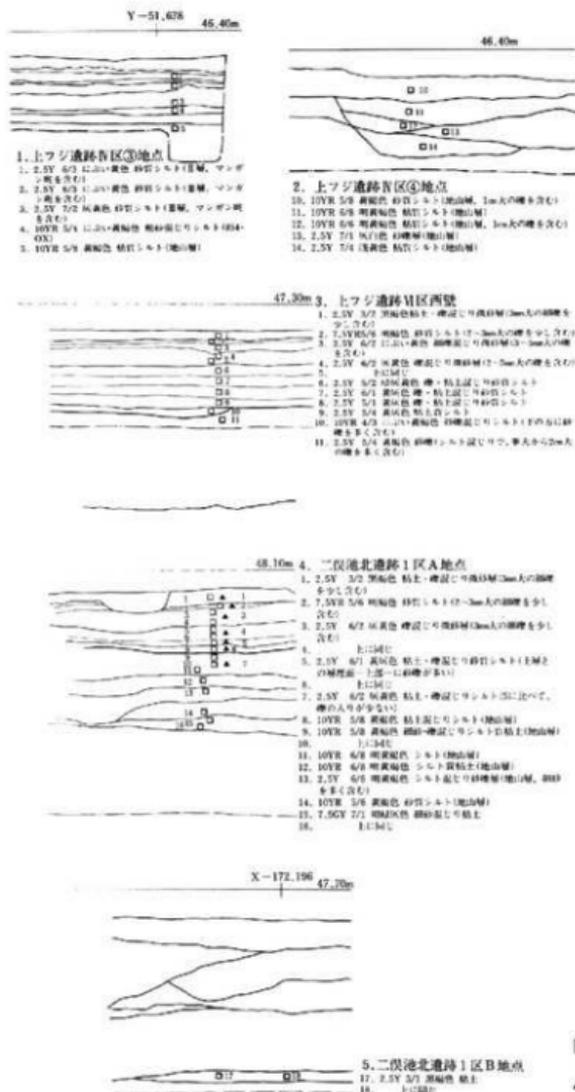
1. 7.5Y 5/1 灰色 シルト質粘土(層の中身に5cm程度の礫分が間隔を空けて混入する)
2. 7.5Y 4/1 灰色 硬質粘土にシルト層(1層)
3. 7.5Y 5/1 灰色 硬質粘土にシルト質粘土
4. 2.5GY 6/0 オリーブ灰色 シルト質粘土(Va層)やや礫分の礫分を含む)
5. 地山



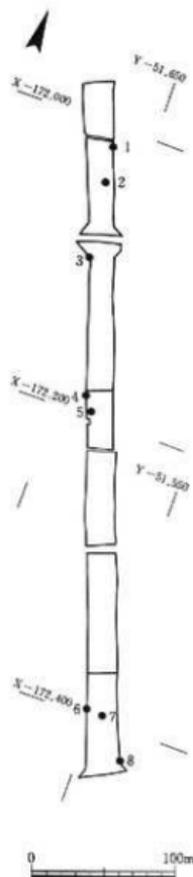
□ 花粉・珪藻分析試料

▲ プラント・オパール分析試料

第207図 試料採取層序(1) (1/40)



第208図 試料採取層序(2) (1/60)



第209図 試料採取地点位置図 (1/4000)

- 花粉・珪藻分析試料
- ▲ プラント・オパール分析試料

第2節 プラント・オパール分析

第1項 はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、二俣池北遺跡における水田跡の探査を行ったものである。

以下に、プラント・オパール分析調査の結果を報告する。

第2項 試料

昭和63年2月3日に現地調査を行った。調査地点は、①1区I09VR、②3区I20XK、③3区I20YNの3地点である(第210図)。

試料は、各地点の土層壁面において、各層ごとに5~10cm間隔で採集した(第207・208図)。採集にあたっては容量50ccの採土管ならびにポリ袋を用いた。なお、層名は各地点ごとに付けられたものであり、地点間の対応関係を示したものではない。

採集した試料数は合計25点であり、これらすべてについて分析を行った。

第3項 分析法

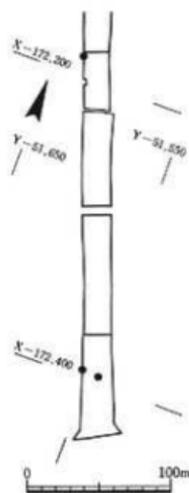
プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾(105℃・24時間)および仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量し、ガラスビーズを添加
(直径約40 μ m, 約0.02g)
- ※電子分析天秤により、1万分の1gの密度で秤量
- (3) 脱有機物処理(電子炉灰化法または過酸化水素法)
- (4) 超音波による分散(150w・26KHz・15分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20 μ m以下)除去
- (6) 乾燥ののち封入剤(オイキット)中に分散し、

プレバラート作成

- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと



第210図 試料採取地点位置図(1/4000)

略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

試量1g中のプラント・オパール個数は(Sp)は、次式にしたがって求めた。

$$Sp = |(Gw \times a) / Sw| \times (\beta / \alpha)$$

ただし、Gwは添加したガラスビーズの重量、aはガラスビーズ1g中の個数、Swは試料の絶乾重量、 α と β は計数されたガラスビーズおよびプラント・オパールの個数を表している。

植物体生産量の推定値(Bw, 単位 t/10a・cm)は、次式にしたがって決めた。

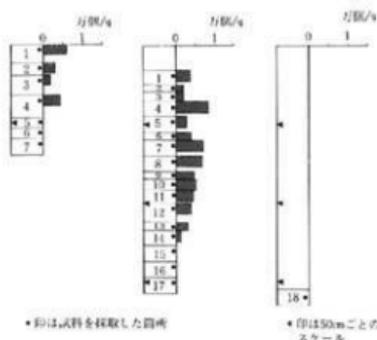
$$Bw = Sp \times As \times K \times 10$$

ただし、Asは試料の仮比重、kは換算計数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体各部乾重)を表している。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケ科の値を用いた。機動細胞珪酸体1個あたりの地上部全重(単位:10⁻⁵g)は、それぞれ2.94, 6.31, 0.48である。また、イネの機動細胞珪酸体1個あたりの種実重は1.03である。

Bwの値に層厚をかけて、その層で生産された植物体の総量(t/10a)を求めた。

第4項 分析結果

水田跡の調査が主目的であるため、イネ(*O. sativa*)、ヨシ属(*P. communis*)、タケ亜科(Bambusaceae)、ウシクサ属(ススキなどが含まれる)、キビ属(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群について同定・定量を行い、分析結果の数値データを第12表に示した。第13表に、各層の深度や層厚及び仮比重の値とともに、イネの推定生産量を示



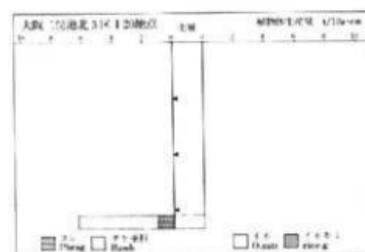
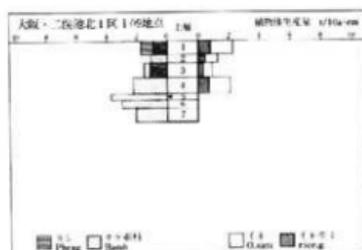
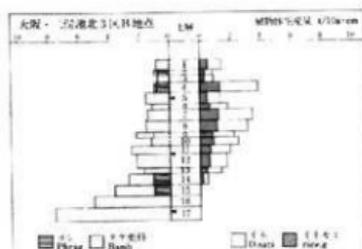
第211図 イネのプラント・オパール密度

した。

第211図に、イネのプラント・オパールの出現状況を示した。第2図に、堆積環境の指標となる主な分類群(イネ、ヨシ群、タケ亜科)について植物体生産量とその変遷を示した。

第5項 考察

(1)水田跡の確認および探査
水田跡の調査を行う場合、イネのプ



プラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と多量に検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、後代のものが上層から混入した危険性の可能性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。

以上の判断基準に基づいて検討を行い、稲作の可能性を○△▲×の4段階に区分して第12表に示した。

このうち、○印はイネのプラント・オパール密度がおよそ5,000個/g以上であり、稲作の行われた可能性が高いと判断される。△印は密度が1,000～5,000個/g未満であり、稲作の行われた可能性は考えられるものの、他所からの混入の危険性も考えられるところ、▲印は密度が1,000個/g未満と微量であり、稲作の行われていた可能性は考えにくいところ、×印はイネのプラント・オパールが検出されなかったところである。

第121図 おもな植物の推定生産量
◀印は50cmごとのスケール

第12表 試料1gあたりのプラント・オパール個数と稲作の可能性

1区100地点							
試料名	層	イ	ネ	コシ	タカ	ツク	稲作の可能性
1		5,700	1,900	14,300	1,900	0	○
2		2,800	0	14,800	0	0	△
3		1,900	900	19,400	0	0	△
4		4,100	0	27,700	8,500	0	○
5		0	0	41,600	5,700	0	×
6		0	0	39,400	900	0	×
7		0	0	27,600	900	0	×
3区120地点							
試料名	層	イ	ネ	コシ	タカ	ツク	稲作の可能性
1		3,600	0	13,600	900	0	△
2		1,800	900	10,300	0	0	△
3		1,800	0	10,100	900	0	△
4		8,100	900	13,600	1,800	0	△
5		2,600	0	20,100	900	0	△
6		3,600	0	14,600	0	0	△
7		6,800	0	17,600	1,900	0	△
8		6,400	0	15,300	1,800	0	○
9		1,800	900	26,500	3,600	0	△
10		3,000	0	15,200	3,000	0	△
11		4,100	0	33,200	2,000	0	△
12		3,900	0	30,400	1,900	0	△
13		2,900	0	23,800	4,900	0	△
14		900	900	35,600	2,000	0	▲
15		0	900	48,300	5,900	0	×
16		0	0	71,000	3,000	0	×
17		0	0	122,100	1,900	0	×
3区120地点							
試料名	層	イ	ネ	コシ	タカ	ツク	稲作の可能性
1		0	900	87,600	4,900	0	×

以上のように、I区I09地点では試料4の時期に、また3区B地点I20XKでは試料13の時期頃に稲作が開始されたものと推定される。

第13表 イネの生産量と稲作期間の推定

(2) 稲穂の生産量の推定

稲作の可能性があると、判断された各層(第12表の○および△印)で稲作が行われていたと仮定して、そこで生産された稲穂の総量(面積10aあたり)を推定した。また、当時の稲穂の年間収量を面積10aあたり100kgと仮定して、そこで稲作が営まれた期間を推定した。これらの結果を第13表に示す。

なお、これらの値は、収穫方法が穂刈りで行われ、稲わらが

すべて土壌中に還元されたことを前提として求められている。ここで推定した稲穂の生産量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

(3) 古環境の推定

ネザサなどのタケ亜科植物は、比較的乾いた土壌条件のところに成育し、ヨシは比較的湿った土壌条件のところに成育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境(乾湿)を推定することができる。

当遺跡では全体的にタケ亜科が多く、ヨシ属はほとんど見られないのが特徴であり、この傾向はイネの出現以前において特に著しい。このことから、当遺跡は稲作が開始されるまではタケ亜科が繁茂するような比較的乾燥した土壌条件であったものと推定される。

また、稲作の開始後もほぼ同様な土壌条件で推移したものと推定される。

参考文献

- 藤野宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究I—数量イネ科植物の植体体積本と定量的分析—考古学と自然科学 9:15—29
 藤野宏志 1979 プラント・オパール分析法の基礎的研究II—藨科・稗科遺跡(改訂版) 本田および群馬・日高遺跡(改訂版) 本田におけるイネ(O.sativa L.)生産量の推定—考古学と自然科学 12:29—41
 藤野宏志・村口貞二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究III—プラント・オパール分析による本田遺跡の探査—考古学と自然科学 17:13

第Ⅵ章 まとめ

二俣池北遺跡

二俣池北遺跡の今回の調査では、古墳時代後期から江戸時代にかけての遺構が数多く検出された。また、後世の包含層中から、弥生時代以前のサヌカイトの石器が出土している。

古墳時代後期～奈良時代

調査区の南半部にあたる2～5区において確認した。2区では、6世紀前葉の南北方向に伸びる幅約1.4m、深さ約0.7mの断面逆台形を呈する溝一条を検出した。3区の谷状遺構3001-OXからのびるもので、水路と考えられる。

4・5区では、6世紀後半から8世紀にかけて竪穴住居10棟、掘立柱建物18棟、溝、土坑、ピット等が検出され、集落の一端（居住空間）を確認することが出来た。これらの建物は、建物の方位、建物の構造的特徴や配置、出土した遺物などの検討から、大きくは7つの時期に分けられる。Ⅰ期は6世紀の後半～末、Ⅱ期は6世紀末～7世紀前半、Ⅲ期は7世紀前半～中葉、Ⅳ期～Ⅵ期はほぼ7世紀中葉～8世紀にかけて、Ⅶ期は平安時代以降とされ、集落の変遷を明らかにすることができた。

竪穴住居は6世紀後半頃から末にかけてのもので、竪穴住居から掘立柱建物へ変遷していく様子が確認された。定住的に足を踏み入れたのは、後世の包含層に含まれる5世紀末の須恵器や3区で検出された谷状遺構3001-OX下層から出土する5世紀末～6世紀前半の須恵器、2007-O5出土の須恵器などから、6世紀前半頃と考えられる。まず比較的安定した微高地上に居を構え、全面に広がる湿地を生産の場として利用したと考えられる。

5世紀末～6世紀前半の建物は検出されていないが、さらに建物が東西および南に広がることや2007-O5、3001-OXから出土している遺物から、調査区外に検出される可能性はきわめて高いと思われる。谷状遺構3001-OXの中層・上層がこの期の耕作土になる可能性が考えられる。畦畔等は確認されていないが、プラント・オパール分析、花粉分析の結果から類推することができる。

平安～室町時代

調査区全域が耕作地として、利用された時期である。たびかさなる耕作面の累積によって、3区において確認された谷状遺構3001-OXはほぼ埋没した状況を呈していたものと

思われる。この時期になると、集落域が移動したようで住居を示す遺構は検出することが出来なかった（現集落域に重なってくるのではないかと思われる）。かわって生産の場、耕作にかかわる畦畔や小溝が全域にわたって検出された。とりわけ、1区では畦畔や小溝とともに13～14世紀前半頃の条里に伴う幅約0.8m、深さ0.3mのコの字形の溝が検出された。遅くともこの段階に大規模な区画整理が行われたことを明らかにすることが出来た。

平安時代の耕作関係遺構は全体に削平を受けたと思われるが、かろうじて包含層が残存する3区の南半部で、畦畔等が確認されている。

江戸時代以降

前代の形状と変わるところはない。耕作地として利用され、現在に至る。

上フジ遺跡

今回の調査地は上フジ遺跡の南縁に相当すると考えられる。居住を示す遺構等は検出されていないが、遺物の分析から、各遺物に対応する遺構が調査区付近に存在したことが推測できた。また、耳環が出土しており、近辺に古墳の存在が考えられた。

遺物を出土する遺構が少なく、また平面形が不整形な遺構が多かったため、調査地の変遷を復原することは難しかった。二俣池北遺跡と同様に谷地形を利用した水田経営が古墳時代後期にあると考えられる。

少なくとも弥生時代から中世までの遺構が、中世の断続的な開発によって削平されたことが明らかになった。そして、耕作の過程で各時期の遺物を包含する、遺物包含層が形成され、現耕土層に至ったと推測できた。

別 表

- 別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表
別表2 上フジ遺跡 出土土器観察表
別表3 二俣池北遺跡 2・3区 出土遺物 層位別一覧表
別表4 二俣池北遺跡 4・5区 出土遺物 遺構・層位別一覧表
別表5 上フジ遺跡 ビット一覧表
別表6 上フジ遺跡 樹痕跡一覧表

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(1)

番号	種別	遺跡名	器種	寸法等cm (測定値)	調査地	焼成	色調 (内面・外面・断面)	残存率	備考
1	第13号	1区 1000-08	瓦器 皿	口径18.4 器高1.8	1区外部ココナテ 北面外面に指押跡	焼	N3-0 (黄褐色) N3-0 (黄褐色) N8-0 (灰白色)	50%	1371-1
2	第14号	1区 1021-08	瓦器 皿	口径1.2 底径5.4	北面外面はココナテと ナテ 内面はヘラミサキ	焼	N3-0 (黄褐色) N3-0 (黄褐色) 7.5Y6-1 (褐色)	約30% (底面)	1386-1
3	第24号	1区 ■ 割	灰土器 杯蓋	口径12.4 器高3.2	コタロナテ	焼	N7-0 (灰白色) 3P17-1 (黄褐色) 3P17-1 (黄褐色)	35%	2118
4	第24号	1区 ■ 割	灰土器 杯蓋	————	コタロナテ	焼	N7-0 (灰白色) 10B5-1 (赤褐色) 2.5B6-2 (紅褐色)	10%	1213-1
5	第24号	*	灰土器 杯蓋	————	コタロナテ	焼	10Y6-1 (灰色) 10Y6-1 (灰色) 10Y6-1 (灰色)	5%	1212-2
6	第24号	1区 ■ 割	瓦器 碗	口径12.4 器高2.9 高台径3.0	外面はミサキなし 内面は(急の礫状の) ミサキ	焼	N5-0 (灰色) 7.5Y8-1 (灰白色) 7.5Y8-1 (灰白色)	30%	2356
7	第24号	*	瓦器 碗	高台径7.0	ココナテ 外底面はヘラミサキの まま未調整	焼	N5-0 (灰色) N5-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	30%	2321
8	第24号	*	瓦器 碗	口径5.0 器高1.3	1区付近ナテ 北面外面未調整	焼	N3-0 (黄褐色) N3-0 (黄褐色) N8-0 (灰白色)	30%	2361-1
9	第24号	*	瓦器 皿	口径17.2 器高1.3	1区付近ナテ 北面外面未調整	焼	N3-0 (黄褐色) N3-0 (黄褐色) N8-0 (灰白色)	90%	1015-2
10	第24号	1区 ■ 割	瓦器 皿	口径18.9 器高1.3	器壁の割れ著しい	中	2.5Y8-1 (灰白色) 2.5Y8-1 (灰白色) 2.5Y8-1 (灰白色)	25%	1390-1
11	第24号	1区 ■ 割	瓦器 皿	口径8.2 器高1.4	器壁の割れ著しい	焼	10Y87-4 (紅褐色) 5P7-1 (黄褐色) 2.5Y7-3 (赤褐色)	50%	1091-1
12	第24号	*	瓦器 皿	口径8.4 器高1.3	器壁の割れ著しい	焼	2.5Y6-4 (紅褐色) 2.5Y8-1 (灰白色) 7.5Y8-1 (灰白色)	35%	1070-1
13	第24号	*	瓦器 皿	口径18.0 器高1.3 底径1.2	器壁の割れ著しい	焼	2.5Y8-7 (灰白色) 2.5Y8-2 (灰白色) 10Y87-2 (紅褐色)	25%	1072
14	第24号	*	土師器土器 皿	口径16.8 器高1.1	ココナテ	中	5Y88-2 (赤褐色) 7.5Y88-3 (赤褐色) 5Y88-1 (灰白色)	10%	1045-1
15	第24号	*	土師器土器 皿	口径17.0 器高1.3	器壁の割れ著しい 強い指押跡	中	7.5Y88-4 (赤褐色) 7.5Y88-6 (赤褐色) 7.5Y87-6 (褐色)	30%	1111-1
16	第24号	*	土師器 四角器	器高12.4	内面の縁は深い	焼	10Y7-1 (灰白色) 7.5Y8-2 (灰オリーブ色) N8-0 (灰白色)	5%	1045
17	第24号	1区 ■ 割	土師器 白磁器類	器高12.35 底径6.5	北面外面に割れヘラミ サキ	焼	10Y7-1 (灰白色) 7.5Y8-1 (灰白色) N8-0 (灰白色)	25%	1370

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(2)

番号	採掘回数	遺物種別	器種	寸法 口径φ (高さ)	調査	構成	色調 (内面) (外面) (断面)	残存率	備考
23	第28回 図版23	2007-05	須恵器 坏蓋	口径 13.4 器高 4.95	L1層付蓋・内面にナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	硬	10Y7/1 (灰白色) 10Y7/1 (灰白色) 10Y7/1 (灰白色)	40%	005
24	第28回 図版23	*	須恵器 坏蓋	口径 12.3 器高	L1層付蓋・内面にナデ 底部外面にナデ	硬	N6/0 (灰色) N7/0 (灰白色) N6/0 (灰色)	95%	003
25	第28回 図版23	*	須恵器 坏蓋	口径(13.7) 器高(4.30)	L1層付蓋にナデ	硬	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N6/0 (灰白色)	5%	013
26	第28回 図版23	*	須恵器 坏身	口径 10.5 器高 5.2	L1層付蓋・底部内面にナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	硬	N6/0 (灰色) N5/0 (灰色) N5/0 (灰色)	60%	001
27	第28回 図版23	*	須恵器 坏身	口径 11.7 器高 4.6	ナデ	中	7.5Y7/1 (灰白色) 5Y6/1 (黄褐色) 7.5Y6/1 (灰白色)	40%	002
28	第28回 ——	*	須恵器 坏身	口径 10.0 器高(3.4)	ナデ 底部外面にヘラケズリ 底部外面に自然釉付着	硬	N7/0 (灰色) N5/0 (灰色) N7/0 (灰色)	10%	006
29	第28回 図版23	*	須恵器 坏身	口径 10.0 器高 3.15	ナデ	硬	N7/0 (灰色) N7/0 (灰色) N7/0 (灰色)	95%	010
30	第28回 図版23	*	須恵器 坏身	口径 9.6 器高 9.7	ナデ 外面面に黒転ヘラケズリ 一部釉付着	硬	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) N5/0 (灰色)	95%	012
31	第28回 図版23	*	須恵器 坏身	口径 9.8 11.5 器高 5.0	ナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	硬	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N4/0 (灰色)	100%	011 L1層に埋み
32	第28回 図版23	*	須恵器 坏身	口径 11.9 器高(3.95)	ロクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	硬	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	50%	007
33	第30回 図版23	*	須恵器 甕	口径 19.0 残高 6.0	肩部ナキ後、黒転ナキ目	中	10Y8/1 (灰白色) 10Y8/1 (灰白色) 10Y8/1 (灰白色)	30%	001
34	第28回 図版24	*	L1層器 高坏	口径 17.5 器高 12.4 底径 10.2	祭祀のため調整不明	中	10Y5/6 (黄褐色) 7.5Y6/4 (濃い灰色) 10Y5/6 (黄褐色)	80%	008
35	第28回 図版24	*	須恵器 高坏	口径 10.6 器高 11.9	ナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ 外部内面に黒いナデ	硬	N6/0 (灰色) N5/0 (灰色) 5Y6/1 (赤灰色)	60%	005
36	第31回 図版24	2001 OX	須恵器 坏身	口径 11.0 器高 5.4	ロクロナデ L1層付蓋コナテ 底部外面に黒転ヘラケズリ	硬	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) 5Y5/1 (赤灰色)	50%	000
37	第31回 図版24	*	須恵器 坏身	口径 11.1 器高 4.45	ナデ 外面に黒転ヘラケズリ	硬	5Y6/1 (灰色) N6/0 (灰色) 5Y6/1 (灰色)	85%	014
38	第31回 ——	*	須恵器 坏身	口径 13.2 器高(1.5)	ナデ L1層付蓋コナテ	硬	N7/0 (灰色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	10%	006
39	第31回 ——	*	土師器 高坏(坏蓋)	残高 1.65	内・外面とも調整不明	中	7.5Y3/4 (黄褐色) 10Y8/1 (灰黄褐色) 7.5Y2/3 (黄褐色)	10%	005
40	第31回 ——	*	須恵器 坏身	口径(12.0) 残高 2.35	ロクロナデ	硬	7Y6/1 (青灰色) 5Y7/1 (青灰色) 5B5/1 (赤灰色)	5%	250
41	第31回 図版24	*	須恵器 坏身	口径 11.05 器高 4.6	ロクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	硬	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰色) 5Y6/1 (黄褐色)	50%	015

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(3)

番号	検出区	透視単位	器種	計測値cm (測定値)	具 形	施文	色 調 (内 面) (外 面) (側 面)	残存率	備 考
42	第31区 —	3001-OX	土師器 鉢	口径 13.8 残高 4.75	ナデ	横	7.5YR6/3 (にぶい褐色) 2.5YR6/6 (棕色) 10YR6/1 (にぶい黄褐色)	5%	254
43	第31区 図版24	*	須恵器 鉢蓋	口径 13.5 残高 4.1	口縁付近ココナテ 加敷付近ニ同軸ヘラケナズリ 元部内面に同心円刻き	横	N5/0 (灰色) N6/0 (灰色) N6/0 (灰色)	30%	056
44	第31区 図版24	*	須恵器 鉢蓋	口径 12.0 残高 4.4	コタロコナテ 口縁付近ココナテ 加敷付近ニ同軸ヘラケナズリ	横	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) 10YR6/2 (黄褐色)	50%	087
45	第31区 図版28上	*	須恵器 鉢蓋	口径 14.30 残高 2.80	コタロコナテ 口縁付近ココナテ	横	N6/0 (灰色) N8/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	10%	290
46	第31区 図版28上	*	須恵器 鉢蓋	口径 12.80 残高 2.5	コタロコナテ 口縁付近ココナテ	横	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	5%	252
47	第31区 図版24	*	須恵器 鉢蓋	口径 11.20 残高 3.30	コタロコナテ 口縁付近ココナテ 加敷付近ニ同軸ヘラケナズリ	横	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) 5R75-1 (黄褐色)	40%	091
48	第31区 図版28上	*	須恵器 鉢蓋	口径 12.25 残高 2.2	コタロコナテ 口縁付近ココナテ	横	N7/0 (灰色) N6/0 (灰色) N6/0 (灰色)	10%	127
49	第31区 図版28上	*	須恵器 高杯	口径 14.40 残高 5.2	コタロコナテ 口縁付近ココナテ 加敷付近ニ同軸ヘラケナズリ	横	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	30%	057 透かし
50	第31区 図版28上	*	須恵器 段鉢	口径 10.80 残高 5.1		横	N6/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N6/0 (灰白色)	10%	128
51	第31区 —	*	土師器 壺	口径 22.00 残高 2.25	コタロコナテ 口縁付近ココナテ	横	10YR5/3 (にぶい黄褐色) 10YR5/3 (にぶい黄褐色) 10YR5/3 (にぶい黄褐色)	5%	213
52	第31区 —	*	須恵器 瓶	残高 6.7 体部径 19.20	コタロコナテ	横	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰色) N6/0 (灰色)	30%	290
53	第31区 —	*	須恵器 鉢蓋	口径 14.30 残高 3.2	口縁付近に強いココナテ	横	N8/0 (灰白色) 10Y5/1 (灰色) N8/0 (灰白色)	5%	298
54	第31区 —	*	須恵器 鉢蓋	口径 16.30 残高 1.5	コタロコナテ 口縁付近ココナテ	横	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	5%	207
55	第3区 —	3030-OZ	黒色土器 甗	口径 14.4 器高 3.45	口縁付近ココナテ 外野面ナデ	横	5Y7/1 (灰白色) 5YR6/4 (黄褐色) 2.5YR/2 (黄褐色)	40%	227 (第10-11層)
56	第37区 図版25	3023-OO	土師器 甗	口径 10.2 残高 2.25	口縁付近ココナテ 体部ナデ	中	10YR2/2 (にぶい黄褐色) 10YR2/1 (にぶい黄褐色) 10YR2/2 (にぶい黄褐色)	100%	049
57	第51区 図版25	2001-OZ	土師質土器 小皿	口径 7.2 器高 1.25	口縁付近ココナテ 内外面ともナデ	横	2.5YR/3 (黄褐色) 10YR8/3 (黄褐色) 2.5YR/3 (黄褐色)	95%	024 2001-OX
58	第51区 —	*	土師質土器 小皿	口径 9.0 器高 1.1	口縁付近ココナテ 内外面ともナデ	横	10YR2/2 (にぶい黄褐色) 10YR2/1 (灰白色) 5YR5-6 (棕色)	10%	037 2004-OX
59	第51区 図版35下	*	青 磁 甗	口径 17.8 器高 2.1	内外面とも稍 体部厚分岐	横	5GY7/1 (明オリーブ灰色) 5GY7/1 (明オリーブ灰色) N 8 / 0 / 1 灰 白 色)	3%	026 2004-OX
60	第51区 図版33上	*	須恵質土器 鉢	口径 25.6 器高 4.3	口縁付近部 内外面ともナデ	横	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N6/0 (灰白色)	3%	025 2004-OX

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(4)

番号	種別	通称	器種	寸法(高さ)	調査	産地	色調(内面)	現在	備考
61	第51期 図版32上	*	竈 鉢	口径 28.2 器高 3.7	口縁付蓋 軸 内外面ともナテ	焼	S8-C S6-9(灰白色) S4-10(褐色) S8-0 (灰白色)	5%	323 3001-OX
62	第52期 図版32下	2001-OZ	土師貫土器 小皿	口径 7.7 器高 11.7	口縁付蓋 ココナテ 外部外面 指押さえ 内面 ナテ	焼	7.5YR7/4 (12.5%褐色) 7.5YR7/6 (褐色) 7.5YR8-2 (灰白色)	20%	144 (3a特)
63	第52期 図版37下	*	竈 鉢	口径 5.4 器高 2.9	内外面とも 焼	焼	5Y5-3 (灰オリーブ色) 5Y5-3 (灰オリーブ色) 5YR8-2 (灰白色)	10%	156 (3a特)
64	第52期 図版32上	*	土師貫土器 小皿	口径 7.7 器高 1.1	口縁付蓋 ココナテ 外部外面 指押さえ 内面 ココナテ	焼	10YR8-6 (明黄褐色) 10YR7-3 (12.5%黄褐色) 10YR7-2 (12.5%黄褐色)	5%	143 (3a特)
65	第52期 図版37上	*	土師貫土器 小皿	口径 8.3 器高 11.7	口縁付蓋 ココナテ 外部外面 指押さえ 内面 ナテ	焼	7.5YR7-6 (褐色) 5YR7-6 (褐色) 5YR5-2 (黄褐色)	25%	141 (3a特)
66	第53期 図版27	2000-OZ	瓦 器	口径 10.2 器高 2.0	口縁付蓋 ココナテ 外部外面 指押さえ 内面 ヘラヒガキ→ナテ	中	7.5YR-1 (灰白色) 7.5YR-1 (灰白色) 7.5YR-1 (灰白色)	40%	140 (3a特)
67	第53期 —	*	瓦 器	口径 10.9 器高 1.0	口縁付蓋 ココナテ 外部 ナテ 内面 ハケ目	焼	S5-0(褐色) N7-0(灰白色) S5-0(褐色) N7-0(灰白色) S6-0(褐色)	10%	149 (3a特)
68	第53期 —	*	瓦 器	口径 4.9 器高 1.1	高台 ココナテ 外面 ナテ 内面 格子	中	N5-0 (灰色) N7-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	10%	283 (3a特)
69	第53期 —	*	瓦 器	口径 4 器高 1.1	高台 ココナテ 外面 ナテ 内面 格子	中	N5-0 (灰色) N6-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	10%	218 (3a特)
70	第53期 図版34上	*	土師貫土器 鉢	口径 21.6 器高 3.6	内外面とも ココナテ	焼	S3-0(暗灰色) N7-0(灰白色) S3-0(暗灰色) N7-0(灰白色) S7-0(灰白色)	20%	125 (3a特)
71	第53期 図版27	*	瓦 器	口径 5.4 器高 1.8	口縁付蓋 ココナテ 外部外面 指押さえ 内面 ヘラヒガキ(格子)	中	N3-0 (暗灰色) N3-0 (暗灰色) 2.5YR5/6 (灰色)	45%	139 (3a特)
72	第53期 —	*	土師貫土器 小皿	口径 11.6 器高 1.6	口縁付蓋 ココナテ	焼	2.5Y6-6 (褐色) 2.5Y6-6 (褐色) 2.5YR5-6 (明赤褐色)	15%	152 (3a特)
73	第53期 —	*	白 磁	口径 4.2 器高 1.75	高台付蓋 ナテ 外面 ナテ 内面 軸	焼	10YR8-1 (灰白色) 10YR7-2 (12.5%黄褐色) 10Y5-2 (オリーブ灰白色)	10%	165 (3a特)
74	第53期 図版30下	*	白 磁	口径 8.2 器高 1.05	外面 ナテ 内面 軸	焼	7.5Y7-2 (灰白色) 10YR-1 (灰白色) 10YR-1 (灰白色)	5%以上	170 (3a特)
75	第53期 図版30下	*	青 磁	口径 13.8 器高 5.25	外面 鉄いぼ文様 内外面とも 軸	焼	7.5G7/6-1 (緑灰色) 7.5G7/6-1 (緑灰色) N8-0 (灰白色)	20%	141 (3a特)
76	第53期 図版35上	*	灰釉陶器 鉢	口径 13.5 器高 2.4	外面 ナテ 内面 軸	焼	7.5YR-1 (灰白色) 7.5YR-1 (灰白色) 7.5YR-1 (灰白色)	10%	189 (3a特)
77	第53期 図版20下	2015-OZ	瓦 器	口径 15.5 器高 1.5	口縁付蓋 ナテ 外部外面 指押さえ 内面 ヘラヒガキ	焼	N3-0 (暗灰色) N4-0 (暗灰色) 10YR-1 (灰白色)	10%	281 3018-OX
78	第53期 図版28下	*	瓦 器	口径 3.9 器高 1.25	高台 ココナテ 外面 指押さえ ナテ 内面 ヘラヒガキ	焼	S4-0 (灰色) N2-0 (暗灰色) 10YR-1 (灰白色)	10%	269 3018-OX
79	第53期 図版28下	*	瓦 器	口径 5.1 器高 1.15	高台 ナテ	中	N2-0 (暗灰色) N2-0 (暗灰色) 10YR-1 (灰白色)	10%	257 3017-OX

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(5)

番号	発掘期	遺構位置	器種	計測値cm (測定期)	調査	焼成	色調 (内面)	残存率	備考
80	第55回 埋藏28F	2015-OZ	瓦器	口径 8.6 器高 1.1, 2.0	口縁付蓋 ココナテ 外面 指頭圧痕 内面 ナテ	焼	N4-0 (灰色) N3-0 (暗灰色) 10YR7 (灰白色)	5%	56 2015-OX
81	第55回 埋藏35上	*	白磁 碗	口径 15.3 器高 3.0	内外銀	焼	7.5Y7/1 (灰白色) 2.5GY8/1 (灰白色) 7.5Y8/1 (灰白色)	5%	57 2018-OX
82	第55回 -----	*	土師器 壺	口径 16.0 器高 3.0	口縁付蓋 ココナテ 内外面 指頭圧痕 内面1部 ナテ	焼	10YR5/3 (こげい黄褐色) 10YR7/2 (こげい黄褐色) 10YR8/1 (灰白色)	5%	58 2018-OX
83	第56回 埋藏20F	2015-OZ	瓦器 碗	口径 13.5 器高 4.2	口縁付蓋 ココナテ 外面 ヘラミガキ	中	N4-0 (灰色) N4-0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	20%	186 (6個)
84	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 15.0 器高 3.5	外面 ヘラミガキ 体部外面に指頭圧痕 内面 ヘラミガキ	焼	10Y3/1 (オリーブ黒) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	5%	972
85	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 13 器高 3	口縁付蓋 ココナテ 外面 ナテ 内面 ナテ	中	N5-0 (灰色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	5%	182 (6個)
86	第56回 埋藏20F	*	瓦器 碗	口径 14 器高 2.95	口縁付蓋 二重ナテ 外面 ナテ 内面西壁残の凸調整不明	中	N6-0 (灰色) N5-0 (灰色) 2.5GY8/1 (灰白色)	10%	190 (6個)
87	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 11 器高 2.30	口縁付蓋 ココナテ 体部外面に指頭圧痕 内面 ナテ	焼	2.5Y7/1 (灰白色) 2.5Y8-2 (灰白色) 2.5Y7/1 (灰白色)	20%	205 (6個)
88	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 4.4 碗高 1.6	高台 ココナテ 内面 ナテ→輪紋	焼	N5-0 (灰色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	45%	105 (6個)
89	第56回 埋藏20F	*	瓦器 碗	口径 5.3 碗高 1.4	高台 ココナテ 外面 ナテ 内面 ナテ	中	N5-0 (灰色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	184 (6個)
90	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 6 碗高 1.8	外面 ココナテ 内面ナテ→ヘラミガキ	中	N4-0 (灰色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	224 (6個)
91	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 5 碗高 1.9	高台 ココナテ 外面 ナテ 内面 ヘラミガキ	中	N4-0 (灰色) N6-0 (灰色) 7.5Y8-2 (灰白色)	20%	222 (6個)
92	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 6.8 碗高 1.2	高台 ココナテ 外面 ナテ 内面輪瓦の凸調整不明	中	N3-0 (暗灰色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	200 (6個)
93	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 5.1 碗高 1.5	内面 ヘラミガキ	焼	N4-0 (灰色) N2-0 (暗灰色) N8-0 (灰白色)	20%	978 (6個)
94	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 6.9 碗高 1.3	外面 ナテ 内面輪瓦の凸調整不明	中	N1-0 (灰色) N1-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	199 (6個)
95	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 5.8 碗高 1.4	高台 ココナテ 外面 ナテ 内面 ヘラミガキ	中	N8-0 (灰白色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	202 (6個)
96	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 5.2 碗高 1.25	外面 磨いたテ 内面 ナテ→輪紋	中	N5-0 (灰色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	204 (6個)
97	第56回 埋藏29F	*	瓦器 碗	口径 5.7 碗高 1.3	外面 ココナテ 内面 ヘラミガキ	中	N4-0 (灰色) N4-0 (灰色) 10YR7 (灰白色)	10%	987 (6個)
98	第56回 -----	*	瓦器 碗	口径 4.4 碗高 1.2	外面 ナテ 内面 アトランダムに ヘラミガキ	中	N1-0 (灰色) N4/1 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	188 (6個)

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(6)

番号	種別	出層	器種	調査枚数 (鑑定済)	調査票	検出	色調 (内面・外面)	残存率	備考
99	第54区 図版29 F	*	瓦器 碗	底径 3.0 残高 0.9	内外ともナナ	中	S3-0 (灰色) T.5YR-6 (灰白色) S8-0 (灰色)	10%	191 (6割)
100	第54区 図版29 F	*	白磁 碗	底径 4.1 残高 1.9	外面 ヘラノミ 内面 磨	硬	T.5YR-2 (灰白色) T.5YR-1 (灰白色) T.5YR-1 (灰白色)	30%	194 (6割)
101	第54区 ——	*	黒色土器 杯	口径 1.5 残高 3.3	外面 調整不明	硬	10YR7-1 (黒色) 10YR7-3 (にじみ黄褐色) 10YR7-2 (にじみ黄褐色)	20%	073 (6割)
102	第54区 ——	3015-02	黒色土器 碗	底径 7.4 残高 1.1		硬	5Y2-1 (黒色) 7.5YR8-4 (淡黄褐色) 7.5YR8-4 (淡黄褐色)	5%	028 (6割)
103	第54区 図版29 F	*	黒色土器 碗	底径 6.0 残高 1.05	高付付足 ココナデ 外面 ナデ 内面 ナデ	硬	5Y2-1 (黒色) 2.5Y1-1 (黄褐色) 5Y2-1 (黒色)	20%	082 (6割)
104	第54区 図版29 F	*	瓦器 皿	口径 6.8 器高 1.25	1段付足 ココナデ 外部外面 指跡付 内面 ヘラノミ	中	N6-0 (灰色) N5-0 (灰色) 2.5YR8-1 (灰白色)	5%	183 (6割)
105	第54区 図版29 F	*	瓦器 皿	口径 8.8 器高 2.05	1段付足 ココナデ 外部外面 調整不明 内面 調整不明	中	5YR-1 (灰白色) N1-0 (灰色) 5YR-1 (灰白色)	20%	069 (6割)
106	第56区 図版34 F	*	黒色土器 鉢	口径 2.5 器高 5.85	内外面ともココナデ	硬	N6-0 (灰色) N6-0 (灰色) N6-0 (灰色)	5%	075 (6割)
107	第56区 図版34 F	*	黒色土器 鉢	口径 34.4 器高 6.33	内外面ともココナデ	硬	N6-0 (灰色) S3-0(灰褐色) S5-0(灰色) S6-0 (灰色)	10%	126 (6割)
108	第56区 ——	*	土師質土器 皿	口径 7.9 器高 1.2	1段付足 ココナデ 外部外面 指跡付 内面 ナデ	硬	10YR8-2 (灰白色) 10YR8-2 (淡黄褐色) 2.5Y7-1 (灰白色)	25%	074 (6割)
109	第56区 図版35.1	*	灰褐色土器 鉢	底径 8.6 残高 1.4	高付付足 同6ナデ 外底 ヘラノミ 内面 磨	硬	T.5YR-2 (灰ナリーブ色) 10YR-1 (灰白色) 10YR-1 (灰白色)	5%	083 (6割)
110	第60区 図版28 F	3022-00	瓦器 碗	底径 4.5 残高 0.7	高台 ナデ 底部 磨跡付 内面 磨子付痕跡	硬	10Y7-1 (灰白色) N6-0 (灰色) M8-0 (灰白色)	10%	256
111	第60区 図版28	*	灰褐色土器 小皿	口径 9.3 器高 2.7	1段付足 ココナデ 高台 ココナデ 内外面ともナデ	硬	10Y6-1 (灰白色) T.5YR-1 (灰白色) T.5YR-1 (灰白色)	55%	054
112	第62区 図版28	3084-00	瓦器 鉢	口径 9.4 器高 1.80	1段付足 ココナデ 外部外面 指跡付 内面 ヘラノミ	硬	N3-0 (暗灰色) N4-0 (灰色) 10YR-1 (灰白色)	45%	056
113	第63区 ——	3008-05 2010-05	土師質土器 小皿	口径 7.8 器高 1.01	外面磨跡のみ調整不明 内面 ナデ	硬	T.5YR5-6 (黄褐色) T.5YR6-6 (褐色) T.5YR5-8 (黄褐色)	30%	033
114	第67区 図版28 F	3300-05 3034-05	土師質土器 皿	口径 8.2 器高 1.5	1段付足 ココナデ 外部外面 指跡付 内面 ナデ	硬	T.5YR6-4 (にじみ褐色) 2.5YR-2 (淡黄色) 2.5Y7-4 (淡黄褐色)	5%	255 F段
115	第67区 図版28 F	*	瓦器 碗	底径 6.6 残高 1.05	高台 ココナデ	中	10YR-1 (灰白色) 10YR-1 (灰白色) 10YR-1 (灰白色)	20%	261 F段
116	第68区 図版25	3 C区 V a 群	灰褐色 高杯	口径 11.2 器高 3.61	1段付足 ココナデ 外部外面 ヘラノミ 内外面 ナデ	硬	N2-0 (灰白色) N2-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	40%	491 (7割)
117	第68区 ——	*	灰褐色 ナデ鉢	口径 9.1 残高 4.3	内外面 磨跡ココナデ 底部 ナデ	硬	10Y4-1 (灰色) N7-0 (灰白色) 2.5YR6-1 (赤褐色)	30%	155 (7割)

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(7)

番号	発掘 区画	遺構 状況	器種	計測値cm (推定値)	調整	検定	色調 (内面・外面・ 断面)	残存率	備考
118	第68回 図版29上	*	黒色土器 鉢	口径 14.2 器高(4.2)	内外面 ナテ	硬	N3-0 (暗灰色) N3-0 (暗灰色) 2.5Y5/2 (暗灰黄)	5%	025 (7割)
119	第68回 図版29上	*	黒色土器 甕	口径 10.9 器高(2.1)	外面 ヘウミガキ 内面 調整不明	中	N3-0 (暗灰色) N2-0 (紫色) 3Y4/2 (灰ナリーブ色)	5%	034 (1割)
120	第68回 図版29上	*	瓦器 甕	口径 16.4 器高(3.4)	口縁付蓋 ココナテ 内外面 ヘウミガキ	中	3R2/1 (青紫色) 3R3/1 (暗青灰色) N3-0 (灰色)	10%	046 (7割)
121	第68回 ——	*	瓦器 甕	底径 6 残高 1.1	高台 ココナテ 外面 ナテ 内面ナテ→ヘウミガキ	中	N4-0 (灰色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	5%	215 (2割)
122	第69回 図版25	3b区 V a割	瓦器 甕	口径 12.5 残高 3.0	口縁付蓋 ココナテ 外部外面 磨裡さえ 内面 ヘウミガキ	硬	5Y8/1 (灰白色) N3-0(灰色) 7.5Y7/1(灰白色)	5%	038 (7割)
123	第69回 ——	*	瓦器 甕	口径 12 残高 2.4	口縁付蓋 ココナテ 内外面 ナテ	中	7.5Y8/1 (灰白色) 2.5GY8/1 (灰白色) 7.5Y8/1 (灰白色)	10%	211 (7割)
124	第69回 ——	*	瓦器 甕	口径 11.4 残高 2.3	口縁付蓋 黒底 外面 ナテ 内面 不明	中	N4(9)灰色 N8(9)灰白色 N4(9)灰色 N8(9)灰白色 N8(9)灰白色	5%	042 (7割)
125	第69回 ——	*	瓦器 甕	底径 5.4 残高 2.0	高台 ココナテ 外面ナテ→ヘウミガキ 内面アトラシムのみナテ	中	N3-0 (暗灰色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	0213 (7割)
126	第69回 図版25	*	瓦器 小皿	口径 7.5 器高 1.4	口縁付蓋 磨裡さえ →ココナテ 内外面ともナテ	硬	10Y8/2 (灰白色) 5Y8/2 (灰白色) 7.5Y7/1 (灰白色)	100%	041 (7割)
127	第70回 図版25	V b割	緑釉陶器 甕	口径 13.5 器高 4.45	内外面とも全副冠ナテ	中	7.5Y7/1 (灰白色) 7.5Y7/1 (灰白色) 7.5Y7/1 (灰白色)	80%	018 (8割)
128	第70回 図版29上	*	黒色土器 甕	口径 11.6 残高 2.0	口縁付蓋 ココナテ 外部外面 磨裡さえ 内面ケスミ→ヘウミガキ	硬	5Y2/1 (紫色) 2.5Y8/3 (灰紫色) 7.5Y7/2 (灰紫色)	20%	210 (8割)
129	第70回 図版29上	*	黒色土器 甕	底径 7.8 残高 3.2	高台 ココナテ 外面 ナテ 内面 ヘウミガキ	中	10Y8/4 (じこい黄褐色) 10Y8/4 (じこい黄褐色)	10%	045 (8割)
130	第70回 ——	*	瓦器 甕	口径 15.0 器高 5.9 地径 8.5	内外面ともココナテ	硬	N7-0 (灰白色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	15%	039 (8割)
131	第70回 図版29上	*	灰土器 甕	口径 10.3 器高(2.4)	口縁付蓋 ココナテ 内外面とも ナテ	硬	N6-0 (灰色) N6-0 (灰色) N7-0 (灰白色)	5%	202 (8割)
132	第71回 ——	第3区割	瓦器 甕	口径(18.0) 器高 5.4	口縁付蓋 ココナテ 外部外面 ナテ 底部外面 磨裡さえ	中	5Y1/1 (灰白色) 2.5GY8/1 (灰白色) 7.5Y8/1 (灰白色)	20%	226 (30%割)
133	第71回 ——	*	瓦器 甕	口径(14.4) 残高 3.0	口縁付蓋 ココナテ 外面外部ヘウミガキ 外面に磨裡痕あり	硬	N3-0 (暗灰色) N3-0 (暗灰色) N8-0 (灰白色)	20%	009 (30%割)
134	第71回 ——	*	瓦器 甕	口径(14.4) 残高 1.8	口縁付蓋 ココナテ 内面ヘウミガキ、外縁は ナテの尻、ヘウミガキ	硬	7.5Y3/2 (ナリーブ灰色) N2-0 (暗灰色) 10Y8/3 (灰白色)	20%	118 (30%割)
135	第71回 図版26	*	瓦器 甕	口径(15.5) 器高 5.5	口縁付蓋 ココナテ 外部外面は磨裡さえの 尻、ヘウミガキ	硬	N4-0 (灰色) N4-0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	15%	181 (30%割)
136	第71回 ——	*	瓦器 甕	口径(12.0) 残高 2.8	口縁付蓋 ココナテ 外部外面 磨裡さえ 内面 ナテ	中	N8-0 (灰白色) N8-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	10%	230 (30%割)

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(8)

番号	種別	遺物	器種	計測値(cm (測定値))	調査	焼成	色調 (内面) (外面) (断面)	残存率	備考
137	第11区	群65号	瓦器 椀	口径(12.0) 残高 3.95	口縁付近 ココナテ 外部外面 指押さえ 内面 ナテ	中	N8-0 (灰白色) 5YR/1 (灰白色) 2,5YR/1 (灰白色)	10%	231 (206号)
138	第11区 図版30上	*	瓦器 椀	口径(11.7) 残高 2.6	口縁付近 ココナテ 外部外面 指押さえ 内面 ヘラミガキ	硬	N7-0 (灰白色) N3-0 (暗灰色) N7-0 (灰白色)	20%	205 (206号)
139	第11区	*	瓦器 椀	口径(11.4) 残高 2.3	口縁付近 ココナテ 外部外面 指押さえ 内面 ナテのため調整不明	中	N3-0 (暗灰色) N3-0 (暗灰色) 5YR/2 (黄オリーブ色)	10%	178 (206号)
140	第11区 図版29	*	瓦器 椀	底径(11.4) 残高 2.15	口縁付近 ココナテ 外部外面 指押さえ 内面 一定方向にナテ	硬	N8-0 (灰白色) 7,5Y7/1 (灰白色) N8-0 (灰白色)	30%	206 (206号)
141	第11区 図版28	*	瓦器 椀	口径(10.4) 残高 2.5	口縁付近 ココナテ	中	N4-0 (灰白色) N2-0 (灰白色) 5Y7/3 (黄白色)	35%	122 (206号)
142	第11区 図版30上	*	瓦器 椀	口径(12.0) 残高 1.5	口縁付近 ココナテ 内面 ヘラミガキ	硬	N8-0 (灰白色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	5%	243 (206号)
143	第11区	*	瓦器 椀	底径(5.4) 残高 1.9	外部外面計のため調整 不明、内面はココナテ 内面不定方向のヘラミガキ	中	N3-0 (暗灰色) N3-0 (暗灰色) 7,5YR/1 (灰白色)	20%	176 (206号)
144	第11区	*	瓦器 椀	底径(6.4) 残高 1.65	外部外面計 ナテ 内面 不定方向の ヘラミガキ	硬	N5-0 (灰色) N3-0 (暗灰色) N8-0 (灰白色)	25%	196 (206号)
145	第11区 図版30下	*	瓦器 椀	底径(5.0) 残高 2.15	外部外面 ナテ 外底面 ココナテ 見込みは一定方向に調整	硬	N5-0 (灰色) N6-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	20%	184 (206号)
146	第11区	*	瓦器 椀	底径(6.0) 残高 2.85	外部外面 ヘラミガキ 外底面 ココナテ	中	N4-0 (灰色) N4-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	227 (206号)
147	第11区	*	瓦器 椀	底径(3.3) 残高 1.75	外部外面 指押さえ 外底面 ココナテ 内面ナテの残、ヘラミガキ	硬	10YR/1 (灰白色) N5-0 (灰色) 10YR/1 (灰白色)	20%	228 (206号)
148	第11区 図版30下	*	瓦器 椀	底径(5.4) 残高 1.45	見込みは一定方向に ヘラミガキ	硬	N4-0 (灰色) N4-0 (灰色) 10YR/1 (灰白色)	10%	193 (206号)
149	第11区 図版30下	*	瓦器 椀	口径(2.3) 残高 1.75	外部外面 指押さえ 内面 ナテ	硬	5YR/2 (灰白色) 5YR/2 (灰白色) 10YR/1 (灰白色)	10%	187 (206号)
150	第11区	*	瓦器 椀	底径(5.0) 残高 1.1	外底面 ナテ 内面 調整不明 外部外面 指押さえ	硬	N4-0 (灰色) N5-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	10%	223 (206号)
151	第11区	*	瓦器 椀	底径(4.4) 残高 0.95	外底面 ナテ 内面は調整のため 不明なヘラミガキ	硬	N5-0 (灰色) N5-0 (灰色) 10YR/1 (灰白色)	10%	122 (206号)
152	第11区	*	瓦器 椀	底径 5.8 残高 1.5	外部外面 調整不明 外底面 あらいナテ 内面 ヘラミガキ	硬	N2-0 (黒色) N3-0 (暗灰色) 10YR/1 (灰白色)	50%	201 (206号)
153	第11区 図版30下	*	瓦器 椀	口径 2.2 残高 0.9	外部外面 指押さえ 外底面 ココナテ 内面 ヘラミガキ	硬	N7-0 (灰白色) 10YR/1 (灰白色) 10YR/1 (灰白色)	10%	183 (206号)
154	第11区	*	瓦器 椀	底径 3.4 残高 1.1	外部外面 指押さえ 外底面 ココナテ 内面 ナテ+調整	中	N5-0 (灰色) 2,5Y5/0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	10%	217 (206号)
155	第11区 図版30下	*	瓦器 椀	底径 2.2 残高 0.65	外部外面 指押さえ 外底面 ナテ 内面 ナテ	硬	N7-0 (灰白色) 7,5Y7/1 (灰白色) 7,5Y7/1 (灰白色)	10%	188 (206号)

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(9)

番号	発掘回数	遺物名	器種	寸法(高さ) (規定形)	調査地	説明	色調 (内・外・底面)	残存率	備考
154	第71回 図版26	■b3別	瓦器 皿	口径 9.9 残高(2.5)	11層付近 ココナテ 内面 ヘラミダキ	礎	7.5Y8-1 (灰白色) 7.5Y8-1 (灰白色) 7.5Y8-1 (灰白色)	10%	136 (366号)
157	第71回 ——	*	瓦器 皿	口径 8.8 残高 2.5	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ヘラミダキ	礎	N4-0 (灰白色) 7.5Y8-1 (灰白色) 7.5Y8-1 (灰白色)	15%	230 (366号)
158	第71回 ——	*	瓦器 皿	口径 9.9 残高(2.0)	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面見込みのヘラミダキ	礎	N4-0 (灰白色) N3-0 (灰白色) 10Y8-1 (灰白色)	20%	112 (366号)
159	第71回 図版26	*	瓦器 皿	口径 9.4 残高(2.0)	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ナテ	礎	N4-0 (灰白色) N1-0 (灰白色) 10Y8-1 (灰白色)	30%	112 (366号)
160	第71回 ——	*	瓦器 碗	口径 8.6 残高 1.9	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ヘラミダキ	中	N4-0 (灰白色) N5-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	10%	216 (366号)
161	第71回 図版29上	*	瓦器 碗	口径 12.0 残高 1.3	外部外面に指押圧痕 内面 ナテ	礎	N6-0 (灰白色) N5-0 (灰白色) N7-0 (灰白色)	5%	214 (366号)
162	第71回 ——	*	瓦器 皿	口径 7.4 残高 1.4	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ナテ	礎	10Y8-2 (黄褐色) 10Y8-2 (にぶい黄褐色) 2.5Y7-4 (黄褐色)	30%	233 (366号)
163	第71回 ——	*	瓦器 皿	口径 8.4 残高 1.05	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ヘラミダキ	礎	10Y8-1 (灰白色) 10Y8-1 (灰白色) 10Y8-1 (灰白色)	20%	229 (366号)
164	第71回 図版29上	*	瓦器 皿	口径 8.1 残高 1.2	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ヘラミダキ	礎	N4-0 (灰白色) N4-0 (灰白色) 10Y8-1 (灰白色)	20%	172 (366号)
165	第71回 図版29	*	瓦器 皿	口径 7.5 残高 1.4	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ナテ	礎	10Y8-1 (灰白色) 10Y7-1 (灰白色) N7-4 (灰白色)	25%	693 (366号)
166	第71回 ——	*	瓦器 皿	口径 8.0 残高(1.9)	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ナテ	礎	10Y8-4 (にぶい黄褐色) 10Y7-3 (にぶい黄褐色) 2.5Y8-2 (灰白色)	20%	688 (366号)
167	第71回 ——	*	瓦器 皿	口径 7.4 残高(1.4)	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ナテ	礎	10Y8-2 (黄褐色) 10Y8-2 (にぶい黄褐色) 10Y8-1 (灰白色)	20%	261 (366号)
168	第71回 図版26	*	瓦器 皿	口径 7.4 残高 1.3	11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕 内面 ナテ	礎	5Y4-2 (灰青緑色) 2.5Y5-3 (黄褐色) 2.5Y7-4 (黄褐色)	45%	689 (366号)
169	第71回 図版30上	*	土師器 皿	口径 8.2 残高 1.35	11層付近 ココナテ	中	5Y8-3 (黄褐色) 5Y8-2 (黄褐色) 5Y8-2 (にぶい黄色)	70%	151 (366号)
170	第71回 ——	*	瓦器 皿	口径(5.8) 残高 1.2	11層付近 ココナテ	礎	10Y8-5 (黄褐色) 2.5Y8-2 (灰白色) 10Y8-4 (褐色)	20%	985 (366号)
171	第71回 ——	*	瓦器 皿	口径(9.5) 残高 1.9	ロケロコナテ 11層付近 ココナテ 外部外面に指押圧痕	礎	N3-0 (灰白色) N3-0 (灰白色) 10Y8-1 (灰白色)	30%	236 (366号)
172	第71回 図版35下	*	古銅 同定型	口径 9.8 残高(1.4)	内外面 無	礎	5Y6-2 (オリーブ黄) 5Y6-3 (オリーブ黄) 5Y8-1 (灰白色)	5%	184 (366号)
173	第71回 ——	*	灰土器 杯(蓋)	口径 17.0 残高(1.4)	11層付近 ココナテ 内面 ナテ	礎	N7-0 (灰白色) N7-0 (灰白色) N7-0 (灰白色)	5%	246 (366号)
174	第71回 図版30上	*	土師器上層 煎釜	口径 22.0 残高(3.55)	内外面 ナテ	礎	10Y9-6 (黄褐色) 7.5Y7-1 (褐色) 7.5Y7-1 (黄褐色)	5%	217 (366号)

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (10)

番号	種別	遺物	器種	口径・高さ (推定値)	調査	現地	色調 (内面・外面・底面)	残存率	備考
175	第71区 図版30上	■b・3群	土師器土器	口径 8.0 残高 1.6	口縁付蓋 ココナテ 外部外面に指環状痕 内面 ナテ	硬	10YR7/1 (灰白色) 2.5YR/3 (淡黄色) 2.5YR/2 (灰白色)	80%	105 (306群)
176	第71区 ——	*	土師器土器	口径 8.2 残高 1.2	口縁付蓋 ココナテ 外部外面に指環状痕 内面 ナテ	硬	10YR8/3 (淡黄色) 10YR8/3 (淡黄色) 10YR8/3 (淡黄色)	10%	224 (306群)
177	第71区 図版30	*	土師器土器	口径 8.0 残高 (1.75)	口縁付蓋 ココナテ 内面 ナテ	硬	5YR/2 (灰白色) 5YR/1 (灰白色)	40%	234 (306群)
178	第71区 図版30	*	土師器土器	口径 8.2 残高 1.35	口縁付蓋 ココナテ 外部外面に指環状痕 内面 ナテ	硬	5YR8/3 (淡黄色) 5YR8/3 (淡黄色) 5YR7/3 (にぶい灰色)	70%	115 (306群)
179	第71区 図版30	*	土師器土器	口径 7.4 残高 (1.3)	調整不明	硬	10YR6/1 (にぶい黄褐色) 10YR6/3 (にぶい黄褐色) 10YR6/2 (淡黄色)	20%	079 (306群)
180	第71区 ——	*	土師器土器	口径 7.6 残高 1.4	口縁付蓋 ココナテ 外部外面に指環状痕 内面 ナテ	硬	2.5YR/2 (灰白色) 2.5YR/2 (灰白色) 2.5YR/2 (灰白色)	10%	094 (306群)
181	第71区 図版30下	*	灰土質土器	口径 18.4 残高 (6.3)	蓋部外面 回転ナテ	中	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) N7/0 (灰色)	20%	127 (306群)
182	第72区 図版31上	■b・2群	灰土質 鉢	口径 38.2 底径 (3.4)	口縁付蓋 ココナテ 外面・内面1部ナテ 内面 ナメナテ	硬	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	5%	042 (306群)
183	第72区 図版31下	*	灰土質土器	口径 31.2 底高 (6)	内外面ともナテ	硬	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰色) N7/0/1 (灰白色)	10%	122 (306群)
184	第72区 図版31下	*	灰土質土器	口径 8.2 残高 3.0	鉢	硬	5P96/1 (青灰色) 5P96/1 (青灰色) 5P96/1 (青灰色)	5%	047 (306群)
185	第72区 図版27	*	単色器 杯・舟	口径 12.3 残高 (4.5)	口縁付蓋 ココナテ 外部外面ナテ・ヘラケズナ 内面 ナテ・回転ナテ	硬	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) 5R75/1 (紫灰色)	20%	107 (306群)
186	第72区 ——	*	瓦器 小蓋	口径 7.6 残高 (1.3)		硬	7.5Y6/1 (灰色) 7.5Y7/1 (灰白色) 10YR7/1 (灰白色)	30%	244 (306群)
187	第72区 ——	*	瓦器 皿	口径 9.8 残高 (1.7)	口縁付蓋 ココナテ 外部外面に指環状痕 内外面 ヘラケズナ	硬	N4/0 (灰色) N5/0 (灰色) N4/0 (灰色)	20%	104 (306群)
188	第72区 ——	*	瓦器 瓶	底径 5.6 残高 1.1	内面 ヘラ1部キ	硬	N4/0 (灰色) N5/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	10%	129 (306群)
189	第72区 ——	*	瓦器 瓶	底径 6.8 残高 2.0	外部外面 ケズリ 高台 ココナテ 底外面 指環状痕	硬	N4/0 (灰色) N5/0 (灰色) 10YR/1 (灰白色)	15%	136 (306群)
190	第72区 ——	*	瓦器 瓶	底径 6.0 残高 1.25	高台 ココナテ 内面 ヘラ2部キ	硬	N3/0 (暗灰色) 2.5Y3/1 (黄褐色) 10YR/1 (灰白色)	25%	100 (306群)
191	第72区 図版30上	*	白磁 皿	口径 11.7 残高 2.5	口縁付蓋 口先 内外面 柄	硬	5YR7/1 (灰白色) 5R36(錆色)7.5YR/1(黄褐色) 10YR/1 (灰白色)	5%	175 (306群)
192	第72区 図版30下	*	白磁 皿	底径 6.3 残高 2.2	内面 柄	硬	7.5Y7/2 (灰白色) 7.5Y8/1 (灰白色) 10YR/1 (灰白色)	5%	172 (306群)
193	第72区 図版31上	■b・ ■c群	瓦器 瓶	口径 15.2 残高 4.7	口縁付蓋 ココナテ 外面 二翼ナテ 内面 帯紋	中	N4/0(7.6) (灰色) N4/0(6.6) 5Y7/3(淡黄色) 5Y7/3/1 (淡黄色)	20%	125 (306群)

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表(11)

番号	種別 採取	遺物 位置	器種	寸法 口径φ 高さ	説明	地産	色調 内面 外面	残存率	備考
194	第73回 採取27	東b・ 墓中層	瓦器 甕	口径 12.2 残高 3.15	口縁付足 ココナテ 体部外面 ナテ及び 胎線なし 内面 胎紋	中	S3 0 (灰白色) 7.37 (100%)S3 0(灰白色) 2.5GYS 1 (灰白色)	70%	119 (30・36 併)
195	第73回 採取27	*	瓦器 甕	口径 11.2 残高 2.2	口縁付足 ココナテ	礎	S6 0 (灰色) S6 6 (灰白色)	15%	113 (30・36 併)
196	第73回 採取31上	*	瓦器 甕	口径 4.8 残高 2.1	高台 ココナテ 外面 ナテ 内面ナテの長 縁方向のヘラミガキ 胎紋	中	S1 0 (灰色) S2 0 (暗灰色) 10YR 3 (灰白色)	25%	103 (30・36 併)
197	第73回 採取27	*	瓦器 甕	口径 11.1 残高 2.2	外面 胎線なし 内面 ヘラミガキ 及び胎紋		S1 0 (灰色) S2 0 (暗灰色) S8 0 (灰白色)	20%	097 (30・36 併)
198	第73回 ---	*	瓦器 甕	口径 5.15 残高 1.3	外面 胎線なし	中	S3R 1 (灰白色) S3R 1 (灰白色) S3R 1 (灰白色)	20%	117 (30・36 併)
199	第73回 採取31上	*	瓦器 甕	口径 3.2 残高 0.5	外面 ココナテ 内面 ナテ	礎	S1 0 (灰色) S1 0 (灰色) 10YR 1 (灰白色)	5%	253 (30・36 併)
200	第73回 採取31下	*	土師質土器 甕	口径 27.6 残高 4.8		中	2.5YR 1 (淡赤色) 10YR 7.3 (2.5YR 赤褐色) 5YR6 6 (赤色)	15%	121 (30・36 併)
201	第73回 採取31上	*	瓦器 甕	口径 8.9 残高 1.85	口縁付足 ココナテ 胎線 ナテ	礎	S7 0 (灰白色) S7 0 (灰白色) S8 0 (灰白色)	30%	101 (30・36 併)
202	第73回 採取31上	*	瓦器 甕	口径 7.6 残高 1.1	口縁付足 ココナテ 胎線 ナテ	中	S6 0 (灰色) S5 0 (灰色) S7 0 (灰白色)	20%	109 (30・36 併)
203	第73回 採取31上	*	瓦器 甕	口径 7.8 残高 1.2	口縁付足 ココナテ 体部外面 ナテ 内面胎線の高調整不明	中	S5 0 (灰色) S3 0 (暗灰色) 2.5YR 9 (灰白色)	25%	116 (30・36 併)
204	第73回 採取31下	*	土師質土器 甕	口径 8.2 残高 1.4	口縁付足 ココナテ 体部外面 胎線なし 体部内面 ナテ	礎	2.5YR 3 (淡赤色) 2.5YR 3 (淡赤色) 2.5YR 3 (淡赤色)	30%	102 (30・36 併)
205	第73回 ---	*	瓦器 甕	口径 9.9 残高 1.2		礎	S7 0 (灰白色) S6 0 (灰色) 10YR 1 (灰白色)	10%	190 (30・36 併)
206	第73回 採取31上	*	瓦器 甕	口径 2.9 残高 1.4	体部外面 胎線なし	礎	7.5YR 1 (黄褐色) 10YR 1 (灰白色)	60%	111 (30・36 併)
207	第73回 採取31下	*	土師質土器 甕	口径 9.6 残高 2.9	胎線 ナテ 胎線	礎	S6 0 (灰白色) S7 0 (灰白色) S8 0 (灰白色)	5%	125 (30・36 併)
208	第73回 ---	*	白磁 甕	口径 14.25 残高 4.4		礎	7.5YR 1 (黄褐色) 7.5YR 1 (黄褐色) N8 2/4 (灰白色)	15%	129 (30・36 併)
209	第73回 採取36上	*	白磁 甕	口径 12.2 残高 3.1	口縁付足 口先 体部外面 胎線なし	礎	S7 0 (灰白色) 2.5GY 1 (明セリア色) S8 0 (灰白色)	10%	102 (30・36 併)
210	第73回 ---	*	白磁 甕	口径 14.2 残高 2.9	口縁付足 口先 胎線 胎線なし	礎	7.5YR 1 (灰白色) 2.5YR 1 (灰白色) 10YR 1 (灰白色)	10%	114 (30・36 併)
211	第73回 採取36上	*	白磁 甕	口径 15.2 残高 2.75	胎線 胎線	礎	2.5YR 1 (灰白色) 2.5YR 1 (灰白色) 7.5YR 1 (灰白色)	10%	100 (30・36 併)
212	第73回 採取30下	*	白磁 甕	口径 4.9 残高 3.1	体部内面 胎 線なし 胎線	礎	S8 0 (灰白色) S8 0 (灰白色) S8 0 (灰白色)	20%	098 (30・36 併)

表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (12)

番号	採掘 図版	遺物 位置	器種	寸法等 (測定値)	特徴	地産	内面 色 (内面) 外面 色 (外面) 底面 色 (底面)	残存率	備考
213	第74図 —	墓中・ 墓外	白磁 碗		片切りほり文様 1段付蓋付く福入り		10YR8.5(灰白色)でツヤの ない漆で塗りかかす	10%	209 (30・34層)
214	第73図 図版35上	*	白磁的部 碗	口径 8.35 底高 2.5	外周部同様にナデ彫刻 底面内面ナデ、唇部一部に 彫 高台 ココナテ	硬	S6.0 (灰白色) S8.0 (灰白色) N7.0 (灰白色)	10%	180 (30・34層)
215	第73図 同版35上	*	白磁 皿	口径 8.8 底高 1.5	1段付蓋 口先 唇部 彫	硬	7.5YR2 (灰白色) 7.5YR1 (灰白色)	10%	166 (30・34層)
216	第74図 同版35上	*	白磁 杯身	口径 5.0 底高 1.05	底面 染切り長ナデ 内面 外面 彫	硬	7.5GY8.1 (明緑灰色) 7.5GY8.1 (明緑灰色) 7.5YR1 (灰白色)	15%	167 (30・34層)
217	第74図 —	墓中1層	瓦器 碗	口径 15.1 器高 3.35	1段付蓋 ココナテ 内外面 不明	硬	S3.0 (緑灰色) N3.0 (緑灰色) 7.5YR1 (灰白色)	10%	051 (30層)
218	第74図 —	*	瓦器 碗	口径 4.8 底高 1.9	高台 ココナテ 内面 ヘラミヤキ	硬	N6.0 (灰色) N1.0 (灰色) 10YR1 (灰白色)	25%	236 (30層)
219	第74図 —	*	瓦器 碗	口径 8.7 器高 1.85	1段付蓋 ナデ 唇部外面 指節圧痕	硬	7.5YR1 (灰白色) 10YR1 (灰白色) 10YR1 (灰白色)	20%	029 (30層)
220	第74図 —	*	瓦器 碗	口径 11.1 器高 2.35	1段付蓋 ココナテ 内外面ともナデ	硬	10Y7.1 (灰白色) 10Y7.1 (灰白色) 7.5GY8.1 (灰白色)	5%	048 (30層)
221	第74図 同版27	*	瓦器 小皿	口径 7.2 器高 1.3	1段付蓋 ココナテ 唇部外面 指節圧痕 内面 ナデ	硬	10YR5.2 (黄褐色) 10YR5.1 (緑灰色) 7.5YR5.0 (黄褐色)	40%	030 (30層)
222	第74図 —	*	瓦器 皿	口径 8 器高 1.2	1段付蓋 ココナテ 唇部外面 指節圧痕 内面 ナデ	硬	10YR1 (灰白色) 10YR1 (灰白色) 7.5YR1 (灰白色)	5%	214 (30層)
223	第74図 —	*	瓦器 皿	口径 8.8 器高 1.85	1段付蓋 ココナテ 唇部外面 指節圧痕 内面 ヘラミヤキ	硬	N1.0 (灰色) N4.0 (灰色) 10YR1 (灰白色)	20%	040 (30層)
224	第74図 —	*	瓦器 皿	口径 9 器高 1.25	1段付蓋 ココナテ 唇部外面 指節圧痕	硬	5Y7.2 (灰白色) 10Y7.1 (灰白色) 10Y7.1 (灰白色)	25%	054 (30層)
225	第74図 —	*	土質質土器 小皿	口径 7.2 器高 1.5		硬	2.5Y6.2 (黄褐色) 10YR7.2 (黄褐色) 10YR6.2 (黄褐色)	25%	053 (30層)
226	第74図 同版27	*	土質質土器 皿	口径 9 器高 1.7	1段付蓋 ココナテ 唇部外面 指節圧痕 内面 ナデ	硬	2.5YR2 (黄褐色) 2.5YR4 (黄褐色) ?	20%	232 (30層)
227	第74図 同版27	*	土質質土器 小皿	口径 11.6 器高 2.15	1段付蓋 ココナテ 唇部外面 指節圧痕 内面 ナデ	硬	10YR6.2 (灰白色) 7.5YR6.2 (灰白色) 7.5YR6.2 (灰白色)	20%	333 (30層)
228	第74図 —	*	灰土器 杯身	口径 13.0 器高 3.3	1段付蓋 口先 外面 ナデ	硬	N6.0 (灰色) S6.0色(3YR5.0に相当) N8.0 (灰白色)		132 (30層)
229	第74図 同版33下	*	灰土器土器 鉢	口径 26.4 器高 2.35	内外面 ナデ	硬	N7.0 (灰白色) N6.0 (灰色) N7.0 (灰白色)	5%	038 (30層)
230	第74図 同版36上	*	白磁 碗	口径 15.1 器高 2.15	内外面とも彫	硬	7.5GY8.1 (明緑灰色) 7.5GY8.1 (明緑灰色) 7.5YR1 (灰白色)	15%	171 (30層)
231	第74図 同版37	*	青磁 皿	口径 13 器高 3.2	内外面とも彫	硬	7.5GY5.1 (緑灰色) 7.5GY5.1 (緑灰色) N6.0 (灰白色)	5%	135 (30層)

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (13)

番号	種別	遺構位	器種	寸法(口径・高さ)	調査	構成	色調	内面(内面)	外面(外面)	残存率	備考
232	第74層 -----	重土	孤立器 類	口径 20.2 器高 4.4		硬	N8/0 N5/0 N8/0	(灰白色) (灰色) (灰白色)		5%	032 (3b層)
233	第75層 採取37F	2区 B+別	片輪 埴	口径 12.3 器高 3.3		硬	7.5YR/2 7.5YR/2 7.5YR/1	(灰白色) (灰白色) (灰白色)		10%	153 (2b層)
234	第75層 -----	*	白輪 埴	口径 8.7 器高 2.95		硬	N8/0 N8/0 10YR/1	(灰白色) (灰白色) (灰白色)		10%	173 (2b層)
235	第75層 採取32F	*	瓦器土器 類	口径 30 器高 6.2		硬	10YR6/4 N5/0 10YR/1	(にがい黄褐色) (灰色) (灰白色)		5%	022 (2b層)
236	第75層 採取37F	*	古輪 埴	口径 5.1 器高 2		硬	5Y7/2 5Y7/2 2.5YR7/4	(淡黄赤色) (淡黄赤色) (淡黄褐色)		10%	131 (2b層)
237	第75層 採取32F	*	福部 波舟埴埴	口径 4.2 器高 2.0		硬	2.50Y7/1 2.50Y7/1 10YR/1	(薄オリーブ灰色) (薄オリーブ灰色) (灰白色)		10%	154 (2b層)
238	第76層 採取35F	3区 B別	片輪 埴	口径 12.4 器高 3.5		硬	10G7/1 10G7/1 N8/0	(暗緑灰色) (暗緑灰色) (灰白色)		5%	205 (2b層)
239	第76層 採取36上	*	白輪 分付小皿	口径 3 器高 1.05		硬	2.5YR/2 7.5YR/2 7.5YR/2	(灰白色) (灰白色) (灰白色)		5%	129 (2b層)
240	第76層 -----	*	白輪 厚反皿	口径 6.5 器高 1.4		硬	7.5YR/1 7.5YR/1 7.5YR/2	(灰白色) (灰白色) (灰白色)		5%	108 (2b層)
241	第76層 -----	*	瓦器 類	口径 12.1 器高 1.25		硬	N7/0 N5/0 N7/0	(灰白色) (灰色) (灰白色)		10%	243 (2b層)
242	第76層 -----	*	瓦器 類	口径 4.6 器高 2		中	N5/0 N3/0 N8/0	(灰色) (暗褐色) (灰白色)		10%	147 (2b層)
243	第76層 -----	*	瓦器 類	口径 4.7 器高 1.45		中	N6/0 N7/0 N8/0	(灰色) (灰白色) (灰色)		10%	142 (2b層)
244	第76層 -----	*	瓦器 小皿	口径 8.2 器高 1.4		中	N6/0 N5/0 2.50YR/1	(灰色) (灰色) (灰白色)		20%	140 (2b層)
245	第76層 -----	*	瓦器 小皿	口径 9.7 器高 1.7		中	N5/0 N3/0 N8/0	(灰色) (暗灰色) (灰白色)		10%	145 (2b層)
246	第76層 採取35上	*	灰陶器 埴	口径 8.6 器高 1.8		硬	2.50Y2/1 7.5YR/1 7.5YR/1	(薄オリーブ灰色) (灰白色) (灰白色)		5%	148 (2b層)
247	第77層 採取37F	1区	付輪埴	口径 7.2 器高 2.7		硬	2.5Y7/3 2.5Y7/2 2.5Y7/2	(淡黄赤色) (淡黄赤色) (淡黄赤色)		30%	037
248	第77層 採取36下	*	白輪 埴	口径 6 器高 1.4		硬	2.50YR/1 5YR/2 10YR/1	(灰白色) (灰白色) (灰白色)		30%	036
249	第78層 採取28F	2011-OX	瓦器 類	口径 12.4 器高 1.4		硬	N5/0 N5/0 10Y7/1	(灰色) (灰色) (灰白色)		5%	252
250	第78層 採取28	*	須恵瓦土器 類	口径 21 器高 1.63		硬	N7/0 N7/0 N7/0	(灰白色) (灰白色) (灰白色)		10%	063

別表 1 二俣池北遺跡 出土土器觀察表 (14)

番号	種類	発見位置	器種	口径・底径・高さ (単位:cm)	調整	焼成	色: 調 (内面・外面・断面)	残存率	備考
251	高78cm 深腹罐	3019-OX	瓦器 甕	口径 4.1 底径 1.3	外底 十字	焼	S6 0 (灰色) S5 0 (灰色) S8 0 (灰白色)	10%	262
252	深74cm 深腹罐	*	瓦器 甕	口径 11.6 底径 3.1		焼	S7 0 (灰白色) 10Y5.1 (灰色) N8 0 (灰白色)	5%	267

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (15)

番号	採掘期	遺構位置	器種	寸法(最大値)	調査	状況	色調 (内面・外面)	残存率	備考
258	第88期 調査68	4150-0D	瓶芯部 坏蓋	口径(11.8) 器高(3.4)	コタロナテ 器部付着に剥離ヘラタズリ	焼	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰白色)	10%	0877-1
259	第88期 調査68	*	瓶芯部 坏蓋	口径 12.8 器高 3.2	コタロナテ 器部付着に剥離ヘラタズリ	焼	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	40%	0008-2
260	第88期 調査68	*	瓶芯部 高杯	口径 12.7 器高 8.9 底径 10.2	コタロナテ 器部付着に剥離ヘラタズリ 輪部結合後コタロナテ	中	S9C/1 (青灰色) S9G/1 (青灰色)	50%	0008-1
261	第88期 調査68	*	瓶芯部 壺	口径(18.8)	丸紐付通 コタロナテ	焼	S7B/2 (灰白色) S77/2 (灰白色)	5%	1020-1
262	第88期 調査68	*	土師器 壺	口径(29.2)	焼裂のため調査不明	焼	10Y83/1 (灰白色) 10Y82/1 (灰白色) 2.5Y87/4 (赤褐色)	5% 以下	0007-1
263	第91期 調査68	4150-0D	瓶芯部 坏蓋	口径(12.8) 器高(3.4)	コタロナテ	中	10B6/1 (青灰色) 10B6/1 (青灰色) 10Y8/1 (灰白色)	30%	4031-1
264	第91期 調査68	*	瓶芯部 坏蓋	口径 12.9 器高 2.7	コタロナテ 剥離ヘラタズリ・焼調整?	焼	S97/1 (明青灰色) S97/1 (明青灰色)	55%	4045-1
265	第91期 調査68	*	瓶芯部 坏身	口径(11.4)	コタロナテ 器部に強い剥離ヘラタズリ	焼	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) N5/0 (灰色)	10%	0883-2
266	第91期 調査68	*	瓶芯部 坏身	口径(11.5)	コタロナテ	焼	S6D7/1 (明青灰色) S96/1 (青灰色) S96/1 (青灰色)	10%	4032-1
267	第91期	*	土師器 壺	口径(16.7) 器高(13.2) 体径径13.2	外面ハケメ 内面は目め方向ヘラタズリ	焼	2.5Y86/8 (棕色) 7.5Y87/4 (Lに多い褐色)	50%	0029-1
268	第91期	*	土師器 壺	口径(9.4)	器部以上はヨコナテ 器部外面目め方向ハケメ	焼	2.5Y8/1 (灰白) 2.5Y8/2 (灰白) 2.5Y8/2 (灰白)	5%	0880-1
269	第91期	*	土師器 壺	口径(20.8)	器部以上はヨコナテ 器部は外面と内面上下にハケメ、内面下半ヘラタズリ	焼	S7B7/4 (Lに多い褐色) 10Y93/4 (褐色) 5Y85/8 (明赤褐色)	5%	0030-1
270	第91期	*	土師器 高杯	口径(21.4)	器部ヨコナテ 内面は焼裂のため調査不明	焼	7.5Y87/6 (棕色) 10Y98/2 (赤褐色) 7.5Y87/6 (棕色)	5% 以下	1032-2
271	第91期 調査68	*	土師器 壺	口径(16.4) 器高(22.1)	丸紐付通ヨコナテ 外面は焼裂のため調査不明 内面は縦方向のナテ	焼	10Y89/2 (灰白色) 10Y89/2 (灰白色)	20%	0885-1
272	第93期 調査68	5100-0D	瓶芯部 坏蓋	口径(11.9) 器高 3.5	コタロナテ 器部外面剥離ヘラタズリ	焼	S9D6/1 (青灰色) 10B6/1 (青灰色) 10B6/1 (青灰色)	50%	2016-1
273	第93期	*	瓶芯部 坏身	口径(11.1) 器高(3.3)	コタロナテ 器部外面剥離ヘラタズリ	焼	N8/0 (灰白色) N8/0 (灰白色) N8/0 (灰白色)	10%	3016-1
274	第93期 調査68	*	土師器 壺	口径(12.0) 体径径 12.9	焼裂・調整のため調査不明	焼	S7B4/4 (Lに多い赤褐色) S7B4/6 (赤褐色) S7B6/6 (棕色)	5%	3430-1
275	第93期 調査68	*	土師器 壺	口径(12.4) 器高径(15.2)	丸紐付通ヨコナテ 外面は焼裂のため調査不明 内面はナテ	焼	7.5Y86/6 (棕色) 7.5Y85/4 (Lに多い褐色) S7B4/6 (赤褐色)	10%	3434-1
276	第95期	5100-0D	瓶芯部 坏蓋	口径(12.8)	コタロナテ	焼	S9G/1 (青灰色) 10B6/1 (青灰色) S9G/1 (青灰色)	5%	2719-1

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (16)

番号	採掘区画	遺構位置	器種	計測値cm (測定値)	調査態	地蔵	内面 色調(内面)	外面 色調(外面)	残存率	備考
277	第95区 調査69	5300-OD	須恵器 坏身	口径(17.80) 器高(3.90)	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ・ 無蓋性。内面1方向ナデ	横	N8/0 (灰色) 10R65/1 (青灰色) 5YR6/1 (青灰色)		50%	2054-1
278	第95区	*	須恵器 坏身	口径(17.30)	ロクロナデ	横	N8/0 (灰白色) N5/0 (灰色) 7.5R5/2 (灰青色)		10%	2054-2
279	第95区 調査69	*	土師器 甗	口径(15.0)	内外面ヘラケ 口縁付底ヨコナデ	横	7.5YR5/2 (灰白色) 7.5YR7/6 (褐色) 7.5YR7/6 (褐色)		15%	2478-1
280	第95区	*	土師器 甗	口径(22.0)	器蓋以上ヨコナデ 底部外面に須恵器の底ヘラケ	中	10YR6/5 (褐色) 10YR6/5 (褐色) 5YR5/8 (明赤褐色)		5% 以下	2253-1
281	第97区	5450-OD	須恵器 坏身	口径(11.7)	ロクロナデ	横	5R6/7 (明青灰色) 5R6/7 (明青灰色) 5R6/7 (明青灰色)		5%	2371-1
282	第97区 調査69	*	須恵器 坏身	口径(10.30) 器高(3.4)	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	横	5R6/7 (明青灰色) 5R7/1 (明青灰色) 10R65/1 (青灰色)		35%	2283-2
283	第97区 調査69	*	須恵器 坏身	口径(13.30) 器高(3.2)	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	横	5YR/1 (灰白色) 2.5Y7/4 (淡青色) 7.5Y7/1 (灰白色)		25%	2283-1
284	第95区 調査69	5300-OD	須恵器 坏身	口径(13.0) 器高(4.2)	ロクロナデ 底部付底に回転ヘラケズリ	横	N6/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5YR7/1 (明褐色)		70%	2058-1
285	第99区	*	須恵器 坏身	口径(13.4) 器高(4.0)	ロクロナデ 回転ヘラケ切り。一部に 回転ヘラケズリ	横	N8/0 (灰白色) N8/0 (灰白色) N8/0 (灰白色)		20%	2506-1
286	第99区	*	須恵器 坏身	口径(13.1) 器高(3.7)	ロクロナデ	横	N6/0 (灰色) N5/0 (灰色) N8/0 (灰白色)		15%	2040-1
287	第99区	*	須恵器 坏身	口径(12.3) 器高(3.0)	ロクロナデ	横	5R6/1 (青灰色) 5R6/1 (暗青灰色) 5R6/1 (青灰色)		15%	2501-1
288	第99区 調査69	*	須恵器 坏身	口径(11.2) 器高(4.2)	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	横	2.5Y6/2 (黄褐色) 5R65/1 (青灰色) 5YR5/1 (青灰色)		15%	2051-1
289	第99区	*	須恵器 坏身	口径(10.8) 器高(3.6)	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	横	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)		10%	2506-1
290	第99区	*	須恵器 坏身	口径(10.9)	ロクロナデ	横	10Y7/1 (灰白色) 10Y7/1 (灰白色) 10Y7/1 (灰白色)		5%	2501-1
291	第99区	*	須恵器 坏身	口径(10.6)	ロクロナデ	横	10R65/1 (青灰色) 10R65/1 (青灰色) 10R65/1 (青灰色)		5% 以下	2050-2
292	第99区	*	土師器 甗	口径(19.3)	器蓋以上ヨコナデ	横	10YR5/2 (にぶい黄褐色) 10YR5/2 (灰白色) 5YR6/6 (褐色)		5% 以下	2054-1
293	第99区 調査69	*	土師器 甗		ナデ 底部外面に須恵器の 底ヨコナデ付底 尖口器蓋面にヘラケ	横	7.5YR6/4 (にぶい褐色) 7.5YR6/6 (褐色) 7.5YR7/2 (明褐色)		5% 以下	2531-2
294	第100区	5300-OD	須恵器 坏身	口径(11.0)	ロクロナデ	横	10R65/1 (青灰色) 5R65/1 (青灰色) 5R65/1 (青灰色)		5% 以下	2231-1
295	第100区	*	須恵器 甗	口径(7.0)	ロクロナデ	横	N7/0 (灰白色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)		5% 以下	2330-1

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (17)

番号	群 団 名 図 番	遺 物 種 別	器 種	寸 法 (高 度)	具 体 説 明	地 産	色 調 (内 面) (外 面) (断 面)	残 存 率	備 考
286	第103回 図版70	5380-0D	瓶志器 杯蓋	11径 11.8 器高 4.5	ロクロナデ 底部付近に同軸ヘラナズリ	硬	S5/0 (灰色) 7.5B/1 (灰色)	80%	2809-1
287	第103回 図版70	*	瓶志器 杯身	11径 10.8 器高 4.6 底径 5.8	ロクロナデ 底部外周に同軸ヘラナズリ 底部内面に一方向ナデ	硬	N8/0 (灰白色) S7/0 (灰白色) S7/0 (灰白色)	50%	2815-1
288	第103回 図版70	*	瓶志器 杯身	11径 11.8 器高 5.9	ロクロナデ 底部外周に同軸ヘラナズリ 内面中央に一方向ナデ	硬	S6/0 (灰色) S6/0 (灰色)	95%	2899-1
289	第103回 図版79	*	瓶志器 高杯	11径(12.2) 器高(7.7) 底径 8.2	ロクロナデ 外周外周面に同軸ヘラナズリ 底部内面に一方向ナデ	硬	N6/0 (灰色) N5/0 (灰色) N5/0 (灰色)	30%	3251-1
290	第105回 図版79	3400-0D	瓶志器 杯身	11径(11.5) 器高(4.1)	ロクロナデ 底部外周に同軸ヘラナズリ	硬	S6/0/1 (青灰色) 10B/6/1 (青灰色) 5B/6/1 (青灰色)	10%	2285-2
291	第105回 ---	*	瓶志器 蓋	外径(9.4)	ロクロナデ 底部外周に同軸ヘラナズリ ロクロナデ	硬	S6/0 (灰色) S6/1 (黄褐色) S1/0 (灰色)	5% 以下	3337-1 孔は毎式 無縁列立文
292	第105回 ---	*	瓶志器 蓋	11径(12.0)	ロクロナデ	硬	N6/0 (灰色) S6/1 (青灰色) 7.5B/1 (黄褐色)	5% 以下	2285-1
293	第109回 図版70	3270-0B	瓶志器 杯身	11径(12.0) 器高(3.5)	ロクロナデ 底部外周に同軸ヘラナズリ	硬	S10/1 (青灰色) S10/1 (青灰色) N7/0 (灰白色)	80%	2501-1
294	第112回 ---	5430-0B	瓶志器 杯蓋	11径(13.4) 器高(3.4)	ロクロナデ 底部付近に同軸ヘラナズリ	中	S5/0 (灰色) 7.5A7/1 (灰白色) 10G7/1 (黄褐色)	10%	3275-1
295	第112回 ---	*	瓶志器 杯	11径(10.5)	ロクロナデ	硬	S8/0 (灰白色) S7/1 (灰白色) S8/0 (灰白色)	5% 以下	2286-1
296	第112回 ---	*	瓶志器 蓋(輪文)	底径(13.2)	ロクロナデ	硬	S8/1 (青灰色) N7/0 (灰白色) 10Y3/1 (オリーブ茶色)	5% 以下	3271-1 一方通し
297	第117回 ---	5470-0B	瓶志器 杯身	11径(10.6)	ロクロナデ	硬	10B/7/1 (黄褐色) S10/1 (青灰色) 10B/7/1 (黄褐色)	5%	2877-1
298	第120回 ---	1500-0B	瓶志器 杯身	11径(12.4)	ロクロナデ	硬	S17/1 (黄褐色) S16/1 (青灰色) S16/1 (黄褐色)	5%	2509-1
299	第120回 図版79	*	瓶志器 杯身	11径(12.0)	ロクロナデ	硬	N8/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N8/0 (灰白色)	5%	3414-1
300	第120回 ---	*	瓶志器 杯身	11径(11.4)	ロクロナデ	硬	10B/5/1 (青灰色) S16/1 (青褐色) 10B/5/1 (青灰色)	5%	3413-2
301	第120回 図版70	*	瓶志器 杯身	11径(11.4)	ロクロナデ	硬	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	5%	3413-1
302	第120回 ---	*	瓶志器 杯身	11径(11.5) 器高(3.4)	ロクロナデ 底部外周に同軸ヘラナズリ	硬	S8/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) S6/0 (灰白色)	5%	3106-1
303	第120回 ---	*	瓶志器 杯身	11径(13.4)	ロクロナデ	硬	S17/1 (黄褐色) S16/1 (黄褐色) S16/0 (灰白色)	5%	2462-1
304	第130回 図版70	*	瓶志器 杯蓋	11径(9.3) 器高(2.4)	ロクロナデ 底部付近に同軸ヘラナズリ	硬	N7B/1 (灰白色) S7B/2 (灰白色) S7B/1 (灰色)	10%	2481-1

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (18)

番号	埋蔵 回数	遺構 状況	器種	寸法 cm (推定値)	調査 状況	地蔵	(内面)		残存率	備考
							色	調 (断面)		
315	第129回 埋蔵71	5500-08	須恵器 壺	口径12.91	ロクロナデ	礎	5B4/1 (褐色灰色) N6/0 (灰色) 5B6/1 (古灰色)	5% 以下	2279-1	
316	第129回 埋蔵71	5026-00	須恵器 杯蓋	口径 14.0 器高 4.5	ロクロナデ 底部は回転ヘラ切り後 跡をつけてロクロナデ	礎	5B65/1 (古灰色) 10B65/1 (古灰色)	80%	3011-1	
317	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯蓋	口径 13.8 器高 3.8	ロクロナデ 回転ヘラ切り、一部に回転 ヘラケズリ	礎	5B5/1 (古灰色) 10B64/1 (古灰色)	85%	3073-1	
318	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯蓋	口径 13.0 器高 3.8	ロクロナデ 回転ヘラ切り・無調整	礎	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N5/0 (灰色)	60%	3020-1	
319	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯蓋	口径 13.0 器高 3.7	ロクロナデ 回転ヘラ切り・無調整	礎	2.5Y5/2 (暗灰黄色) 5B63/1 (暗青灰色)	60%	3019-1	
320	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯蓋	口径 19.0 器高 6.9	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラ切り後 手付ヘラケズリ	礎	N6/0 (灰色) N5/0 (灰色) N5/0 (灰色)	60%	3007-1	
321	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径 13.2 器高 3.2	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラ切り、 一部回転ヘラケズリ	礎	7.5Y8/1 (灰白色) 2.5Y8/2 (淡黄色) 2.5Y8/1 (灰白色)	45%	3008-2	
322	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径(13.8) 器高 3.3	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	礎	2.5Y8/1 (灰白色) 2.5Y7/4 (淡黄色) 2.5Y7/4 (淡黄色)	40%	3008-1	
323	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径(12.8) 器高(3.5)	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	礎	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	5%	3025-3	
324	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径(12.6) 器高 3.7	ロクロナデ 回転ヘラ切り、一部に 回転ヘラケズリ	礎	5B66/1 (古灰色) 10B65/1 (古灰色)	35%	3011-1	
325	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径 11.4 器高 3.8	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	礎	7.5Y8/1 (灰色) 10Y8/1 (灰色) 2.5GY4/1 (暗オリーブ灰色)	90%	3014-1	
326	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径 11.3 器高 3.5	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	礎	N5/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) 7.5Y95/2 (褐色)	40%	3021-1	
327	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径(11.9) 器高 3.5	ロクロナデ	礎	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N8/0 (灰白色)	30%	3026-2	
328	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径 12.2 器高 3.9	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	礎	N6/0 (灰色) N5/0 (灰色) N6/0 (灰色)	30%	3022-1	
329	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径(12.5)	ロクロナデ	礎	N6/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N6/0 (灰色)	5%	3008-3	
330	第129回 埋蔵71	*	須恵器 杯身	口径 11.1 器高 3.9	ロクロナデ 底部外面に回転ヘラケズリ	礎	7.5Y7/1 (灰白色) N7/0 (灰色)	100%	3023-1	
331	第129回 埋蔵72	*	須恵器 杯身	口径(11.2) 器高 3.3	ロクロナデ 回転ヘラ切り、一部に 回転ヘラケズリ	礎	N6/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	20%	3010-1	
332	第129回 埋蔵72	*	須恵器 杯身	口径 10.9 器高 3.2	ロクロナデ 回転ヘラ切り・無調整	礎	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) N3/0 (暗灰色)	65%	3026-1	
333	第129回 埋蔵72	*	須恵器 高杯	口径(12.7) 器高(13.9) 底径 13.3	ロクロナデ 底部外面に回転 ヘラケズリ	礎	5B65/1 (古灰色) 10B64/1 (褐色灰色)	75%	3019-1 二方溝1	

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (19)

番号	採掘 図版	遺物 位置	器種	寸法(単位) (規定値)	調査	状況	色調 (内面・外面)	残存率	備考
334	第129回 図版72	5020-00	瓶志部 壺(輪弁)	口径15.1	コクロナテ	焼	N7.0 (灰白色) N4.0 (灰色) N7.0 (灰白色)	20%	2008-5 →方通し
335	第129回 図版72	*	瓶志部 壺	口径11.5 器高15.5 体部径9.2	コクロナテ 底部外面に付ヘラナズリ	焼	N8.0 (灰色) N7.0 (灰白色) N4.0 (灰色)	40%	3025-1
336	第130回 図版73	*	土師器 壺	口径12.30	頸部以上はヨコナテ 体部外面はハラメ、内面の 多くは剥離のため調査不明	焼	5YR2/3 (紅褐色) 5YR7/4 (紅褐色) 5YR5/8 (暗赤褐色)	10%	3009-1
337	第130回 図版72	*	土師器 壺	口径128.2	頸部径以上はヨコナテ 体部外面と内面土部ハラメ	中	2.5Y6/4 (暗黄褐色) 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y6/1 (黄褐色)	5%	3008-4
338	第130回 図版72	*	土師器 壺	口径128.0	頸部以上はヨコナテ 体部内外面ハラメ	焼	10YR8/1 (灰白色) 10YR5/6 (赤褐色) 2.5YR5/8 (暗赤褐色)	10%	3025-2
339	第130回 図版72	*	土師器 壺	口径12.2	外面の頸部以上ヨコナテ 体部外面はハラメ、内面の 内面頸部以上は方向ハラメ	中	5Y7.5/1 (暗褐色) 5YR5/4 (紅褐色) 5YR5/2 (紅褐色)	40%	3012-4
340	第130回 ---	*	土師器 壺	口径12.0	口径のため調査不明 内面は朝→西方向ハラメ	中	10YR5/2 (黄褐色) 5YR5/4 (紅褐色) 5YR5/8 (暗褐色)	5%	3006-6 以下
341	第131回 ---	5037-00	瓶志部 杯蓋	口径12.3 器高3.4	コクロナテ 同輪ヘラ切り、一部に 同輪ヘラナズリ	焼	5P17/1 (明黄褐色) N7.0 (灰白色) N8.0 (灰色)	25%	2763-1
342	第131回 図版75	*	瓶志部 杯蓋	口径11.6 器高2.9	コクロナテ 同輪ヘラ切り、一部に 同輪ヘラナズリ	焼	N7.0 (灰白色) N7.0 (灰白色) N4.0 (灰色)	20%	2829-1
343	第131回 図版75	*	瓶志部 杯蓋	口径10.8 器高4.3	コクロナテ 同輪ヘラ切り、一部に 同輪ヘラナズリ	焼	5B6/1 (青灰色) 5B6/1 (青灰色) 5B6/1 (青灰色)	100%	2855-2
344	第131回 ---	*	瓶志部 杯蓋	口径11.80	コクロナテ	焼	5P16/1 (青灰色) 5P16/1 (青灰色) 5P5/1 (暗褐色)	5%	2765-2
345	第131回 ---	*	瓶志部 壺(輪弁)	口径15.5	コクロナテ	中	N8.0 (灰色) 5B6/1 (青灰色) N8.0 (灰色)	20%	2855-1 →方通し
346	第132回 図版72	5039-00	瓶志部 杯蓋	口径13.2 器高4.4	コクロナテ 同輪ヘラナズリ	焼	N8.0 (灰色) N7.0 (灰白色) N8.0 (灰色)	25%	3420-4 白色輪
347	第132回 図版73	*	瓶志部 杯蓋	口径14.4 器高4.3	コクロナテ 同輪ヘラ切り	中	N6.0 (灰色) N6.0 (灰色) N7.0 (灰白色)	40%	3429-2
348	第133回 図版73	*	瓶志部 杯蓋	口径14.6 器高4.6	コクロナテ、底部付近に 広くキキメ、内面中央に 同心円状で高輪	焼	N8.0 (灰色) 10Y2/1 (灰白色) 5X8.0 (灰白色)	40%	2875-1
349	第133回 図版73	*	瓶志部 杯蓋	口径11.9 器高4.3	コクロナテ 底部外面に同輪ヘラナズリ	焼	N8.0 (灰色) 2.5Y7/1 (黄褐色) N8.0 (灰色)	25%	2875-3
350	第133回 図版73	*	瓶志部 杯蓋	口径12.4 器高4.0	コクロナテ 底部外面に同輪ヘラナズリ	軟	10Y8/1 (灰白色) 10Y8/1 (灰白色) 2.5YR1/1 (灰白色)	30%	3426-5
351	第133回 ---	*	瓶志部 杯蓋	口径13.8 器高(3.8)	コクロナテ 底部外面に同輪ヘラナズリ	中	7.5YR2/2 (灰白色) N8.0 (灰色) 7.5YR1/1 (灰白色)	15%	2875-2
352	第133回 ---	*	瓶志部 杯蓋	口径11.0 器高(4.3)	コクロナテ 底部外面に同輪ヘラナズリ	焼	N8.0 (灰色) N7.0 (灰白色) N8.0 (灰色)	15%	2762-2

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (20)

番号	種別	遺物	品名	計測値 (高さ)	調査	地産	色調 (内面・外面)	残存率	備考
313	第133回 図版73	5039-00	須恵器 杯身	11径112.30 器高 3.7	ロクロナデ 底部外縁に黒転ヘラケズリ	軟	338-1 (灰白色) 1098-1 (灰白色) 1098-1 (灰白色)	20%	3420-2
314	第133回 図版73	*	須恵器 杯身	11径 11.6 器高 3.3	ロクロナデ 黒転ヘラケ切り、一部に 黒転ヘラケズリ	硬	58-0 (灰白色) 55-0 (灰色) 51-0 (灰色)	95%	2919-1
315	第133回 図版73	*	須恵器 高杯	11径 43.1 器高 18.0 施寸 43.8	ロクロナデ、杯部外縁面 → 胸部にカキメ、杯部内 面に同心円状の付具痕	硬	51-0 (灰色) 55-0 (灰色) 36-0 (灰色)	95%	2770-1 三方透し
316	第133回 ——	*	須恵器 高杯	11径 13.8	ロクロナデ	硬	N7-0 (灰白色) N7-0 (灰白色) N7-0 (灰白色)	30%	2767-1 三方透し
317	第133回 図版73	*	須恵器 甕	11径1 3.9 器高119.5 体径60 16.1	ロクロナデ 黒転ヘラケ切り、一部黒転 ヘラケズリ、反対側カキメ	硬	58-0 (灰白色) 1033-2 (マリアン黒色) 7,538-2 (灰色)	60%	3429-1 自然破
318	第133回 図版71	*	須恵器 短頸甕	11径 9.2 器高 12.7 体径1 17.8	ロクロナデ 外面下部下半にカキメ 短頸外縁にナメ	軟	7,537-6 (棕色) 2,337-6 (陶黄褐色) 7,535-6 (灰色)	60%	2768-1
319	第133回 図版71	*	土師器 甕	11径15.2 器高19.9 体径1 17.7	器口以上はロクロナデ 杯部外縁はハケメ	中	7,5387-6 (褐色) 10387-3 (12.5%黄褐色) 7,5387-6 (褐色)	30%	3491-1
320	第133回 図版74	*	土師器 甕	11径 42.5 器高 48.8 体径1 13.1	外面の頸部は土ロクロナデ 杯部外縁は土師器内面にハ ケメ、杯部内面ヘラケズリ	中	7,5389-4 (灰黄褐色) 10387-3 (12.5%黄褐色) 7,5387-6 (棕色)	95%	3407-1
321	第133回 図版71	*	土師器 甕	11径 9.9 器高 27.6 体径1 22.1	11径付近はロクロナデ 外面中央と内面の頸部以上 にハケメ、杯部内面ナメ	中	10387-4 (12.5%黄褐色) 10387-4 (12.5%黄褐色) 7,5385-6 (陶黄色)	80%	3393-1
322	第134回 図版74	*	須恵器 大甕	11径 56.7 器高 71.5 体径1 60.0	器口以上はロクロナデ 杯部外縁に平行な付 内面は同心円状の付具	硬	N7-0 (灰白色) N4-0 (灰色) N7-0 (灰白色)	80%	2780-1
323	第137回 ——	5090-00	須恵器 杯身	11径111.8 器高1 3.51	ロクロナデ	中	N8-0 (灰白色) N2-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	10%	2631-2
324	第137回 ——	*	須恵器 杯身	11径116.5 器高 4.0	ロクロナデ 黒転ヘラケ切り、頸調整	硬	N6-0 (灰色) N7-0 (灰白色) N5-0 (灰色)	20%	2631-1
325	第139回 ——	5239-00	須恵器 杯身	11径114.2 器高1 3.5	資料のための調整不明	軟	N8-0 (灰白色) N8-0 (灰白色) N7-0 (灰白色)	30%	2865-1
326	第141回 図版75	5243-00	須恵器 杯身	11径115.0 器高1 3.2	ロクロナデ 頸部付近に黒転ヘラケズリ	硬	N7-0 (灰白色) N6-0 (灰色) N4-0 (灰色)	45%	2855-1
327	第141回 ——	*	須恵器 杯身	11径113.2 器高1 4.0	ロクロナデ 頸部付近に黒転ヘラケズリ	硬	N6-1 (灰白色) N7-1 (灰白色) N8-1 (灰白色)	30%	2853-1
328	第141回 ——	*	須恵器 杯身	11径114.4 器高1 2.9	ロクロナデ 頸部付近に黒転ヘラケズリ	軟	N8-0 (灰白色) N8-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	20%	2851-2
329	第141回 ——	*	須恵器 杯身	11径111.3	ロクロナデ	硬	N6-0 (灰白色) 7,537-1 (灰白色) N8-0 (灰白色)	5%	2800-1
330	第141回 ——	*	須恵器 甕	11径111.8	ロクロナデ	硬	10673-1 (陶黄褐色) N6-0 (灰色) 7,5384-2 (灰色)	5%	2861-2
331	第142回 ——	5244-00	須恵器 杯身	11径113.7 器高1 3.5	ロクロナデ 頸部付近に黒転ヘラケズリ	硬	N8-0 (灰白色) N7-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	15%	2862-2

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (21)

番号	種別	遺構	器種	寸法(標準)	調査	状態	色調	(内面)	残存率	備考
		単位		(単位)				(外面)		
373	第142区 調査75	5041-00	瓶蓋器 杯蓋	口径 12.4 器高 4.3	ロクロナデ 胴部ヘラツズリ・無調整	破	5Y8/2 5Y8/2 5Y8/2	(灰白色) (灰白色) (灰白色)	50%	2871-1
373	第142区 調査75	*	瓶蓋器 杯蓋	口径(11.0) 器高 3.5	ロクロナデ 胴部外面回転ヘラツズリ	破	N7/0 5P97/1 N7/0	(灰白色) (黄褐色) (灰白色)	25%	2882-1
374	第142区 調査75	*	瓶蓋器 蓋	口径 9.9 器高 15.9 底径 19.7	ロクロナデ 胴部トテは回転ヘラツズリ 底部内外面はナデ	中	N8/0 N8/0 N8/0	(灰白色) (灰白色) (灰白色)	85%	3392-1
375	第144区 調査75	5342-00	瓶蓋器 杯蓋	口径 12.8 器高 3.8	ロクロナデ 胴部付法に回転ヘラツズリ	破	5GY6/1 5B5/1 5B75/1	(オリーブ褐色) (黄褐色) (黄褐色)	70%	2859-1
376	第144区 調査75	*	瓶蓋器 杯蓋	口径 13.6 器高 4.0	ロクロナデ 胴部ヘラツズリ、一部に 回転ヘラツズリ	破	N7/0 N7/0 N7/0	(灰白色) (灰白色) (灰白色)	35%	2881-1
377	第144区 ――	*	瓶蓋器 杯蓋	口径(10.1)	ロクロナデ	破	N7/0 N5/0 N4/0	(灰白色) (灰色) (灰色)	5%	2854-1
378	第144区 ――	*	瓶蓋器 杯蓋	口径(11.1)	ロクロナデ	破	N7/0 N7/0 5Y86/1	(灰白色) (灰白色) (暗灰色)	10%	2854-1
379	第144区 ――	*	瓶蓋器 蓋	口径(10.0)	胴部以上ロクロナデ、外部 外面と平行磨き、内部 内面は同心円状当て貞煎	破	5Y8/1 5Y8/3 5Y8/1	(灰白色) (淡黄色) (灰白色)	5% 以下	2807-1
380	第145区 ――	5341-00	瓶蓋器 杯蓋	口径(14.0) 器高(4.2)	ロクロナデ 胴部付法に回転ヘラツズリ 磨きつけた鬼ロクロナデ	破	N7/0 N7/0 N8/0	(灰白色) (灰白色) (灰白色)	45%	3047-3
381	第145区 ――	*	瓶蓋器 杯蓋	口径(14.0) 器高(4.0)	ロクロナデ	破	N6/0 N5/0 N7/0	(灰色) (灰色) (灰白色)	10%	3047-1
382	第145区 ――	*	瓶蓋器 杯蓋	口径(12.4) 器高(3.0)	ロクロナデ	破	N7/0 N7/0 N8/0	(灰白色) (灰白色) (灰白色)	10%	3047-2
383	第145区 ――	*	瓶蓋器 杯蓋	口径(12.4) 器高(3.4)	ロクロナデ 胴部ヘラツズリ、無調整	破	5P97/1 N6/0 5B95/1	(黄褐色) (灰色) (暗灰色)	15%	3047-1
384	第145区 ――	*	瓶蓋器 杯蓋	口径(12.3)	ロクロナデ	破	5P95/1 N7/0 N8/0	(黄褐色) (灰白色) (灰白色)	10%	2883-1
385	第146区 調査75	5492-00	瓶蓋器 杯蓋	口径 12.1 器高 3.9	ロクロナデ 胴部外面は回転ヘラツズリ	破	N6/0 N7/0 N7/0	(灰白色) (灰白色) (灰白色)	95%	3046-1
386	第147区 調査76	8008-05	瓶蓋器 杯蓋	口径 10.8 器高 3.8	ロクロナデ 胴部付法に回転ヘラツズリ	破	N7/0 N6/0 N5/0	(灰白色) (灰色) (灰色)	95%	0879-1
387	第147区 調査76	*	瓶蓋器 杯蓋	口径 12.9 器高 3.7	ロクロナデ 胴部外面に回転ヘラツズリ	破	N7/0 N7/0	(灰白色) (灰白色)	90%	0509-1
388	第147区 調査76	*	瓶蓋器 杯蓋	口径(10.8) 器高 3.7	ロクロナデ 胴部ヘラツズリ、一部に回転 ヘラツズリ、内外面ナデ	破	5R77/1 5R77/1 5R77/1	(黄褐色) (黄褐色) (黄褐色)	30%	0879-1
389	第147区 調査76	*	瓶蓋器 高杯	口径(14.0) 器高(7.5) 底径(11.3)	ロクロナデ 胴部外面は回転ヘラツズリ 脚部接合後ロクロナデ	破	N7/0 N7/0 5,50Y2/1	(黄褐色) (灰白色) (黄オリーブ褐色)	80%	0879-2 三方に口孔
390	第147区 ――	*	瓶蓋器 蓋	口径(14.0)	ロクロナデ	中	N4/0 N7/0 10R4/1	(灰色) (灰白色) (赤褐色)	5% 以下	0879-3

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (22)

番号	検出 回数	河橋 位置	器種	寸法第① (鑑定用)	調査 箇所	出土 状況	色調 (内面・外面)	残存率	備考
291	第149回 同敷76	1590-OS	瓶蓋部 杯蓋	口径(13.0) 器高 4.0	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	7.5V7-I (灰白色) 5.6-0 (灰色)	25%	891-1
292	第149回 -----	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(11.7) 器高 3.3	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	N7-0 (灰白色) N6-0 (灰色) N8-0 (灰白色)	30%	2885-1
293	第149回 -----	*	瓶蓋部 高杯		ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	10V7-I (灰白色) 7.5V7-I (灰白色) 10V7-I (灰白色)	10%	891-2 三方通し
294	第110回 -----	5027-OS	瓶蓋部 杯蓋	口径(12.2) 器高(4.0)	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	5.6-0 (灰色) 5.5-0 (灰色) 5.4-0 (灰色)	25%	3119-1
295	第150回 同敷76	5170-OS	瓶蓋部 杯蓋	口径 13.0 器高(4.3)	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	5.5-0 (灰色) 5.6-0 (灰色)	25%	2284-5
296	第150回 -----	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(13.0) 器高(3.0)	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	N8-0 (灰白色) N6-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	15%	2283-1
297	第150回 同敷76	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(12.4) 器高 4.0	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	106-I (青灰色) 106-I (青灰色) 103-I (青灰色)	30%	2284-6
298	第150回 同敷76	*	瓶蓋部 杯蓋	口径 12.5 器高 3.8	ワタロナテ	同軸ヘラケズリ、一部に 同軸ヘラケズリ	5.6-0 (灰色) 5.5-0 (灰色)	90%	2284-4
299	第150回 同敷76	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(12.4) 器高 3.6	ワタロナテ	同軸ヘラケズリ、一部に 同軸ヘラケズリ	N7-0 (灰白色) N7-0 (灰白色) N7-0 (灰白色)	10%	2284-2
300	第150回 -----	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(11.5) 器高 3.2	ワタロナテ	同軸ヘラケズリ、一部に 同軸ヘラケズリ	1060-I (青灰色) 1060-I (青灰色) 1030-I (青灰色)	30%	2284-3
301	第150回 -----	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(12.0) 器高(3.8)	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	N7-0 (灰白色) N7-0 (灰白色) N8-0 (灰白色)	15%	2890-1
302	第150回 -----	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(11.4) 器高(3.3)	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	10606-I (青灰色) 1060-I (青灰色) 10606-I (青灰色)	35%	2284-4
303	第150回 -----	*	土師器 壺	口径(22.0)	上部内面に横方向のハケメ 底部外周は縦方向のハケメ	中	10Y80-7 (浅黄褐色) 10Y80-7 (浅黄褐色) 5Y85-8 (棕色)	5%	2283-2
304	第157回 同敷77	3 E 器 類	瓶蓋部 杯蓋	口径(15.2) 器高 4.7	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ、 底部付近は同軸ヘラケズリ	N6-0 (灰色) N7-0 (灰白色) 5.6-0 (灰色)	30%	1689-1
305	第157回 -----	4 E 器 類	瓶蓋部 杯蓋	口径(11.4) 器高(4.4)	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ	10G85-1 (青灰色) 10G85-1 (青灰色) 10G85-1 (青灰色)	10%	0589-1
306	第157回 同敷77	3 E 器 類	瓶蓋部 杯蓋	口径(13.2) 器高 4.1	ワタロナテ	同軸ヘラケズリ、一部に 同軸ヘラケズリ	106-1 (青灰色) 106-1 (青灰色)	40%	1689-2
307	第157回 同敷77	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(12.6) 器高 4.5	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ ヘラケズリ、内面はナテ	N8-0 (灰白色) N7-0 (灰白色) N6-0 (灰色)	25%	2040-3
308	第157回 同敷77	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(12.2) 器高 3.7	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ 内面に一方角ナテ	N7-0 (灰白色) 5.5-0 (灰色)	45%	3116-1
309	第157回 同敷77	*	瓶蓋部 杯蓋	口径(12.8) 器高 3.5	ワタロナテ	底部付近は同軸ヘラケズリ 内面に一方角ナテ	N8-0 (灰白色) N7-0 (灰白色) 7.5V6-I (灰色)	30%	2041-1

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (23)

番号	種別	遺構	器種	寸法 (高さ)	調査	状況	色調 (内面・外面・断面)	残存率	備考
410	第157区 調査77	5区 遺構	須恵器 坏蓋	口径(11.4) 器高 3.4	コクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	埋	7.5YR-1 (灰白色) N5/0 (灰白色) N5/0 (灰白色)	30%	3028-1
411	第157区 -----	*	須恵器 坏蓋	口径(9.6) 器高(3.2)	コクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	埋	N6/0 (灰白色) N5/0 (灰白色) N5/0 (灰白色)	10%	1627-1
412	第157区 調査77	*	須恵器 坏蓋	口径(9.6) 器高(3.3)	コクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	埋	7.5Y7/1 (灰白色) 10R6.5/1 (古灰色) 7.5Y7/4 (灰白色)	25%	1638-1
413	第157区 調査77	*	須恵器 坏身	口径(11.4) 器高(4.2)	コクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	埋	10R6/1 (古灰色) 7.5R6/1 (赤褐色) 7.5R5/2 (赤褐色)	20%	2113-1
414	第157区 調査77	*	須恵器 坏身	口径(12.0) 器高 3.9	コクロナデ 口縁ヘラケ切り、無調整	埋	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N6/0 (灰白色)	25%	1810-1
415	第157区 -----	*	須恵器 坏身	口径(11.0) 器高(3.5)	コクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	埋	10R7/1 (古灰色) 2.5Y8/1 (灰白色) 10R6/1 (古灰色)	20%	3048-5
416	第157区 -----	4区 遺構	須恵器 坏身	口径(12.5) 器高(3.4)	コクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	埋	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	10%	9502-1
417	第157区 -----	*	須恵器 坏身	口径(12.7)	コクロナデ	中	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N6/0 (灰白色)	10%	0751-1
418	第157区 調査77	3区 遺構	須恵器 坏身	口径(11.4) 器高 4.2	コクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ 内面に一方約ナデ	埋	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	25%	1746-1
419	第157区 調査77	*	須恵器 坏身	口径 11.5 器高 3.7	コクロナデ 黒転ヘラケ切り、無調整	埋	10R6/1 (古灰色) 10R6/1 (古灰色) 5R5/1 (赤褐色)	50%	1682-1
420	第157区 調査78	4区 遺構	須恵器 坏身	口径 11.5 器高(3.8)	コクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	埋	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	30%	0563-1
421	第157区 -----	*	須恵器 坏身	口径(10.6)	コクロナデ	埋	N7/0 (灰白色) 10Y4/1 (灰白色) N7/0 (灰白色)	5%	0657-1
422	第157区 -----	*	須恵器 坏身	口径(11.2) 器高(3.7)	コクロナデ 底部外面に黒転ヘラケズリ	埋	N8/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) 7.5YR5/1 (赤褐色)	40%	0755-1
423	第157区 調査78	*	須恵器 坏身	口径(13.0) 器高(4.0) 底径(9.2)	コクロナデ 底部は黒転ヘラケ切りのち 高台をつけてコクロナデ	埋	N6/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N6/0 (灰白色)	45%	0565-1
424	第157区 -----	5区 遺構	須恵器 高坏	口径(13.4) 器高(13.3) 底径(13.4)	コクロナデ 外部外面に黒転ヘラケズリ 底部都合合、コクロナデ	埋	N6/0 (灰白色) 7.5Y3/2 (キーツ着色) N6/0 (灰白色)	30%	1692-1 二方成し
425	第157区 調査77	*	須恵器 高坏	口径 12.6 器高 18.9 底径 14.9	コクロナデ 外部外面に黒転ヘラケズリ 底部都合合、コクロナデ	埋	7.8Y7/1 (灰白色) 7.5Y8/1 (灰白色) 7.5Y7/1 (灰白色)	70%	1671-1 三方成し
426	第157区 -----	*	須恵器 瓶	口径(5.8)	コクロナデ	埋	7.5Y6/1 (灰白色) N7/0 (灰白色) 7.5Y7/1 (灰白色)	5%	1798-1
427	第157区 調査78	*	須恵器 壺	口径(18.4)	須恵器にコクロナデ 底部外面は平打さの ちききメ	吹	2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y7/4 (赤褐色) 2.5Y7/4 (赤褐色)	5%	2048-2
428	第157区 -----	4区 遺構	須恵器 壺	口径(19.4)	コクロナデ	埋	N5/0 (灰白色) N5/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	5%	0693-1

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (24)

番号	発掘区画	遺構位置	器種	計測箇所 (測定値)	調査箇所	検成	色調 (内面・外面・断面)	残存率	備考
420	第159区画	4区 墓群	瓦器 椀	口径(15.0) 器高(5.2) 底径(4.9)	二俣付近はココナデ。外面は母さへウケズリの後ヘラミダネ。内面にヘラミダネ	埋	N2/0 (暗灰色) N3/0 (暗灰色) N8/0 (灰白色)	15%	0816-1
430	第159区画	*	瓦器 椀	口径(14.8) 器高(5.3)	内外面ヘラミダネ	埋	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	10%	0500-1
431	第159区画	*	瓦器 椀	口径(13.0) 器高(5.3)	口縁部ココナデ 内外面ヘラミダネ	中	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	20%	0501-1
432	第159区画	5区 墓群	瓦器 皿	口径(9.0) 器高(4.4)	口縁部ココナデ 外面に指溝痕 内面にヘラミダネ	埋	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N6/0 (灰色)	25%	1750-1
433	第159区画	4区 墓群	瓦器 鉢	口径(8.8) 器高(2.8)	口縁部ココナデ 外面に指溝痕 内面にヘラミダネ	中	N5/0 (灰色) N4/0 (灰色)	25%	0501-1
434	第159区画	*	瓦器 皿	口径(9.3) 器高(2.2)	口縁部ココナデ 外面にナデ 内面にヘラミダネ	中	N4/0 (灰色) N1.5/0 (暗色)	85%	0643-2
435	第159区画	5区 墓群	瓦器 椀	口径(8.2) 器高(1.6)	口縁部ココナデ 外面に指溝痕 内面に指溝痕のため調整不明	中	N2/0 (暗色) N2/0 (暗色) 2.5YR7/1 (灰白色)	75%	1648-2
436	第159区画	4区 墓群	瓦器 皿	口径(8.0) 器高(1.1)	口縁部ココナデ 外面に指溝痕 内面に指溝痕のため調整不明	中	N2/0 (暗色) N4/0 (灰色) 10YR7/1 (灰白色)	25%	0702-1
437	第159区画	*	瓦器 皿	口径(7.8) 器高(1.3)	口縁部ココナデ 外面にナデ 内面に指溝痕のため調整不明	中	N3/0 (暗灰色) N4/0 (灰色) 10YR7/1 (灰白色)	30%	0501-1
438	第159区画	*	土師器土器 皿	口径(8.9) 器高(1.3)	口縁部ココナデ	中	2.5YR2/1 (淡黄色) 2.5YR4/1 (淡黄色) 7.5YR7/6 (棕色)	45%	0511-1
439	第159区画	5区 墓群	土師器土器 皿	口径(6.8) 器高(1.6)	口縁部ココナデ 内外面にナデ	中	2.5Y7/1 (灰白色) 5YR4/1 (灰白色) 2.5YR6/8 (棕色)	90%	1050-1
440	第159区画	4区 墓群	土師器土器 皿	口径(24.0)	外面部ココナデ 内面にナデ	埋	2.5Y7/4 (灰黄色) 5YR6/6 (棕色) 5YR4/6 (赤褐色)	5% 以下	0753-1
441	第159区画	*	青磁 皿	口径(10.2) 器高(2.5) 底径(3.4)	ロクロナデ	埋	10YR7/2 (オリーブ灰色) 10Y5/2 (オリーブ灰色) N8/0 (灰白色)	30%	0742-1 模範花文
442	第160区画	5区 墓群	磁器類 杯	口径(11.8) 器高(3.7)	ロクロナデ 口縁へラミダネ。一部に指溝 ヘラミダネ。内面にナデ	埋	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) 2.5YR2/4 (暗赤褐色)	45%	1301-1
443	第160区画	4区 墓群	磁器類 杯	口径(12.8) 器高(4.0)	ロクロナデ 底縁外面に指溝ヘラミダネ	埋	N7/0 (灰白色) N3/0 (灰白色) N5/0 (灰色)	25%	0197-1
444	第160区画	*	磁器類 壺	口径(23.0)	口縁部以上ロクロナデ 杯部外面に平仕叩き 底部内面に同心円状に指溝	埋	N3/0 (暗灰色) N2/0 (灰色) 7.5R5/1 (赤灰色)	5% 以下	(0256)-1
447	第161区画	5区 墓群	磁器類 杯	口径(12.2) 器高(4.0)	ロクロナデ 口縁付近に指溝ヘラミダネ	埋	N2/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	85%	1400-3
448	第161区画	*	磁器類 杯	口径(12.0) 器高(3.7)	ロクロナデ 口縁付近に指溝ヘラミダネ	埋	N8/0 (灰白色) N4/0 (灰色)	90%	1400-5
449	第161区画	*	磁器類 壺	口径(9.5) 器高(4.7)	ロクロナデ 底縁外面に指溝ヘラミダネ	埋	N4/0 (灰色) N3/0 (暗灰色)	45%	(1609)-1 模範花文

別表1 二俣池北遺跡 出土土器観察表 (25)

番号	種別	発掘位置	器種	計測値cm (規定値)	調査	焼成	色調 (内面・外面・断面)	残存率	備考
450	第161区 -----	5区 機具列	単辺器 坏身	口径 11.8 器高 3.5	ロクロナデ 底部外側に刻むヘラナズリ 底部内面に一方向のナデ	焼	S05-1 (青灰色) S04-1 (紫褐色) S05-1 (青灰色)	70%	1400-1
451	第161区 -----	*	単辺器 坏身	口径(11.5) 器高 2.8	ロクロナデ 底部外側に刻むヘラナズリ	焼	N8-0 (灰白色) S15-1 (灰色) S15-1 (灰色)	30%	1400-2
452	第161区 -----	*	単辺器 坏身	口径(11.3) 器高 3.5	ロクロナデ 底部外側に刻むヘラナズリ	焼	N7-0 (灰白色) N6-0 (灰色) N5-0 (灰色)	35%	1215-3
453	第161区 4回取28	*	単辺器 高坏	口径 14.6 器高 16.0 底径 16.8	ロクロナデ 底部外側に刻むヘラナズリ	焼	T.5V7-1 (灰白色) 10V7-1 (灰白色)	60%	1215-1 三方通し

別表2 上フジ遺跡 出土土器観察表(1)

番号	検出 国庫	遺物 種別	器種	寸法 cm (推定)	調査 箇所	地味	色調 (内面・外面・ 断面)	残存率	備考
1	第174回 国庫収	B区 853-00	須恵器 坏蓋	口径(16.8) 器高 3.9	外面 ヘラケズリ 内面 ロクロナデ 縁部 ロクロナデ	硬	N8/0 (灰色) N8/0 (灰色) N8/0 (灰色)	50%	1530-2
2	第174回 国庫収	*	須恵器 坏身	器高 5.9 底径(8.9)	内・外面 ロクロナデ 外底面 ヘラケズリ	硬	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	20%	1532-1
3	第174回 国庫収	*	土師器 高坏	残高(5.1)	胴部にハケメ	中	2.5Y8/3 (淡黄色) 2.5Y8/2 (灰白色) 5Y86/8 (藍色)	20%	1415
4	第176回	B区 854-0X	須恵器 坏蓋	口径(16.8) 器高 2.4	外面はヘラケズリ 内面はナデ 縁部はロクロナデ	硬	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	30%	1480
5	第176回	*	須恵器 坏身	口径(14.4) 器高 2.8 総計(16.0)	胴部、内・外面の両面はロ クロナデ、内部の底はナデ 外面底面は縁部縁部	硬	N5/0 (灰色) N6/0 (灰色) N4/0 (灰色)	10%	1478
6	第176回 国庫収	*	須恵器 坏蓋	口径(17.6) 器高 2.5	外面はヘラケズリの残ナデ 内面はロクロナデ 縁部はロクロナデ	硬	N8/0 (灰白色) N8/0 (灰白色) N6/0 (灰白色)	20%	1497
7	第176回	*	土師器 壺	口径(16.5) 器高 2.2	口縁付近にロクロナデ	中	7.5Y8/3 (にじみ褐色) 7.5Y8/5 (褐色) 7.5Y8/6 (明褐色)	10%	1517
8	第176回	*	須恵器 瓶	器高 4.4 底径(4.0)	外面 ヘラケズリ 底面は縁部縁部 底はナデ	硬	N5/0 (灰色) N6/0 (灰色) N6/0 (灰色)	20%	1492
9	第176回 国庫収	*	須恵器 坏蓋	口径(12.0) 器高 5.2	ロクロナデ 外面面周縁部にヘラメ	硬	N5/0 (灰色) N6/0 (灰色) N6/0 (灰色)	80%	1531
10	第176回	*	須恵器 坏蓋	口径(13.8) 器高 2.4	口縁付近にロクロナデ	軟	5Y8/1 (灰白色) 5Y8/1 (灰白色) 5Y8/1 (灰白色)	15%	1529
11	第176回	*	須恵器 坏身	口径(11.4) 器高 2.4	口縁付近にロクロナデ	硬	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) N6/0 (灰色)	10%	1497
12	第176回 国庫収	*	須恵器 坏身	口径(12.8) 器高 4.2	外面ヘラケズリ 内面・縁部ロクロナデ	硬	N7/0 (灰白色) N6/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	60%	1528
13	第176回 国庫収	*	須恵器 坏蓋	口径(14.0) 器高 4.2	外面 ヘラケズリ 内面・縁部目黒ロクロナデ	硬	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) N6/0 (灰色)	70%	1530
14	第176回	*	須恵器 坏身	口径(12.4) 器高 3.1	口縁付近にロクロナデ	硬	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) N6/0 (灰色)	30%	1511
15	第176回	*	須恵器 坏身	口径(15.0) 器高 2.8	胴部付近はロクロナデ	硬	N8/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N /0 (灰色)	10%	1516
16	第176回 国庫収	852-0P	瓦 貫瓦	器高(5.0)	体部にタタキ	硬	7.5Y7/1 (灰白色) 5Y2/1 (黒色) 5Y8/4 (灰白色)	1%	1521
17	第176回	B区 854	須恵器 坏蓋	口径(18.0) 残高 1.3	天官部にナデ 口縁付近はロクロナデ	硬	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	20%	1519-1
18	第176回	*	須恵器 坏蓋	口径 12.8	底部外面ロクロナデ	中	7.5Y6/1 (灰色) 7.5Y2/4 (灰白色) 7.5Y7/4 (灰白色)	10%	1495
19	第176回	*	瓦 板	口径(9.6) 器高 2.3	ロクロナデ	中	S4/0 (灰色) N5/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	20%	1498-1

別表2 上フジ遺跡 出土土器観察表(2)

番号	検出層	土器種別	器種	計測値cm (測定値)	調査	破損	色調 (内面・外面)	残存中	備考
20	第179層	Ⅲ区 Ⅲ層	瓦器 皿	口径 6.8 器高 14.5	口縁付瓦コナナ 底部外面ナナ	欠	10YR3/1 (灰青色) 10YR3/1 (灰青色) 10YR6/2 (灰黄褐色)	40%	1300-1
21	第179層	*	瓦器 皿	口径 9.6 器高 1.85	口縁付瓦コナナ 底部外面ナナ	欠	N5/0 (灰色) N5/0 (灰青色) 2.5GY7/1 (黄ナリ・ア灰色)	20%	1373-1
22	第179層	*	瓦器 皿	口径 9.5 器高 1.9	円底皿を中心にヘラミヤキ (陶文)	破	N5/0 (灰色) N5/0 (灰白色) 2.5GY8/1 (灰白色)	20%	1389-1
23	第179層	*	瓦器 皿	口径 9.6 器高 1.4	口縁付瓦コナナ 底部外面ナナ	欠	10YR2/1 (灰白色) 2.5GY6/1 (ナリ・ア灰色) 10YR6/2 (灰黄褐色)	20%	1407-1
24	第179層	*	瓦器 皿	口径 10.8 器高 1.5	口縁付瓦コナナ 外面に胎面片集 底部内面はナナ	破	10YR3/1 (灰青色) N4/0 (灰色) 7.5Y7/1 (灰青色)	20%	1417-1
25	第179層	*	胎面質土器 鉢	————	口縁付瓦コナナ	破	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	5%	1389-1
26	第186層 採取層	V区 Ⅲ層	瓦器 碗	口径 13.2 器高 3.2	口縁付瓦コナナ 外面胎面調整 内面は胎面 を中心に胎面を1枚集。	中	N3/0 (灰青色) N4/0 (灰色) 7.5Y7/1 (灰白色)	45%	112-1
29	第186層 採取層	*	瓦器 碗	口径 13.0 器高 2.6	口縁付瓦コナナ 外面胎面調整。	破	N5/0 (灰青色) N6/0 (灰色) N7/0 (灰色)	10%	69-2
31	第186層	*	瓦器 碗	口径 11.0 器高 2.6	口縁付瓦コナナ 外面胎面調整 内面は胎面なし	破	N6/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10YR3/1 (灰白色)	15%	80
32	第186層	*	瓦器 皿	口径 6.2 器高 1.7	口縁付瓦コナナ 外面胎面調整	欠	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y7/1 (灰白色)	20%	109-1
33	第186層	*	瓦器 皿	口径 10.0 器高 1.6	口縁付瓦コナナ 底部外縁に多少の胎面あり	中	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y7/1 (灰白色)	15%	69-1
34	第186層 採取層	*	土師質土器 皿	口径 7.0 器高 1.1	口縁付瓦コナナ 底部ナナ	欠	10YR6/5 (黄黄褐色) 2.5Y6/6 (黄黄褐色) 7.5Y6/6 (黄黄褐色)	40%	71-1
35	第189層	Ⅲ区 Ⅲ層	胎面器 杯蓋	口径 11.2 器高 1.5	コナナ	破	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) 5B5/1 (赤褐色)	20%	231
36	第189層 採取層	Ⅲ区 Ⅲ層	胎面器 杯蓋	口径 3.6	コナナ	破	N6/0 (灰青色) 10B6/4-1 (黄青褐色) 5B5/1 (赤褐色)	20%	151
37	第189層 採取層	*	胎面器 高杯	口径 11.4 器高 6.0	コナナ	欠	10YR3/1 (灰白色) 7.5Y7/1 (灰白色) 10YR3/1 (灰白色)	30%	50
38	第189層	*	胎面器 杯蓋	口径 12.8 器高 3.5	口縁付瓦コナナ 底部胎面にヘラミヤキ	破	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) N6/0 (灰色)	20%	188-1
39	第189層 採取層	*	胎面器 杯蓋	口径 13.0 器高 2.9	口縁付瓦コナナ 底部外縁にヘラミヤキ	中	N7/0 (灰白色) 2.5GY6/1 (ナリ・ア灰色) 2.5GY7/1 (黄ナリ・ア灰色)	35%	152
40	第189層 採取層	Ⅲ区 Ⅲ層	胎面器 杯蓋	口径 1.9	コナナ	破	N6/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	10%	199
41	第189層	*	胎面器 杯蓋	口径 13.2 器高 0.9	口縁付瓦コナナ	中	N3/0 (灰白色) N8/0 (灰白色) N8/0 (灰白色)	20%	268

別表2 上フジ遺跡 出土土器観察表(3)

番号	検出 位置	土器 種類	器 種	寸法 容積 (推定値)	調査 状況	出土 状況	色調 (内面・ 外面)	残存率	備考
42	第1895号 埋藏層下	*	土師器 高杯	口径 8.6	表面磨耗のため不明	破	10YR7/4 (にぶい・黄褐色) 10YR7/4 (にぶい・黄褐色) 10YR7/3 (にぶい・黄褐色)	30%	379
43	第1894号	*	瓦器 瓶	口径 14.8 器高 4.9	コノコナテ 内面に1ゴキ	破	10Y7/1 (灰白色) 10Y8/1 (灰白色) 10Y8/1 (灰白色)	15%	240
44	第1894号	*	瓦器 瓶	口径 15.6 器高 2.8	11段付逆ヨコナテ	破	10Y8/2 (オリーブ灰色) 5Y7/0 (灰色) 10Y7/1 (灰白色)	15%	282
45	第1894号	*	瓦器 瓶	口径 16.0 器高 3.0	11段付逆ヨコナテ	破	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 2.5Y7/1 (灰白色)	25%	23
46	第1894号 埋藏層下	*	瓦器 瓶	口径 12.2 器高 3.6	11段付逆ヨコナテ	中	S5/0 (灰色) S1/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	30%	21
47	第1896号	*	瓦器 瓶	口径 12.4 器高 2.6	磨耗が甚	破	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	30%	24
48	第1894号	*	瓦器 瓶	口径 11.2 器高 4.7	11段付逆ヨコナテ	破	S5/0 (灰色) S6/0 (灰白色) S6/0 (灰白色)	20%	15
49	第1896号	*	瓦器 瓶	口径 10.9 器高 1.6	11段付逆ヨコナテ 内面に暗紋	中	S5/0 (灰色) N4/0 (灰色) 2.5GY7/1 (明オリーブ灰色)	35%	16
50	第1894号 埋藏層下	*	瓦器 瓶	口径 9.4 器高 1.4	11段付逆ヨコナテ 内面に暗紋	破	N3/0 (灰色) N5/0 (灰色) 2.5Y8/4 (にぶい・黄褐色)	20%	17
51	第1894号	*	瓦器 瓶	口径 9.6 器高 2.9	11段付逆ヨコナテ 体部ナテ	破	10Y8/1 (灰白色) 10Y8/1 (灰白色) 2.5GY7/1 (明オリーブ灰色)	15%	18
52	第1896号	*	瓦器 瓶	口径 8.4 器高 1.0	11段付逆ヨコナテ 体部ナテ	中	N5/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	25%	19
53	第1894号	Ⅲ区 遺構	土師器 土師器	口径 8.0 器高 1.4	11段付逆ヨコナテ 体部ナテ	中	10Y8/4 (にぶい・黄褐色) 7.5Y8/6 (棕色)	25%	14
54	第1894号	*	土師器 土師器	口径 7.9 器高 1.2	11段付逆ヨコナテ 体部ナテ	破	10Y8/3 (にぶい・黄褐色) 10Y8/2 (灰白色) 10Y8/4 (泥黄褐色)	35%	13
55	第1894号	Ⅲ区 遺構	土師器 土師器	口径 6.6 器高 1.4	11段付逆ヨコナテ 体部ナテ	中	10Y8/6 (明黄褐色) 10Y8/2 (にぶい・黄褐色)	80%	6
56	第1894号 埋藏層下	*	土師器 土師器	口径 6.0 器高 1.4	11段付逆ヨコナテ 体部ナテ	破	7.5Y8/6 (泥黄褐色) 7.5Y8/6 (泥黄褐色) 7.5Y8/6 (泥黄褐色)	15%	7
57	第1894号 埋藏層下	*	類山貫土器 鉢	————	体部ナテ	破	N6/0 (灰色) N5/0 (灰色) N6/0 (灰色)	5%	8

別表 3 二俣池北遺跡 2・3区 出土遺物 層別別一覧表(1)

2区												
	Ⅱc層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳa層	Ⅳb層	Ⅳc層	Ⅳd層	Ⅳe層	Ⅳf層	Ⅳg層	Ⅳh層	Ⅳi層
瓦	陶	81	141	68	319	63	5	1696	24	2175		
	磁	4	7	1	8	1		66		56		
石	その他									1		1
	小計	85	148	69	327	64	5	1763	24	2232		
土	羽釜	3	3		15	5		72		92		
	瓦				2					2		
土	鉢		1			1				1		
	磁	47	75	10	83	24		297	12	426		
石	その他	83	161	24	384	24	2	630	7	1078		
	小計	133	240	34	464	61	2	1099	19	1609		
土	壺							2		2		
	鉢	1	1		13			21	1	25		
石	その他				1					1		
	小計	1	1		14			23	1	28		
瓦	羽釜	13	23	2	9	2		10		23		
	壺	4	11		11			9		20		
土	鉢	5	16		7			3		10		
	その他	46	90	12	84	4	5	18	1	84		
石	小計	68	140	14	71	6	5	40	1	137		
	官器		1					4		4		
土	陶				1					1		
	磁		5		1					1		
石	その他	4	13		4	1				5		
	小計	4	19		6	1		4		11		
土	白磁		1	1		1		12	1	20		
	青磁	2	3		1	1		2		4		
石	磁		2									
	その他			1						1		
土	小計	2	6	1	2	2		19	1	25		
	A型陶				1			4		5		
土	B型陶	2	3					5	1	6		
	C型陶											
石	その他											
	小計	2	3		1			9	1	11		
土	羽釜	191	320	46	474	35	9	973	20	1507		
土	脚器							2		2		
土	磁							2		2		
石	貯器				1			2		3		
土	金属器	10	20		2					2		
土	磁器											
土	ヤスカイト	3	4		3			7		10		
土	動物遺存体								1	1		
土	植物遺存体				1			3		4		
土	瓦	9	23		10	2		22		34		
土	羽釜	3	8		5					5		
土	その他	7	12		13			11		24		
土	小計	517	898	165	1413	171	21	3870	67	5797		

別表3 二俣池北遺跡2・3区 出土遺物 層別別一覧表(2)

3区		日 野	第1層	第2層	第3層	第4層	日 野	Va層	Vb層	佐 野	佐 野
瓦	柄	22	7	41	143	143	327	291	16	22	6
	皿	2		5	8	11	27	27			
	その他			1			1	1			
	小計	24	7	47	151	157	355	422	16	22	6
土 器	須 恵	2		3	5	7	15	21			
	類										
	鉢	18	6	7	43	51	101	138	3	4	
	その他	39	12	26	106	52	180	294	7	21	8
灰 土 器	小計	59	18	36	156	110	302	433	10	25	8
	要										
	鉢			1	7	2	10	18			
	その他				1		1	2			
瓦 質 土 器	小計			1	8	2	11	20			
	須 恵	3		1	1	1	2	8			
	類	2		1	1		2	6			
	鉢	1			1	1	2	4			
陶 器	その他	8	4	2	15	8	25	35			
	小計	11	4	3	18	10	31	73			
	空 道				1		1	2			
	編 成	1						1			
編 入 陶 器	染 付										
	その他	2			1		1	1			
	小計	4			2		2	2			
	白 磁	1			2		2	2			
陶 器	古 磁					1	1	3			
	染 付	1									
	その他										
	小計	2			2	1	3	5			
瓦 色 土 器	八 割 椀				1		1	4	3	2	3
	日 割 椀			1			1	3	1		
	日 割 皿										
	その他										
	小計			1	1		2	7	4	2	3
須 恵 器	50	21	34	255	136	415	647	19	20	61	
土 器 器								4	6	76	
陶 器 器		1		1		1	2				
打 製 品											
金 属 器										1	
土 製 品											
オスホイト			1	2		3	4				
機 物 遺 存 体											
機 物 遺 存 体	1										
瓦	9	4		3	3	6	25		3		
須 恵 土 器				1		1	1			5	
そ の 他				2		2	2				
総 計	154	55	123	602	600	1134	1665	53	78	160	

別表3 二俣池北遺跡2・3区 出土遺物 層位別一覧表(3)

3b区		Ⅱ 層	Ⅲ a 層	Ⅲ b 1 層	Ⅲ b 2 層	Ⅲ b 3 層	Ⅲ b 層全体	Ⅳ 層	V a 層	V b 層	V c 層	Ⅵ 層
瓦	陶	97	59	182	325	327	941	445	168	17		1
	瓦		1	2	9	14	36	3	6			
	その他						1					
土器	小計	97	60	184	334	341	968	448	174	17		1
	羽釜	3	2	8	6	18	34	15	18	3		
	罌		2			1	3		1			
土器	鉢						1					
	皿	45	20	90	86	80	291	120	51	14	7	
	その他	66	33	78	190	179	327	322	221	85	1	
土器	小計	114	77	176	282	278	856	467	291	96	3	
	罌											
	鉢	2	3	4	3		9	1	3	1		
土器	その他				1		1					
	小計	2	3	4	3		10	1	3	1		
	羽釜	5	2	4	9	6	23	2				
土器	罌	5	3		1	1	5		1			
	鉢	6	2	2	1	1	6					
	その他	28	14	10	10	10	51	2	1			
土器	小計	44	21	16	21	18	85	4	2			
	壺・甕			1	1		3	1				
	罌											
土器	土器											
	その他	5		1	3		4					
	小計	5		2	4		7	1				
土器	白磁	3		1	3		4	2	1			
	古磁	3	4	2			9			1		
	土器											
土器	土器											
	その他											
	小計	5	4	3	3	3	13	2	1	1		
土器	A類陶				1	2	9	19	10	10		2
	B類陶		1		2	3	6	30	32	5	3	
	C類陶											
土器	その他											
	小計		1		2	10	15	30	48	15	3	2
	須恵器	132	115	227	310	331	825	286	373	130	22	41
土器	土器						3	3	15	12	31	43
	漆器		1				1	2		8		
	石製品											
土器	金属器	1										
	土製品	1										
	ヤクカイト	2	1			1	2	3		1		
土器	動物遺存体					1	1					
	植物遺存体								15			
	瓦	8	3	4	10	3	20	4				
土器	出土品			1			1			1	3	3
	その他		1				1	2		4		1
	総計	411	287	620	939	856	3868	1267	921	301	62	131

別表3 二俣池北遺跡2・3区 出土遺物 層位別一覧表(4)

3区区		Ⅱ層	Ⅲa層	Ⅲb1層	Ⅲb2層	Ⅲb3層	Ⅳ層	Ⅴ層	N層	Va層	V層	備考
瓦	板	83	301	609	1	678	1288	1794	625	208		4
	葺	3	10	19		19	29	42	12	4		
	その他											
小計		86	401	619	1	697	1317	1836	637	212		4
	遺棄	2	12	25		37	62	74	51	18		
土	灰		1					1				
	群			1			1	1				
	埴	29	84	91		146	237	307	117	29		
その他		44	196	157	1	363	516	728	507	267		
	小計	71	295	249	1	516	816	1101	675	309		
遺棄瓦土	灰			1			1	1				
	群		6	6		3	9	16	4			
	その他					2	2	2				
小計			6	7		5	12	19	4			
	遺棄	2	6	6			6	12				
瓦	灰	1	5	4			4	9				
	群	1	3	1			1	1				
	その他	13	22	13		2	15	37	6			
小計		17	36	24		2	26	62	6			
	遺棄											
陶	灰					1	1	1	1			
	灰											
	灰	1										
その他	灰	2	1					1				
	小計	3	1			1	1	2	2			
	遺棄											
輪	白磁	1	2	2		1	3	5	1			
	赤磁	1	1	2			2	3				
	その他											
小計		2	3	4		1	5	8	1			
	遺棄											
瓦	八咫鏡	1		6	1	9	16	17	19	18		
	五穀鏡			4		11	15	19	43	15		
	百葉鏡								1	1		
その他												1
	小計	1		10	1	20	31	36	54	36		
遺棄	群	99	403	526	6	561	956	1809	719	439	96	87
	土加群		1			2	2	5	2	5	18	46
陶器	1		1		1	2	2					
石製品												
金属器												
土製品		1						1	1			
オスロイト				2	1	1	4	4	1	1	2	4
動物遺存群					1		1	1				
植物遺存群												
瓦	2	8	11			6	17	25	3	3		
遺棄土			2			1	3	3	1			
その他												1
総計	282	1215	1175	11	1717	3233	4804	2386	1066	116	141	

別表 4 二俣池北遺跡 4・5 区出土遺物 遺構・層位別一覽表 (1)

4150-OD

出土遺物	数量	標準重量	重量比 (%)	最小個数	焼片数	
杯	137	190	0.7	4	21	
瓶	高 杯	127	550	0.2	2	10
	杯 or 高杯	3	260	<0.1	1	1
甕	空	167	1,500	0.1	2	23
	底 or 甕	8	2,000	<0.1	1	1
部	空 or 甕	20	3,000	<0.1	1	6
	小 計	668		1.0	11	62
土	瓶	30	230	0.1	1	3
	甕	215	1,500	0.2	1	49
	不明	124			3	112
部	小 計	469		0.3	8	194
	合 計	537		1.3	19	256

5100-OD

出土遺物	数量	標準重量	重量比 (%)	最小個数	焼片数	
杯	115	190	0.6	1	3	
瓶	高 杯	7	550	<0.1	1	1
	杯 or 高杯	32	260	0.1	2	5
甕	瓶	11	650	<0.1	1	4
	空	36	1,500	<0.1	1	3
部	小 計	204		0.7	6	16
	瓶	35	210	0.2	1	4
土	甕	6	1,500	<0.1	1	1
	甕	228	500	0.3	1	103
部	空 or 甕	47	1,500	0.1	2	16
	瓶	25	1,500	<0.1	1	5
部	不明	11			2	12
	小 計	372		0.8	8	141
合 計	523		1.3	14	157	

4250-OD

出土遺物	数量	標準重量	重量比 (%)	最小個数	焼片数	
杯	351	190	1.8	6	36	
瓶	高 杯	48	550	0.1	2	3
	杯 or 高杯	141	260	0.5	3	20
甕	空	264	1,500	0.2	2	17
	甕	982	2,000	0.1	2	30
部	空 or 甕	12	3,000	<0.1	1	1
	小 計	1,498		2.7	16	91
土	空	590	1,500	0.4	3	187
	甕	217	900	0.2	2	51
部	空 or 甕	296	1,300	0.2	3	69
	瓶	275	1,500	0.4	2	85
部	引 筥	216	1,500	0.1	2	7
	甕	68	6,000	<0.1	1	1
部	不明	440			3	116
	小 計	2,312		1.3	16	817
合 計	3,810		4.0	32	928	

5150-OD

出土遺物	数量	標準重量	重量比 (%)	最小個数	焼片数	
杯	103	190	0.5	5	13	
瓶	高 杯	5	550	<0.1	1	1
	杯 or 高杯	19	260	0.1	2	6
甕	空 or 甕	63	3,000	<0.1	2	3
	小 計	190		0.6	10	23
土	空 or 甕	37	1,200	<0.1	3	19
	小 計	27			3	19
合 計	217		0.6	13	33	

5200-OD

出土遺物	数量	標準重量	重量比 (%)	最小個数	焼片数
空 or 甕	4	1,200	<0.1	1	1
小 計	4			1	1
合 計	4			1	1

5050-OD

出土遺物	数量	標準重量	重量比 (%)	最小個数	焼片数	
杯	71	190	0.4	1	2	
瓶	高 杯	29	260	0.1	2	3
	杯 or 高杯	30	3,000	<0.1	1	12
甕	小 計	130		0.5	4	17
	甕	150	900	0.2	2	18
部	空 or 甕	322	1,200	0.3	3	175
	小 計	477		0.5	4	193
合 計	607		1.9	8	210	

5300-OD

出土遺物	数量	標準重量	重量比 (%)	最小個数	焼片数	
杯	135	190	0.7	6	18	
瓶	高 杯	167	550	0.3	3	4
	杯 or 高杯	82	260	0.3	6	15
甕	空 or 甕	58	3,000	<0.1	2	9
	不明	1			1	1
部	小 計	443		1.3	16	47
	甕	157	1,500	0.1	1	36
土	甕	13	900	<0.1	1	5

別表 4 二俣池北遺跡 4・5 区出土遺物 遺構・層別別一覽表 (2)

土層群	遺物	数量	標準重量	重量比換算係数	総小 断片数	破片数
	環	134	6,900	<0.1	1	4
	小計	699		0.4	5	192
合計	1,052		1.7	23	199	

5350-OD

土層群	遺物	数量	標準重量	重量比換算係数	総小 断片数	破片数
	環	78	190	0.4	4	9
	小計	37		0.4	6	11
土層群	環	15	950	<0.1	1	1
	不明	4			1	1
	小計	55	1,200	<0.1	3	31
合計	152		0.4	9	42	

5380-OD

土層群	遺物	数量	標準重量	重量比換算係数	総小 断片数	破片数
	環	482	190	2.5	5	17
	小計	513		2.5	8	20
土層群	環	13	250	<0.1	1	1
	不明	8			1	1
	小計	219	1,200	0.2	3	42
合計	732		2.8	13	71	

5400-OD

土層群	遺物	数量	標準重量	重量比換算係数	総小 断片数	破片数
	環	26	190	0.1	1	2
	小計	250		0.7	10	31
土層群	環	23	659	<0.1	1	3
	不明	4			2	3
	小計	219	1,200	0.3	3	51
合計	732		2.8	13	71	

5350-OB

土層群	遺物	数量	標準重量	重量比換算係数	総小 断片数	破片数
	環	24	190	0.1	1	1
	小計	60		0.2	2	2
土層群	環	9	1,500	<0.1	1	1
	不明	9			1	1
	小計	69		0.2	3	3

5390-OB

土層群	遺物	数量	標準重量	重量比換算係数	総小 断片数	破片数
	環	9	550	<0.1	1	2
	小計	16			2	2
土層群	環	7	1,500	<0.1	1	1
	不明	38	1,200	<0.1	3	9
	小計	45			4	10
合計	61			6	13	

5410-OB

土層群	遺物	数量	標準重量	重量比換算係数	総小 断片数	破片数
	環	26	190	<0.1	1	1
	小計	52			4	7
土層群	環	11	550	<0.1	1	1
	不明	4	1,500	<0.1	1	4
	小計	13	1,200	<0.1	2	8
合計	65			6	15	

5450-OB

土層群	遺物	数量	標準重量	重量比換算係数	総小 断片数	破片数
	環	14	360	<0.1	1	2
	小計	21			2	4
土層群	環	7	1,200	<0.1	1	1
	不明	1			1	1
	小計	70		0.1	3	5
合計	91			5	9	

5470-OB

土層群	遺物	数量	標準重量	重量比換算係数	総小 断片数	破片数
	環	19	260	0.1	2	4
	小計	70		0.1	3	5

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層別別一覧表(3)

土器部	不明	1		1	1	
	小計	1		1	1	
合計		21		0.1	4	6

土器部	不明	2		1	1	
	小計	2		1	1	
合計		17		0.1	2	2

5500-OB

出土遺物	数量	標準重量 %	重量比推 定割合数	総小 割体数	破片数	
第 5 区	埴	77	100	0.4	6	7
	埴or高坪	134	260	0.5	7	20
	瓶	4	650	0.1	1	1
	壺	7	1,500	0.1	1	1
	壺or甕	81	3,000	<0.1	3	14
	罎	7	500	<0.1	1	1
	小計	310		1.1	19	44
	定	5	1,500	<0.1	1	1
	壺or甕	181	1,300	0.2	3	52
	瓶	31	1,500	<0.1	1	5
土 器 部	不明	21		2	20	
	小計	241		9.2	2	87
	付着・割片	1		1	1	1
合計		555		1.3	27	132

5650-OB

出土遺物	数量	標準重量 %	重量比推 定割合数	総小 割体数	破片数	
土 器 部	壺or甕	15	1,200	<0.1	2	2
	小計	15			2	2
	合計		15		2	2

5700-OB

出土遺物	数量	標準重量 %	重量比推 定割合数	総小 割体数	破片数	
土 器 部	埴or高坪	14	260	0.1	2	1
	小計	14		0.1	2	1
	合計		14		0.1	2

5750-OB

出土遺物	数量	標準重量 %	重量比推 定割合数	総小 割体数	破片数	
第 5 区	埴	40	100	0.2	2	3
	埴or高坪	12	200	<0.1	1	1
	壺or甕	30	3,000	<0.1	1	2
	小計	91		0.2	4	6
	土器部	壺or甕	15	1,200	<0.1	1
小計	16			1	8	
合計		107		0.2	5	14

5510-OB

出土遺物	数量	標準重量 %	重量比推 定割合数	総小 割体数	破片数	
土 器 部	壺or甕	3	1,200	<0.1	1	2
	小計	3			1	2
	合計		3		1	2

4009-OO

出土遺物	数量	標準重量 %	重量比推 定割合数	総小 割体数	破片数	
第 5 区	壺or甕	72	3,000	<0.1	2	4
	不明	1		1	1	
	小計	73			3	5
	土器部	不明	9		2	5
小計	9			2	5	
合計		82		5	10	

5600-OB

出土遺物	数量	標準重量 %	重量比推 定割合数	総小 割体数	破片数	
土 器 部	埴or高坪	15	260	0.1	1	1
	小計	15		0.1	1	1

4017-OO

出土遺物	数量	標準重量 %	重量比推 定割合数	総小 割体数	破片数	
土 器 部	壺or甕	9	3,000	<0.1	1	1
	小計	9			1	1
	合計		9		1	1

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層位別一覧表(4)

4085-00

出土遺物	数量	標準重量	重量比換算個体数	最小個体数	破片数		
須恵器	3	5	180	<0.1	1	2	
小計	5				1	2	
土師器	不用	6				1	2
小計	6					1	2
その他	瓦器	5	300	<0.1	1	3	
小計	5					1	3
合計	16					3	7

4093-00

出土遺物	数量	標準重量	重量比換算個体数	最小個体数	破片数			
須恵器	須恵器	16	3,000	<0.1	1	1		
小計	16					1	1	
土師器	不用	3					1	2
小計	3						1	2
合計	19					2	3	

4116-00

出土遺物	数量	標準重量	重量比換算個体数	最小個体数	破片数			
須恵器	須恵器	8	3,000	<0.1	1	2		
小計	8					1	2	
土師器	不用	16					3	10
小計	16						3	10
その他	瓦器	4	300	<0.1	1	5		
小計	4						1	5
合計	28						5	17

4145-00

出土遺物	数量	標準重量	重量比換算個体数	最小個体数	破片数					
須恵器	3	86	180	0.5	1	7				
小計	86						0.5	1	7	
合計	86							0.5	1	7

4148-00

出土遺物	数量	標準重量	重量比換算個体数	最小個体数	破片数				
須恵器	高坏	10	560	<0.1	1	3			
小計	2							1	2
土師器	不用	12						3	5
小計	12							3	5
その他	瓦	108	1,500	0.1	1	16			
須恵器	須恵器	158	1,200	0.1	2	20			

土師器	数量	標準重量	重量比換算個体数	最小個体数	破片数				
不明	10					1	7		
小計	297					0.2	5	54	
合計	299						0.2	7	59

4184-00

出土遺物	数量	標準重量	重量比換算個体数	最小個体数	破片数				
須恵器	杯	1	180	<0.1	1	1			
小計	3	1,500	<0.1			1	1		
土師器	須恵器	9	3,000	<0.1	1	1			
小計	13						3	3	
その他	不明	1						2	2
小計	1							2	2
合計	14							5	5

5026-00

出土遺物	数量	標準重量	重量比換算個体数	最小個体数	破片数			
須恵器	杯	1,861	180	9.8	16	99		
高坏	420	560	0.8	1	11			
杯or高坏	18	280	0.1	1	2			
瓶	瓶	3	400	<0.1	1	1		
小計	203	1,500	9.2			1	9	
土師器	須恵器	97	3,000	<0.1	1	16		
小計	324	500	0.6			1	10	
その他	杯	370	1,200	0.2	1	5		
小計	6						2	5
合計	3,491					11.6	25	134
須恵器	須恵器	736	900	0.8	2	297		
小計	3,567	1,200	2.1			4	453	
合計	3,503						2	660
合計	6,707					14.7	37	458

5037-00

出土遺物	数量	標準重量	重量比換算個体数	最小個体数	破片数					
須恵器	杯	402	180	2.1	4	11				
高坏	31	560	0.1	1	2					
杯or高坏	33	260	0.1			2	4			
小計	169	1,500	9.1			1	3			
土師器	須恵器	20	3,000	<0.1	1	2				
小計	655						2.1	5	22	
その他	須恵器	4	1,200	<0.1	1	2				
小計	4							1	2	
合計	659							2.4	10	24

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層位別一覽表(5)

5039-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比推 算割合%	紐・小 銅係数	破片数
環	611	180	3.2	7	14
高 杯	1,059	550	1.9	4	20
杯 or 高杯	349	260	1.3	9	21
瓶	815	650	1.3	2	12
壺	11,906	7,000	1.7	2	162
甕 or 罎	14	3,000	<0.1	2	2
不明	14			2	7
小 計	14,828		0.4	28	239
土 器					
壺	2,050	1,500	1.4	2	186
壺	800	900	0.9	3	72
甕 or 罎	211	1,200	0.2	2	42
不明	18			1	5
小 計	3,079		2.5	8	306
合 計	17,917		11.9	36	545

5054-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比推 算割合%	紐・小 銅係数	破片数
杯 or 高杯	16	260	0.1	1	7
甕 or 罎	30	3,000	<0.1	1	1
不明	1			1	1
小 計	47		0.1	3	9
土 器					
甕 or 罎	13	1,200	<0.1	2	6
小 計	13			2	6
合 計	60		0.1	5	15

5061-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比推 算割合%	紐・小 銅係数	破片数
杯 or 高杯	3	260	<0.1	1	1
壺	11	1,500	<0.1	1	2
小 計	14			2	3
合 計	14			2	3

5090-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比推 算割合%	紐・小 銅係数	破片数
環	145	180	0.8	2	6
杯 or 高杯	14	260	0.1	1	1
甕 or 罎	17	3,000	<0.1	1	1
小 計	176		0.9	4	8
土 器					
甕 or 罎	7	1,200	<0.1	1	1
小 計	7			1	1
合 計	183		0.9	5	9

5239-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比推 算割合%	紐・小 銅係数	破片数
環	60	180	0.3	1	1
杯 or 高杯	29	260	0.1	2	6
壺	18	1,500	<0.1	1	2
甕 or 罎	33	3,000	<0.1	1	3
小 計	140		0.4	5	12
土 器					
甕 or 罎	65	1,700	0.1	2	31
小 計	65		0.1	3	31
合 計	225		0.5	8	43

5243-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比推 算割合%	紐・小 銅係数	破片数
高 杯	27	550	<0.1	2	2
杯 or 高杯	285	260	1.1	7	21
壺	83	1,500	0.1	2	2
甕 or 罎	237	3,000	0.1	2	15
小 計	632		1.3	13	37
土 器					
甕 or 罎	79	1,200	0.1	2	22
小 計	79		0.1	2	22
合 計	711		1.4	15	59

5244-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比推 算割合%	紐・小 銅係数	破片数
環	57	180	0.3	2	3
高 杯	2	550	<0.1	1	1
杯 or 高杯	127	260	0.5	3	13
壺	965	1,500	0.6	7	26
不明	7			1	3
小 計	1,058		1.4	13	46
土 器					
甕 or 罎	22	1,200	<0.1	2	5
不明	4			3	4
小 計	26			5	9
合 計	1,124		1.4	14	55

5253-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比推 算割合%	紐・小 銅係数	破片数
土 器					
甕 or 罎	53	1,200	<0.1	2	43
小 計	53			2	43
合 計	53			2	43

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層位別一覧表(6)

5325-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	非可視部 目録枚数	紐・小 銅体数	残片数
その他 小計	36			1	1
小計	36			1	1
合計	36			1	1

5340-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	非可視部 目録枚数	紐・小 銅体数	残片数
銅 高 杯	1	550	<0.1	1	1
小計	1			1	1
土 器 土 師 器					
壺	15	1,300	<0.1	1	3
壺or甕	8	1,200	<0.1	2	6
小計	23			3	11
合計	27			4	12

5342-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	非可視部 目録枚数	紐・小 銅体数	残片数
銅 年	205	190	1.9	4	23
高 杯	3	550	<0.1	1	1
Hori高杯	55	360	0.2	6	10
壺	6	1,300	<0.1	1	1
壺	66	7,900	<0.1	1	3
壺or甕	736	3,000	0.2	3	32
不明	1			1	1
小計	1,200		2.3	17	66
土 師 器					
壺	37	900	<0.1	1	2
壺or甕	241	1,300	0.2	5	67
小計	278		0.2	6	69
その他 銅器	5			1	1
小計	5			1	1
合計	1,483		2.5	24	138

5344-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	非可視部 目録枚数	紐・小 銅体数	残片数
銅 年	17	190	0.1	1	3
高 杯	11	300	<0.1	1	1
Hori高杯	140	350	0.5	6	13
壺or甕	198	3,000	<0.1	2	14
不明	5			1	1
小計	281		0.6	11	33
土 師 器					
壺or甕	86	1,300	0.1	3	27
小計	86		0.1	3	27

合計	267		0.7	14	59
----	-----	--	-----	----	----

5345-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	非可視部 目録枚数	紐・小 銅体数	残片数	
銅 年	26	39	190	0.2	1	5
Hori高杯	9	260	<0.1	1	1	
壺	17	7,000	<0.1	1	1	
小計	61			0.2	3	7
土 師 器						
壺or甕	67	1,300	0.1	2	4	
小計	67		0.1	2	4	
合計	132		0.3	5	11	

5346-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	非可視部 目録枚数	紐・小 銅体数	残片数
土 師 器					
壺	15	210	0.1	1	2
小計	15		0.1	1	2
合計	15		0.1	1	2

5402-00

出土遺物	重量 g	標準重量 g	非可視部 目録枚数	紐・小 銅体数	残片数
銅 年	180	190	1.0	1	1
Hori高杯	15	260	0.1	1	1
小計	201		1.1	2	2
土 師 器					
壺or甕	43	1,300	<0.1	2	24
小計	43			2	24
合計	247		1.1	4	26

4008-OS

出土遺物	重量 g	標準重量 g	非可視部 目録枚数	紐・小 銅体数	残片数
銅 年	565	190	3.0	6	16
高 杯	295	550	0.4	2	3
壺	283	1,500	0.2	1	6
壺	151	500	0.3	1	2
小計	1,222		3.9	10	27
土 師 器					
壺	60	1,500	<0.1	2	35
小計	60			2	35
合計	1,282		3.9	12	52

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層位別一覽表(7)

4015-OS

出土遺物		重量 g	標準重量 g	重量比推 定割合数	紐・小 銅体数	破片数
須 田 跡	環	23	190	0.1	1	4
	鏝	18	7,000	<0.1	1	2
	鍔or鏝	61	3,000	<0.1	1	4
	小計	102		0.1	3	10
土 師 跡	鍔	3	210	<0.1	1	1
	鏝	99	1,500	0.1	1	1
	皿	4	30	0.1	1	3
不明	44			2	20	
小計	150		0.2	5	25	
水 の 池	瓦器	10	300	<0.1	1	5
	小計	10			1	5
合計	262		0.5	9	69	

4027-OS

出土遺物		重量 g	標準重量 g	重量比推 定割合数	紐・小 銅体数	破片数
須 田 跡	環	2	190	<0.1	1	1
	鍔or鏝	19	3,000	<0.1	1	3
	小計	21			2	4
土 師 跡	鍔	7	210	<0.1	1	2
	皿	8	30	0.3	2	5
	小計	15		0.3	3	7
合計	36		0.3	5	11	

4079-OS

出土遺物		重量 g	標準重量 g	重量比推 定割合数	紐・小 銅体数	破片数
須 田 跡	鏝	15	1,500	<0.1	2	2
	小計	15			2	2
土 師 跡	鏝	4	1,500	<0.1	1	2
	小計	4			1	2
合計	19			3	4	

4096-OS

出土遺物		重量 g	標準重量 g	重量比推 定割合数	紐・小 銅体数	破片数
須 田 跡	環	9	190	<0.1	1	2
小計	9			1	2	
合計	9			1	2	

4096-OS

出土遺物		重量 g	標準重量 g	重量比推 定割合数	紐・小 銅体数	破片数
須 田 跡	環	35	190	0.1	1	3
	鏝	31	1,500	<0.1	1	4
	小計	59		0.1	2	7
土 師 跡	不明	12			3	4
	小計	12			3	4
合計	71		0.1	5	11	

4099-OS

出土遺物		重量 g	標準重量 g	重量比推 定割合数	紐・小 銅体数	破片数
須 田 跡	環	1	190	<0.1	1	1
	鍔or鏝	5	3,000	<0.1	1	1
	小計	6			2	2
土 師 跡	鍔or鏝	9	1,200	<0.1	1	1
	不明	2			1	2
	小計	11			2	3
合計	17			4	5	

4112-OS

出土遺物		重量 g	標準重量 g	重量比推 定割合数	紐・小 銅体数	破片数
須 田 跡	高杯	10	500	<0.1	1	1
	小計	10			1	1
水 の 池	瓦器	4	300	<0.1	1	4
	小計	4			1	4
合計	14			2	5	

4117-OS

出土遺物		重量 g	標準重量 g	重量比推 定割合数	紐・小 銅体数	破片数
須 田 跡	鍔or鏝	10	3,000	<0.1	2	3
	小計	10			2	3
	不明	1			1	1
土 師 跡	小計	1			1	1
	不明	1			1	1
水 の 池	瓦器	9	300	<0.1	3	3
	小計	9			3	3
合計	20			6	7	

4121-OS

出土遺物		重量 g	標準重量 g	重量比推 定割合数	紐・小 銅体数	破片数
須 田 跡	鍔or鏝	6	3,000	<0.1	1	1
	小計	6			1	1

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層位別一覧表(8)

土層部	竈	7	1,500	<0.1	1	1
	小計	7			1	1
合計	13			2	2	

4154-OS

出土遺物	重さ	標準重さ	重量比換算割合数	総小胴体数	破片数
竈or 壺	57	3,000	<0.1	1	1
小計	57			1	1
合計	57			1	1

4156-OS

出土遺物	重さ	標準重さ	重量比換算割合数	総小胴体数	破片数	
須江部	竈	20	1,500	<0.1	1	2
	小計	20			1	2
土層部	不明	20		1	2	
	小計	20		1	2	
子の池	瓦器	2	300	<0.1	1	1
	小計	2		1	1	
合計	42			3	5	

4159-OS

出土遺物	重さ	標準重さ	重量比換算割合数	総小胴体数	破片数	
須江部	壺or 甕	46	3,000	<0.1	1	2
	小計	46			1	2
土層部	壺or 甕	17	1,200	<0.1	1	2
	小計	17			1	2
合計	58			2	4	

4160-OS

出土遺物	重さ	標準重さ	重量比換算割合数	総小胴体数	破片数	
須江部	壺or 甕	15	3,000	<0.1	1	2
	小計	15			1	2
土層部	不明	1		1	3	
	小計	1		1	3	
合計	16			2	5	

4178-OS

出土遺物	重さ	標準重さ	重量比換算割合数	総小胴体数	破片数	
須江部	壺or 甕	43	3,000	<0.1	1	1
	小計	43			1	1
合計	43			1	1	

4185-OS

出土遺物	重さ	標準重さ	重量比換算割合数	総小胴体数	破片数	
須江部	壺or 甕	32	3,000	<0.1	1	1
	小計	32			1	1
子の池	瓦器	8	300	<0.1	1	6
	小計	8			1	6
合計	40			2	7	

4186-OS

出土遺物	重さ	標準重さ	重量比換算割合数	総小胴体数	破片数	
須江部	埴	8	100	<0.1	1	1
	小計	8			1	1
合計	8			1	1	

4200-OS

出土遺物	重さ	標準重さ	重量比換算割合数	総小胴体数	破片数	
須江部	埴	62	100	0.3	1	3
	高坏	55	550	0.1	1	2
	Yor西坏	51	250	0.2	4	7
土層部	壺	18	1,500	<0.1	1	1
	壺	150	7,000	<0.1	1	4
	壺or 甕	41	3,000	<0.1	2	6
土層部	小計	377		0.6	10	23
	埴	5	210	<0.1	1	1
土層部	壺	58	1,500	<0.1	2	2
	壺	17	900	<0.1	1	1
土層部	不明	61			3	17
	小計	141			7	21
合計	518		0.6	17	44	

5023-OS

出土遺物	重さ	標準重さ	重量比換算割合数	総小胴体数	破片数	
須江部	埴	15	100	0.1	1	1
	Yor西坏	5	250	<0.1	1	1
	壺or 甕	44	3,000	<0.1	2	4
	小計	64		0.1	4	6
土層部	高坏	63	360	0.2	1	8
	埴	9	210	<0.1	2	4
	不明	14			3	13
合計	85		0.2	6	25	
合計	149		0.3	10	31	

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層別一覧表(9)

5024-OS

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数
環	41	190	0.2	1	5
小計	41		0.2	1	5
合計	41		0.2	1	5

5027-OS

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数
高坪	50	550	0.1	1	1
高坪高坪	55	260	0.1	2	2
小計	105		0.3	3	3
土器	47	1,200	<0.1	3	8
小計	17			3	8
合計	152		0.3	6	11

5052-OS

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数
環	4	190	<0.1	1	1
高坪高坪	1	260	<0.1	1	1
小計	5			2	2
合計	5			2	2

5053-OS

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数
高坪	4	550	<0.1	1	1
小計	4			1	1
合計	4			1	1

5091-OS

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数
環	38	190	0.2	2	3
高坪高坪	71	260	0.3	3	12
瓶	78	650	0.1	1	2
壺	110	1,500	0.1	2	7
壺	30	7,000	<0.1	1	1
壺or壺	91	2,000	<0.1	2	3
小計	430		0.7	11	28
高坪高坪	2	270	<0.1	1	1
瓶	3	210	<0.1	2	3
壺or壺	2	1,200	<0.1	1	1
小計	7			4	5
合計	437		0.7	15	33

5094-OS

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数
高坪高坪	15	260	0.1	3	1
小計	15		0.1	3	1
壺or壺	17	1,200	<0.1	2	9
小計	17			2	9
合計	32		0.1	5	13

5132-OS

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数
高坪高坪	15	260	0.1	3	3
壺or壺	3	2,000	<0.1	1	1
小計	18		0.1	3	4
壺or壺	20	1,200	<0.1	2	6
小計	20			2	6
瓦器	2	300	<0.1	1	1
小計	2			1	1
合計	40		0.1	6	11

5140-OS

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数
高坪高坪	15	260	0.1	1	3
小計	15		0.1	1	3
不明	3			1	1
小計	3			1	1
瓦器	2	300	<0.1	1	1
小計	2			1	1
合計	20		0.1	3	5

5160-OS

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数
高坪	8	550	<0.1	1	1
高坪高坪	3	260	<0.1	2	2
小計	11			3	3
瓶	1	210	<0.1	1	1
小計	1			1	1
瓦器	3	300	<0.1	1	2
小計	3			1	2
合計	15			5	6

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層別一覧表(10)

5161-OS

出土遺物	数量	標準重量g	重量比標準器別体数	最小体数	破片数
環 or 高環	8	360	<0.1	1	2
小計	8			1	2
土師器					
甕 or 甕	21	1,300	<0.1	3	4
不明	1			1	4
小計	22			4	8
その他					
瓦器	1	300	<0.1	1	1
小計	1			1	1
合計	31			6	11

部	小計	12			2	4
その他	瓦器	6	300	<0.1	1	1
小計	6				1	1
合計	109			0.3	6	11

5173-OS

出土遺物	数量	標準重量g	重量比標準器別体数	最小体数	破片数
環 or 高環	7	260	<0.1	1	2
甕 or 甕	63	3,000	<0.1	2	6
不明	2			1	4
小計	72			4	12
土師器					
甕 or 甕	11	1,200	<0.1	2	5
小計	11			2	5
その他					
瓦器	14	300	<0.1	2	5
小計	14			2	5
合計	97			8	22

5169-OS

出土遺物	数量	標準重量g	重量比標準器別体数	最小体数	破片数
環 or 高環	6	260	<0.1	1	1
甕 or 甕	12	3,000	<0.1	1	1
小計	18			2	2
土師器					
甕	1	210	<0.1	1	1
小計	1			1	1
合計	19			3	3

5302-OS

出土遺物	数量	標準重量g	重量比標準器別体数	最小体数	破片数
土師器					
甕	6	1,500	<0.1	1	5
小計	6			1	5
合計	6			1	5

5170-OS

出土遺物	数量	標準重量g	重量比標準器別体数	最小体数	破片数
環	308	190	1.6	5	8
高環	11	550	<0.1	1	1
環 or 高環	581	260	2.6	7	30
甕	18	1,500	<0.1	1	2
甕	71	7,000	<0.1	1	1
甕 or 甕	33	3,000	<0.1	2	3
小計	1,022		3.6	17	54
土師器					
甕	281	900	0.4	3	54
不明	3			2	3
小計	284		0.4	5	57
合計	1,406		4.0	22	111

4037-OP

出土遺物	数量	標準重量g	重量比標準器別体数	最小体数	破片数
土師器					
甕 or 甕	9	1,200	<0.1	1	1
小計	9			1	1
合計	9			1	1

4067-OP

出土遺物	数量	標準重量g	重量比標準器別体数	最小体数	破片数
土師器					
甕	6	210	<0.1	1	5
小計	6			1	5
合計	6			1	5

5171-OS

出土遺物	数量	標準重量g	重量比標準器別体数	最小体数	破片数
環 or 高環	66	360	0.3	1	3
甕 or 甕	4	3,000	<0.1	1	2
不明	1			1	1
小計	71		0.3	3	6
土師器					
甕	1	210	<0.1	1	1
甕 or 甕	14	1,200	<0.1	1	3

4076-OP

出土遺物	数量	標準重量g	重量比標準器別体数	最小体数	破片数
土師器					
甕	3	1,500	<0.1	1	1
小計	3			1	1

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層位別一覧表(11)

本館	陶磁器	13	250	0.1	1	2
土器部	小計	13		0.1	1	2
合計		16		0.1	2	3

4122-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	環	4	50	0.1	1	1
土器部	小計	4		0.1	1	1
合計		4		0.1	1	1

4191-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	小皿	5			1	2
土器部	小計	5			1	2
合計		5			1	2

5137-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	香炉	3	1,200	<0.1	1	2
土器部	小計	3			1	2
合計		3			1	2

5141-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	香炉	2	1,200	<0.1	1	1
土器部	小計	2			1	1
合計		2			1	1

5142-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	環	6	190	<0.1	1	1
	香炉	3	3,000	<0.1	1	1
	小計	9			2	2
合計		9			2	2

5145-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	香炉	32	1,200	<0.1	1	2
土器部	小計	32			1	2
合計		32			1	2

5209-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	珙or高環	3	360	<0.1	1	1
	小計	3			1	1
合計		3			1	1

5227-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	小皿	8	1,500	<0.1	1	1
土器部	小計	8			1	1
合計		8			1	1

5228-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	香炉	2	1,200	<0.1	1	1
土器部	小計	2			1	1
合計		2			1	1

5231-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	珙or高環	4	260	<0.1	2	2
	小計	4			2	2
土器部	香炉	2	1,200	<0.1	1	2
	小計	2			1	2
合計		6			3	4

5233-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	環	16	190	0.1	2	2
	小計	16		0.1	2	2
土器部	香炉	7	1,200	<0.1	2	3
	小計	7			2	3
合計		23		0.1	4	5

5274-OP

出土遺物	数量	標準重量	重量比(%)	最小個体数	破片数	
土器部	香炉	1	1,200	<0.1	1	1
土器部	小計	1			1	1
合計		1			1	1

別表4 二俣池北遺跡4・5区出土遺物 遺構・層別別一覽表(12)

4001-OW

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比 標準重量	最小 胴体数	破片数
土器類					
不明	3			2	6
小 計	3			2	6
小の他					
瓦 器	1	300	<0.1	1	2
陶磁器	134	250	0.5	5	6
瓦	116	3,000	<0.1	2	2
小 計	250		0.5	8	10
合 計	256		0.5	10	16

4区目別

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比 標準重量	最小 胴体数	破片数
環	1,372	180	7.2		148
高 環	1,621	550	3.0		120
Heor高環	5,373	260	20.7		744
瓶	495	650	0.6		12
壺	41	250	0.2		8
甕	1,456	1,500	1.0		113
甕or甕	27,817	3,000	9.3		1,451
鉢	47	500	0.1		3
不明	346				110
小 計	28,512		42.1		2,709
環	37	180	0.2		10
高 環	77	360	0.2		12
瓶	1,172	210	5.6		20
壺	22	1,500	<0.1		9
甕or甕	4,900	1,200	3.2		500
甕	47	6,000	<0.1		1
羽 釜	913	1,500	0.6		46
瓶	309	30	11.9		107
不明	1,430				1,189
小 計	8,517		20.9		2,286
瓦 器	6,919	300	20.1		1,908
陶磁器	623	250	2.5		31
瓦	5,178	3,000	1.4		47
行器類	25				5
小 計	10,845		21.9		1,991
合 計	57,605		87.0		6,986

5区目別

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比 標準重量	最小 胴体数	破片数
環	1,277	180	6.7		83
高 環	2,907	550	5.3		189
Heor高環	9,554	280	36.7		1,029

瓶	278	650	0.4		19
壺	11	250	<0.1		1
甕	1,085	1,500	1.3		142
甕	560	7,000	<0.1		3
甕or甕	12,929	3,000	4.3		788
瓶	57	500	0.1		8
体	181	1,200	0.2		2
不明	961				284
小 計	20,291		25.0		2,468
高 環	34	360	0.1		1
瓶	495	210	2.9		137
壺	267	1,500	0.2		15
甕	2	900	<0.1		1
甕or甕	4,903	1,200	3.8		732
羽 釜	775	1,500	0.5		33
壺	336	30	11.0		98
瓶	49	1,500	<0.1		1
不明	961				645
小 計	7,519		18.5		1,700
瓦 器	5,986	300	12.2		1,926
陶磁器	301	250	1.2		11
瓦	2,163	3,000	0.7		21
行器類	25				3
小 計	6,475		19.1		1,984
合 計	44,285		88.6		5,255

4区目別

出土遺物	重量 g	標準重量 g	重量比 標準重量	最小 胴体数	破片数
環	283	180	1.5		34
高 環	253	550	0.5		14
Heor高環	705	260	2.7		186
瓶	36	650	0.1		2
壺	915	1,500	0.2		32
甕	78	7,000	<0.1		1
甕or甕	2,432	3,000	1.1		156
鉢	32	500	0.1		2
不明	159				29
小 計	3,291		6.2		416
瓶	51	210	0.4		20
壺	157	1,500	0.1		12
甕	8	900	<0.1		1
甕or甕	1,029	1,200	0.9		128
羽 釜	449	1,500	0.3		23
瓶	63	30	2.1		37
不明	502				219
小 計	2,319		3.8		426